

は大膽に振舞ひ又或者は極めて慎重細心に行動し、又或者は敵に對して出来る限り武俠寛仁の態度で臨む――と云ふ具合に、艦長の精神が直ちに艦の行動に反映して來るものと考へる……」

艦長が部下を訓戒する言葉。「……さつきお前は、潜水艦乗組員は訓練にのみ従事してゐると云つたが、さう云ふ精神で潜水艦に乗り組んで居るものは唯の一人も居らんど。即ち潜水艦乗組員は平時も戦時も變りはないんだ。毎日がたゆみのない戦争なんだ。さうした堅い信念をもつて、我々はまた黙々と海の護りに全力をさへげて居るんだ……」

五、艦長になつた甲は、華々しい武動のない勤務に失望してゐる部下を訓戒し、その部下の父親が四十三潜水艦で職に殉じた意義を反省させる。「……長くも時の 攝政宮殿下より優渥なる御沙汰を賜つた筈だ。お前も遺族なら胸に銘記してゐる筈だ。今それを此處で誦してみよ」と云ふ。

「一同忠誠軍人の自分を盡し従容と死に就きたるは感動する處なり」と三邊繰り返させてゐる間に、部下の心に正しい信念が目覺めて來るのである。この訓戒を受けるのが六號艇神社の前である。

以上のやうな臺詞に代表される「精神」を全面的に劇映畫の中に盛り込むことは、俳優の演技が充分に的確でないといふ困難なのであるが、この「潜水艦一號」は一映畫プロダクション日活多摩川のスタッフで組み立てたものであるから、何うしても演技上の無理が出て來る。従つて、これを普通の劇映畫として觀る批評家の中には、この映畫の缺點に拘泥して優れた内容を見失つてゐる人も少くなかつた。また中には、近頃多い便乗主義の代表作を此處に見出さうとする極端な者まであつた。然し、この映畫は決して、便乗主義の興行映畫と同一視すべきも

のではない。嚴格な企劃の下に少しの誤謬をも含まぬ内容を持つてゐるのである。云ふまでもなく、一個の劇映畫としてみれば形式上演伎上に種々の難點をみるが、これは、製作會社の責任と能力の限界とによるのであつて海軍省の企劃そのものは極めて堅實なのである。

かゝる意味から「潜水艦一號」は、むしろ、演技によつて説明された文化映畫とも云ふべく、啓發用教育映畫の一形態をなすものと云へるであらう。

なほ、この映畫の中で優れてゐる部分を參考のために指摘すれば下の如くである。

- 一、潜水艦乗組員が金比羅さんのお賽錢を樽に入れて流し漁船にたのむところがある。和やかで快よい。
- 二、久し振りに歸省する。母親は軍服姿の息子をみて悦ぶところがある。美しい情景である。
- 三、司令の家庭が和やかな空気を樂しんでゐる。司令の居室の壁に煙草のパイプが幾つもかけてある。豊かで好感を與へる。稍もすれば公式的な缺乏主義が強調されさうなところで、かう云ふ人間味を豊かにみることが好ましい。

四、上記 攝政宮殿下の御沙汰を繰り返し拜誦させるところは、非常に感銘を與へる部分である。

五、新造潜水艦の試運轉の部分は、實寫的效果が著しく豊である。殊に、六號艇遭難現場で登舷禮を行ひ、「海ゆかば……」をきくところは深い感動を覺える。この嚴肅な國家的音樂が映畫のラストシーンに的確に使はれてゐるのは、「五人の斥候兵」が最初であつた。この音樂の嚴肅さに相應しく襟を正すやうな氣持を誘ふ美しさがあつた。

長塚節の「土」は明治四十五年に夏目漱石の序文をもつて単行本に出版され、當時の文壇で地味な注目を受けた作品である。極めて堅實な技巧で貧農の生活を描寫し、鬼怒川地方の自然的環境を浮き出させた長編小説であるから、唯だ漠然とした氣持で文藝を味つてゐるやうな讀者には好まれないであらう。然し、現代のやうに「農民文學」の奨励されてゐる時代には、日本文藝史を飾る最も優れたモニユメントとして、この作品の持つ特殊な長所を詳細に反省すべきである。

日本の文壇を顧つてみても、長塚節ほど農民文學の創作に適した小説家は殆ど見あたるまい。と云ふわけは、一つの地方の雰圍氣と其地方農民の生活とを非常に良く知つてゐる上に、和歌で鍊えた感覺と技巧との訓練をもつてゐる。凡そ「農民文學」と云へば、少くとも一つの地域に四季を通して生活し、季節の變化に伴ふ生活と勞作を詳細に觀察しなければならぬが、それ以上に、自然的環境の四季を敏感に理解し、これを併せて描寫するだけの實力をもたなければならぬ。さう云ふ點が農民文學のむづかしいところであるが、かゝる困難な資格を長塚節ほどに具へてゐる作家は殆どないと云つて良からう。

外國文學の中では、寫實主義時代の代表作家エミール・ゾラの「土」などあるが、その全譯は日本で到底許さ

れぬほど詳細に性慾描寫などしてあるに拘らず、感覺は粗く藝術としての深味に乏しい。これに反して、長塚の「土」は一個の文藝作品として特に優れてゐるので、讀み始めは退屈でも次第に引き込まれ、作者の描く世界の中に強い魅力を感じるであらう。

ところでこの「土」は、演劇化されて再度の興行に良好な成績を示したが、多大な製作期間を要した映畫を完成し、あらゆる知識階級の觀衆から好感と尊敬とを以つて迎へられ、大都市封切館に於いても著しい興行成績を示したやうに推察する。

斷るまでもなくこの特殊現象には、所謂「三年が、り」の待望と云ふサイコロジも影響してゐるであらうし「高級」な藝術作品を日本映畫に見出し得た歡喜も加はつてゐるであらう。然し、作品の出來榮に關する嚴正な判斷を別として、これほどに藝術的な香りの豊かな、そして、一切の技巧の極めて手堅い優秀作が完成したことに就いては、その企劃と製作との態度を深く尊重すべきであらう。

従つて、映畫「土」から看取される特殊な性質を理解し、この作品の著しく優れてゐる點と輕微な缺點とを指摘して置くことは、映畫鑑賞上の問題として甚だ有益であるから、この種の課題に興味をもつ人は、面倒でも原作と照應しながら、映畫作品そのものを出來るだけ詳細に考察する必要があるであらうと考へる。氣のついた要點を主なものだけ拾へば下の如くである。

- 一、この映畫の特徴は、貧農の生活を平面的に描寫しないで、云はゞ「構成的」に扱つてある。
- 二、従つて、クローズ・アップの用法が非常に重要になるわけだが、その點でこの映畫ほど優秀な作品は、こ

れまでの日本映畫に一つもなかつたと云へる。

- 三、その代り、自然の環境や季節の變化に就いては、むしろ、「人物のバック」としての扱ひかたしか行つてない。その點はこの映畫の物足らぬところである。
- 四、全體として、云はゞ一種の「ふくみ」が多く、そのために、原作を豫想して観ないと不明瞭なところが相當にある。然し、映畫作品としては、それ自身獨立してゐるべきものであるから、此處に缺點を認めることは出来よう。

五、けれども映畫では、お品が死んでから後の部分だけが出て來るから、卯平と勘次との感情の距たりが表はされず、勘次は徒らに借金に拘泥してゐるやうにみえる。

六、勘次が娘おつぎに對して抱く複雑な性的感情は、檢閲の關係から描くわけにゆかない。例へば、巫女の口よせなど出すと關係がハッキリして來て、盆踊や婚禮の晩の奇怪な態度が解るのであるが、映畫ではそれが「片手落ち」のまゝになつてゐる。

七、そこで、主要な登場人物が類型化され、卯平は餘り善良になり、勘次は悪役にまわされてゐる。

八、人物の中で最も傑れてゐるのは「おつぎ」であるが、原作からみると明るい性格になつてゐる。勘次は役柄がむつかしいが、與吉の子役は良く出來てゐる。

九、カットとしては、最初のロングと、最後に近い小屋のロングとが、全く意味不明であり、全體の引きしまつてゐる中に入れて考へると甚だ氣になる。

一〇、カメラの使ひかたは、畫面効果を美しくみせることに集中されてゐるため、古風な藝術寫眞に近付きすぎ、そのために季節の感覺を失ひ、時として錯覺を起させる。この點は、現代の藝術寫眞を参照すべきであつたらう。

部分的に指摘すると以上のやうなことが云へるが、作品全體から觀者の受ける印象は非常に良い。少しの挾雜物もなく立體的にまとまり、洗練された趣味と共に一種の氣品を感じる。これほど氣品の豊かな映畫はこれまでの日本には一つもなかつたが、外國にも餘り類例はないやうである。

二

今から數年前になるが、當時「ラヂオ・ドラマ」として相當な成績をみせた脚本を放送局から送つてもらひ、まとめて讀む必要にせまられたことがある。そのとき眼を通したもので私の注意を惹いたのは「爆音」であつた。殊に、これを映畫の原作に使つたら定めし面白いであらうと思つた。

その頃、松竹大船で「少年航空兵」を作り、何か適當な類似の原作があつたら——と云ふ話が出たので、私は「爆音」を映畫化したら遙かに明るい作品が出來て良からうと答へたことがある。日活多摩川で最近この原作を取り上げたのは企劃としても甚だ的確であつたと共に、出來上つた作品も充分注目に價する成績を示してゐる。

映畫「爆音」の全體的な基調は、平和で明朗な農村の生活環境に求められ、それを描寫するために村道の移動撮影が多く使はれてゐる。タイトル・バックの移動は心理的に甚だ不都合で惱まされるが、村長の娘と醫者の娘

と仲良く戯れながら歩く部分や、村長が朝早く自轉車に乗って町へ出かけるところなど、移動の形式を通じて農村の雰圍氣を構成するに充分成功してゐる。

この映畫では方言と地方色とがやはり「構成」されてゐるので、現實の「一地方」を寫實的に表はしたものでないらしいが、雪の光る峯の一部を遠くのぞかせた山村の感じは、非常に透明で清潔であり、ラヂオに對する映畫の強味が良く浮き出でゐる。小杉勇の村長は少し灰汁があり、全體の雰圍氣から幾分遊離してゐる嫌ひがあるが、轟夕起子と花柳小菊との對比は巧妙に使ひこなされてゐる。これも映畫だけに許される面白味であらう。

朝早く村長が自轉車で通るときに、色々のものが出て来る。學校に行くのがいやだと云つて泣いてゐる小供、幼兒を籠に入れて働く農婦、娘に食べさせるため飼鷄を捕へようとしてゐる老人、村長の息と同級生だつた青年達、孫を抱いて道傍に出てゐる便郵局長、等々の間に混じつて、案山子だの豚だの地蔵だの大勢の小學生だのが皆、村長に「お早よう」を云ふ。微笑を誘はれる和やかな風景である。

村長の息子の航空士官が乗つて来る愛國機は、日活の企劃部にきくと九五式だと云ふ。この新しい飛行機で低空飛行や各種の所謂「高等飛行」をみせたのであるから、この部分は全巻の中心をなすものかも知れない。その間に、仰ぎみる村民や家族の心には、歡喜と不安とが錯交するわけであり、さう云ふ點からも相當な長さを要するのかも知れない。然し、作品全體のプロポーションからみて、飛行機の部分が多くて觀衆に長過ぎる印象を與へるのは考慮すべきところである。實際に飛行機をみるときなら、あの長さはむしろあつけないほど短かく感じるであらうが、映畫の中の時間意識はこの場合にも非常に違ふ。

なほ、この映畫で氣の付いたことは、昔のソヴェトの建設映畫が或程度まで聯想される點である。例へば、村長が飛行機の爆音かと思つて耳をすますと、實は障子にとまる一匹の蜜蜂なのである。「全線」と云ふソヴェトの映畫ではこの關係が逆になり、トラクターの音を遠くにきいた農夫はイナゴの襲來かと驚くのである。刈る手をやすめて傍をみると麥の葉にイナゴが一匹とまつてゐるので不吉な豫感をもつが、實は彼等に幸福を約束する新しい機械が来るのである。この部分はこの建設映畫に一種の詩的妙味を與へてゐるが、「爆音」の蜂は唯だ簡單なユーモアに使つてある。そのほか、飛行機を仰ぐ老婆達のフォトジェニクな顔も、ソヴェトの建設映畫に良く出てくるものであつた。これ等の部分も、農村の雰圍氣描寫に攝取すると生きて来る。

この「爆音」に使つてある歌謡は、全體としての確である。息子の電報をみて悦んだ父親の村長が、夜ふけてゐるのに「すまんが一本つけてくれ」と云ひ、「友を撰ばば書を読んで……」の昔親しまれた歌を謡ふところでも、フランス語の動詞變化を音讀してゐる士官の婚約者のところに村長の娘が吉報をもつてゆき、障子の外でいたづらに歌ふところでも、小學生達に圍まれながら道をゆく村長が「今は山中……」を謡ひ次第に人數が増してゆくところでも、皆、長閑な雰圍氣の描寫に役立つてゐる。

これまで堅實一方の製作振りをみせてゐた田坂具隆が、かう云ふユーモアのある田園情調を手がけ、立派な成績を収めたことは興味深い。案山子や豚や地蔵の擬人的表現の中では、地蔵に動作を與へたところに灰汁が残つてゐるが、これまでの日本映畫の試みとしては良く制御してある方である。

それ等、様々の角度からみて興味深いこの映畫が、所謂「時局的色彩」を殊更に示さず、型に入つたやうな結

末をみせることなく極く明朗に終始しながら、而かも、作品として優秀な出来栄を示し、観者に好印象を興へてゐることは良い。

一九六

社會施設物

「小島の春」の原作が何故あれほどに賣れたか？——と云ふ現象それ自身に就いては、また別種の問題があらう。「小島の春」が出版されたとき、私もまた一冊の寄贈を受けたが、かう云ふ本に不適當な和歌が澤山ならんでゐるのに氣が進まず、讀まずに置いてしまつた。北條民雄の所謂「癩文學」が流行したあとのことで、餘計に興味をもたなくなつてゐたのも事實である。

間もなく文壇の中心に活動してゐる作家などがこの本を激稱したりして、色々とチャーターリズムでも問題になつたやうだつたが、私は別に注意をせずにゐた。何等の意味のないものでも文壇では大騒ぎをするし、チャーターリズムも取り上げる習慣になつてゐるからである。ところが、この本を映畫にすると云ふ話をきいたときは、私は少し驚いた。甚だ映畫的でない原作を強ひて映畫化さうとする企劃は、東寶系のプロダクションに折りよく認めるところであるが、それにしても癩病物の映畫化は餘り大膽に過ぎると思つたのである。

それだけに、「小島の春」の映畫化と云ふことに就いて、私はむしろ參考資料としての興味を感じ、さう云ふ意

味でこの作品の完成を期待してゐたのであるが、出来上つたものを見ると、僅少の缺點を除けば想像してゐたより遙かに優秀な作品にまよつてゐるので、更めて此處に別種の問題をも併せて拾ふ氣になつたのである。

斷るまでもなく、癩病が特に陰慘な感じを一般の人に興へるのはその症状の著しい醜さによるので、「不治の病」としての殘酷さから云へば、もつと悲慘な疾患はいくらでもある。従つて、人類の不幸とか神の試練とか云ふものを癩によつて象徴する場合は多く、クリスト教の聖傳にもその有名な示例を幾つか拾ふことが出来るほどである。然し、眼にみる症状の殘酷さが深いほど映畫の材料としては扱ふに困難なわけであるが、「小島の春」は巧みに畫面の醜惡さを避けつゝ、人間的な感情の深さを極く自然に描き出してゐる。而かもこの作品の効果は何處までも映畫的であり、決して、抽象化した象徴に終つてゐないのである。

映畫「小島の春」を構成してゐる材料は、大體に於いて原作中に見出されるやうであるが、それ等の材料を選定し脚色し演出する方法の確なところに、この作品の美しさがある。尤も、このプロダクションの企劃に多く見受ける一種の文學的臭味が「小島の春」にも窺はれる。例へば、和歌を餘り多くタイトルに挿入したり朗詠させたりして、折角良く引きしまつてゐる映畫効果を弱め、感傷的な甘い水で割つたやうなものにしてゐるごとき特に氣のつく點である。然し、また他の半面から考へると、この文學趣味が大膽な企劃を敢てさせたとも云へるし、この作品を最後まで人情の眞實な把握で透徹させ、不自然な結末を何處までも避けて觀者の心に深い感銘を興へてゐる力も、また此處から來てゐると考へ得るのである。

けれども、映畫「小島の春」は、單なる文學的興味から觀るべき作品ではない。既に厚生省ではこの映畫の價

値を非常に高く評價し、この作品を緒として大いに社會の關心を深め、癩病の傳染防止運動に新時代を劃さうとさへ考へてゐると云ふ。文明國の中で日本ほど癩患者の多い國は他にない、と云ふよりも、日本だけが著しい統計を示してゐるのであるから、厚生省の當事者が上記の如き性質をもつこの映畫に多大の社會的價値を認めたとはい、特に注目を要する點である。官廳關係者は現實を直視した作品を嫌ふ傾向があるが、「小島の春」の如く悲惨な寫實を直視し、最後まで人間的感情の正しい描寫で徹底してゐる映畫の價値を認めたことは、劃期的なものであると云へる。

以上のやうに、この映畫の含む特殊な問題は色々あるが、作品そのものについて具體的に注意すべき點を指摘すれば、下の如くである。

一、白砂島。桃の花が明るく美しく咲き亂れてゐる中に小屋が一軒ある。癩女が乾し竿に蒲團をかけてゐる。蒲團をつかむ手が白い手袋をはめて不自由さうに動いてゐるが、人の近づく氣配に乾場をはなれ小屋の中に逃げ込む。女醫が近づいて聲をかけると小窓の板戸まで閉めてしまふ。女醫が入口から入ると、薄暗い中に壁に向つて女がうづくまつてゐる。やさしく言葉をかけても頑にハネつけるだけで應じようとしない。女の側をみると僅かの雛人形が飾つてあり、それが女醫の心を打つ。「淋しいでせうね」と云ふと「うちら何も淋しいことはありませんア」と答へるきりである。然し、女醫の氣持は間もなく通じ癩女は泣き伏す。「こんなに親切にしてもらつたことあなかつたんぢや」と云ふ。

明るい桃畑と癩女の雛祭との組合せが觀者の心を強くしめつける場面である。然し、癩女の父親を尋ねた

あと、桃畑の小屋や静かな海邊が映つて、「おもへ人、はなれ小島の山蔭に、癩女がひとりする雛祭を」と云ふ和歌のタイトルが現はれると、それまでスクリーンをこめてゐたシンとした感じがなくなつてしまふ。この和歌は、たど／＼しい文章の中に入れてみれば甚しく目障りでないかも知れないが、優れた畫面のあとに重複して出て來ると、大切な餘韻を消してしまふ。

二、キヨ子の家。病院に收容されてゐる父親にたのまれて、女醫は娘キヨ子の健康状態をみに訪れる。櫻の咲く庭は人氣なく靜まつてゐる。母親の留守に獨り遊んでゐる可愛い女の子を見出し、リュクサックを置いて近づく。「今日は、お饅頭頂戴な、お母さんお留守、たんば、さう、ぢやお留守番なのね、お利口ちゃんね、あなたキヨ子ちゃんですよ……」と云ふ具合で土産物をやり子供をなづけ、體の診察をする。「……さう、學校は來年、學校お好き、さう、お利口ちゃんね、キヨ子ちゃん、小母ちゃんにキヨ子ちゃんのボンボン見せて頂戴な、ね、キヨ子ちゃんのボンボンに悪い虫々があるかどうか見てあげますからね、さあ、おべべを脱いで、悪い虫々があるたら學校へも行けないでせう、ね、ほら、寒くないでせう、あら、綺麗なボンボンね」と子供を裸體にし、詳細に驗べながら「悪い虫々があるかな、ゐるかな、ゐるかな」と内心の不安をかくし、子供に云ふともなく自分に云ふともなく小聲で獨言しながら診察を終る。「あーよかつた、キヨ子ちゃんね、お利口ちゃんだから、悪い虫々ゐなかつたわ、よかつたわね、さあ、ねえ、おべべを着て、はい悪い虫々ゐなかつたから、お父さんやお母さん、とつても喜ぶわ、ね、小母ちゃんもとても嬉しいわ、よかつたわね、よかつたわね、小母ちゃん、こゝまで來た甲斐があつたわ……」と云ふ間、啜り泣きの聲をの

み、そつと涙を拭ふ。それからキヨ子の髪をくしげづり、着物を直し、櫻の樹の下に立たせて幾枚も寫眞を取り、置手紙を残して歸る。父親と母親に送る女醫の心づくしである。「さよなら」と云つて子供に別れを告げると、それまで唯だ首を動かして答へるだけだったキヨ子が、女醫のあとを追ひ途中でとまつて「おばちゃん、さいなら」と云ふ。女醫は「さよなら」と答へて少し行くと、また追つて来て「おばちゃん、さいなら」と云ふ。これを三度ほど繰り返す、それ切り追つて来ない。何うしたのかと思つて女醫がもどると曲り角のところにかくれてゐて「わーッ」と云ふ。女醫はキヨ子を抱き上げ、また別れる。

この場面は、この作品全體の中で最も傑出してゐる部分である。畫面には少しも暗い影がなく無邪氣に明るいのであるが、涙なくこの場面を観る人はないであらう。非常にシンとして深い感動をそゝる部分である。三、有力者堀口家。訪ふ女醫と應待する父親のシンミリした會話がつゞく。「あの子が病氣になりましたから召使も雇はずに親子三人で、こうして薄氷をふむやうな暮しをしながら……」と云ふ言葉をきいたあとで患者の室へ妻から案内される。妻は錠のおりた板戸をあけ、階段を上り、廊下に女醫を待たせて室に入り、娘の髪を直してやる。女醫はそれを鏡でみる。娘は盲になつてゐる。癲患者明石海人の和歌を張り、アルバムを置いてゐる。眼にみえぬアルバムには、この癲女の女學校時代の快活な姿が残つてゐる。テニスのラケットを握る手がきかなくなつて癲と知り、自殺をと思ひ立ち出ようとする障子の外に母をみる。そのときのことを幼ない和歌に綴つてゐるのである。

この場面も觀者の心に強くひゞく。ところがそのあとに、明石海人のたどくしい和歌を女の聲で朗詠する部分があるが、これは「小島の春」の映畫中で特に拙劣な文學的臭味である。その朗詠が五首もつゞくのであるから、可成り強い灰汁を感じさせる。癲患者の體驗を詠んだ和歌は元來の性質が審美的鑑賞の對象に適するものではなく、もつと別種な表現形式にぞくするのであるから、朗詠すべきものではないが、映畫の中に組み込むのは餘計に相應しくない。

四、船着場。村長は嫌がる癲患者の農夫を説得して船に乗せるところ。子供や妻との「生別」である。畑からおくれて馳けつけた妻と娘が「お父つあーん」と呼び、「顔を上げてつかあせえ」とたのむ。息子の賢ちゃんも去りゆく船を追ふて海岸の壁堤を走り、岬のところから遠く小さい船を眺めながら、何とも知れぬ幼ない憤りを感じ、「村長の禿頭、村長の馬鹿野郎」と叫んで泣聲になる。生別の場面をこれほど深刻に且つ眞實に描いた映畫を私は他に知らない。このラスト・シーンによつて、この映畫は一層なぐさめのない作品になつてゐるが、全巻を通じて無慈悲なほどに人間苦を直視し人情を描出して來たのであるから、この結末でなければ最後のしめくりがつかなくなるに相異なる。

11

藝術映畫社の作品「保姆」は、戸越の保育所を扱つた六巻物の文化映畫である。この保育所は昭和十四年の春に新築された託兒施設で、現代建築の觀點からも劃期的な意味をもつ建築施設である。

私が設計者に伴はれてこの保育所を訪れたのは、新築して間もない初夏の午前であつた。省線に接続する郊外

電車を降りると、小さい住居の狭く建て込んだ低い地域の泥溝が堀つてあるあたりにある。保育所は、かう云ふ環境に囲まれながら、明るく和やかに建つてゐた。映畫に出て来る二人の保母は忙しく快活に働き、子供達の世話をしながら、私に色々の話をしてくれた。子供達も人なつつく、私を取りまき、手を引きながら「オジサン」と呼び、少しもいぢけたところがなく、可愛がられて育つてゐる感じであつた。

子供達は、廣い室で遊戯を終ると、庭に出て勝手に遊び、これも映畫でみるやうに、幼ない争ひをはじめる者もあり泣き出す兒もあつたが、概しておとなしく楽しさうに遊んでゐた。その間、二人の保母は、遊びかたを教へて仲間に加はりながら、斷へず氣をくばり、争つたり泣いたりする兒があると、直ぐその世話をしてやつてゐた。

一時間ばかり観てゐるうちに、保母達の働きかたが私の感動を誘つた。毎日朝から夕方までこれを繰り返してゐるのでは、いくら馴れても大變だらうと思つた。心も體も疲れきつてしまひさうに思はれた。然し保母達は、快活で親切で丁寧だつた。

此處の中餐は、母親達の勤め時間が早いので、それに順じて早くしてある。子供達は手を清潔にして食卓につく。卓布をかけ花を挿した食卓に子供達が列ぶと、一人の子供が手を洗つてゐないのがわかり、保母はその子供を手洗所につれて洗つて來させる。それから、その日の「おかず」の名を教へて食事をはじめさせるのである。

この保育所は、南に向つて庭とテレスを開き、北側に道路を負ふて建つ。コンクリートの廣いテレスと直接につづく四つの室は、何れも五面になり、床からのガラス戸が各室とも各二つの面を廣くテレスに開いて、外氣

と室内とが一體となるやうに出來てゐる。一番大きい室が遊戯室で、他の三つの同型の室は、年齢別に教へるにも都合よく、卓を連ねれば食堂にもなる。二階は細長い室に小型のベットを澤山ならべて午睡につかひ、醫務室にも役立つやうにしてある。事務室以外の附屬室では小さいトイレットが微笑を誘ふが、各自の子供が自分のことを處理するやうに柵のつけかたなど注意してある。自分のことを自分でするやうに教育するため、物をかける位置などに氣をつけてゐることは、この映畫の家庭訪問のところにも出て來る。

戸越保育所の建築設計者は圖師嘉彦氏である。氏はこれより以前に、吉祥寺にある前進座の集團生活、訓練施設を設計してゐる建築家である。氏の説明によると戸越保育所は、僅か二百坪たらずの敷地であるため、その狭い敷地内に適するやう案考したものであると云ふ。子供達の遊ぶ機具も販賣價額が高いので思ふやうに備へられなかつた由である。然し、私の觀た限りでは、この小規模な私設保育所として、相當に良くまとまつてゐたやうに思はれる。唯だ、テレスに開けてゐるガラス戸が敷居のところまで大型ガラスになつてゐたのが、少し不安な感を誘つた。けれども、映畫になつたものをみると、この危険を或る程度まで防ぐ方法が設けてあるやうにみえた。

この保育所の規模を示す重なる數字を列記すれば下のごとくである。

保育室 六六平米 (三室接続)

遊戯室 四九・五平米

午睡室 六〇・五平米

テレス 約二〇〇平米
庭 二五〇平米

保母の数は、私の観た頃は三人であつた。勤務時間は午前六時半から午後六時までで、その時間内を三人が適宜に分擔してゐた。所在地が工場地帯に近い勞務者居住地であり、子供の兩親には男女の勞務者が多いやうである。然し保育所の壁に張つてあるこの近傍の地圖をみると、相當な距離から託兒に來てゐるものもあるらしい。大體以上のやうな性質をもつ託兒施設であるから、二重の意味で文化映畫の適材と云へる。即ち、一面に於いては、託兒施設として劃期的なものであると共に、他面に於いては、この種の施設の有する社會的意義が現在特に大きいからである。従つて私は、寫眞専門學校の學生に講義する際、報道寫眞の適材の一つとして戸越保育所を良く引合に出してゐたのである。藝術映畫社がこの保育所を選定して堅實な文化映畫にまとめたことは、非常に的確な企劃と云ふべきであらう。

映畫「保母」は、この作品の主題を極めて適當に扱ひ、保育所の仕事を全面的に指摘しながら、而かも、託兒所の雰圍氣を手際よく描寫してゐる。撮影技術も優れてゐたし編輯もまとまつてゐた。題名が「保母」であるからこれで良いが、建築の性質が上記のごときものであるので、建物をもう少し鮮明に描出する少數のカットが入つてゐれば更に良かったであらう。然し、これだけでも、最近の文化映畫中、稀にみる優秀作である。

兒童の世界

一

「風の又三郎」は詩人宮澤賢治の作品を映畫化した興味ある試みである。この映畫は、肌「兒童映畫」として企劃されたものではない。普通の興行映畫であるが、扱つた材料が兒童の世界であり、主題は子供らしい空想である。従來の興行映畫界では、坪田讓治の作品を原作に求めることが多く、松竹で製作した「子供の四季」や「風の中の子供」等があるが、この二種とも餘り好感のもてる映畫ではなかつた。むしろ、兎もすれば兒童主演の映畫に親はれがちな灰汁を、多分に含むものであつた。然るに今度、日活多摩川で製作した「風の又三郎」は、さう云ふ灰汁を少しも含まず、嫌味なところが全くなかつた。そして、それ以上に、良き兒童物に散見する一種の詩的雰圍氣を豊かに盛り込んでゐる作品であつた。

部分的に云ふと、この映畫の特に優れてゐるのは、初めの三分の一ほどの部分である。それから、最も出來の悪い部分は、山葡萄を取りに行つた子供達が、風に就いて問答をする部分と、山の中で道に迷ふ部分とである。初めの三分の一は、編輯が非常になだらかで、子供の演技も極めて自然であり、軟調のカメラも全體の雰圍氣に良く合つてゐた。それに對して、風の問答に従つて何の面白味もない畫面が伴つたり、セロファンをかぶつた又三郎が現はれたりするあたりは、幼稚と云ふよりもむしろ愚劣であつた。従つて、この映畫が假りに若し、初め

の三分の一ほどの調子で全部統一され、真中の愚劣な部分を除いてあるとしたら、非常に優れた作品となつたであらう。こんなことは常識でわかる筈だと思ふが、恐らく、作者の練りかたが足りなかつたのであらう。

一種の詩的雰圍氣を持つ原作を扱つた児童主演の映畫としては、ドイツ映畫「少年探偵團」があつた。エリヒ・ケストネル原作「エミールと探偵達」は、この作家特有の非常に優れた詩的雰圍氣を豊かに含むものであつたが映畫の方はそれからみると遙かに平面的で、原作を先に楽しんだ者には餘り感心出来なかつた。かう云ふものになると、現實の子供を使ふより、全體を線畫で統一してしまふ方が、むしろ原作に近い味を出せると思つた。然し、「風の又三郎」の場合には、自然の背景を寫眞的に美しく描き、子供の「習性」を巧みに浮き出させることによつて、充分にまとまつた劇映畫に完成し得るものである。

なほ、この映畫で興味を惹くのは、北海道から來た三郎が諷ふ奇妙な童謡の魅力である。諷としては變に間が抜けて調子のはずれたものだが、何となしに「風の又三郎」の空想に相應しく、一種のユーモアをも含み、この映畫の基調をまとめる不思議な効果をもつてゐるのである。そして、かう云ふ効果は、文字で綴られた原作にはなく、音をもつ映畫に與へられた一つの特權なのである。

二

「白墨」は児童映畫の製作に多くの經驗を重ねて來た東日・大毎が最近に完成した作品である。この試みのシリーズを過去の摸索時代から一つづつ追想するとき、非常な進歩を感じさせる作品である。のみならず、今回の

「白墨」は、かう云ふ種類の映畫として殆ど完全に近く、私が以前から抱いてゐた一つの希望を實現してくれたやうな感を誘ふのである。

この映畫の優れてゐる點を列記すれば下の如くであらう。即ち――

一、白墨と云ふ兒童にとつて特に親しみ深く、兒童の日常生活の中に溶け込んでゐるものをモチーフとして、其處に必然的に結び付いて來る一種の社會道徳を、極く自然に導き出してゐる。單に兒童生活の「風景描寫」に止まらず、自づからその中に一定の教訓を盛り込んでゐる。所謂「教訓映畫」の臭味を少しも含まず、而かも「子供の社會道徳」をテーマとして全體をまとめてゐる。

二、自然の環境描寫が的確に扱はれ、その中に子供達が「風景人物」として組み込まれてゐる。児童映畫の場面には何うしても自然が多くなるが、演技だか實寫だか區別がつかないやうに子供を扱ふ必要上、環境の描寫は殊に大切である。然し、この映畫で特に良く出來てゐるのは、海岸の崖に沿ふ道路の場面の大膽な遠寫の扱ひかたである。夏の陽に明るい道に子供が小さくみえる。白墨で蟹の繪を描くところから白墨を取り合ふあたりまで、大膽にカメラを遠くするながら、子供達の姿を小さく自然の中に溶け込ませ、これによつて演技の灰汁と缺陷とを除き、畫面効果を快よくみせてゐる。

三、小學校の低學年兒童を扱つた映畫――と云ふものが、既に試みとして興味深く注目に價するのであるが、この映畫に出て來る子供達の中には變に「こましやくれた」兒や「にくにくしい」兒がゐるので、さつぱりして感じが良い。これは私の趣味かも知れないが、私は一體に、亂暴な兒、意地の悪い兒、小剛口な兒な

どの出て来る映畫を好まない。考へ違ひや過失があつても單純な無邪氣さを持つ子供達だけで統一されてゐることが望ましい。さう云ふ點でもこの映畫は氣特が良かった。

「お魚の行列」を面白く黑板に描く先生にはじまり、「白墨をもつてゐると落書がしたくなるだらう」と訓へる先生に終るこの映畫は、全卷を好感をもつてみる事が出来た。かう云ふ作品が出て来たことは眞とに悦ばしい次第である。

三

「小さな船長さん」は諧謔的な味を含んだ兒童繪本（横山隆一作）を映畫化した試みである。かう云ふ性質の映畫としては好感をもつて観ることの出来る小品物である。然し、原作が兒童の讀物であるに對し、映畫はむしろ大人の觀るものである。

水上生活者の兒童を教育する學校は、かつて報道寫眞によりグラフ形式に組まれたこともあるほどで、一般社會から興味をもたれてゐる世界である。この世界の中から、應召する父親と子供とを選び出して、船に對する幼ない愛情を描き、水上生活者の環境を扱つた作品である。

この映畫を子供が觀るとすれば、時局に因む一種の寂寥感が餘りに暗い影響を與へるかも知れない。殊に現在の如く、職業によつては生活上の問題が深刻化し、當局もまたその對策に意を傾けてゐる際であるから、「現在」としては考慮すべき點を含んでゐるかも知れない。けれども、解釋の仕方によつては、この映畫は一種の「光明」

を與へるものとも云へる。その點を下に記して置く。

この映畫に出て来る水上生活者は、現代の都市生活の中に入れてみると、佗びしい人達である。かう云ふ人達の生活を何かの折りに瞥見すると、私は「生活」と云ふものに就いてその暗い半面を身近かに考へさせられる。さう云ふ生活を想像しただけで甚だ憂鬱な氣持になる。さう云ふ生活をしてゐる人達の中に「活きる悦び」があるだらうかと思ふ。ところが、この映畫をみると、このゴミ／＼した暗く汚ない環境の中に、子供達は親しみ樂しんでスク／＼と育つてゐる。外部からみると住むに堪へないやうな環境の中に、この世界だけの持つ樂しい空氣を見出し、それを享樂してゐるのである。生活環境への「順應性」と云ふものは、誇張して云へば、神が人間に授けた一つの恵みであるが、さう云ふものをこの映畫は感じさせるのである。

大都會の廣大な邸に住つて、廣い庭園や贅澤な「子供室」をもつ富裕な家の子供達より、地方の村落で自然の環境に親しみ馴れてゐる兒童の方が、客觀的にみて遙かに明朗である——と云ふ氣持を抱く人は多いであらう。然し、水上生活者の佗びしい環境の中に、これだけ素直に健康に、歡喜と和樂をもつて子供達が育つてゐることを感じる人は餘りあるまい。尤も「小さな船長さん」の世界は要するに繪本の世界であつて現實ではない、現實はもつと暗い——と云ふことも考へられるであらう。けれども、これは、何處までも「映畫」の世界である。映畫の中でだけでも、暗い現實が明るく住み心地よくなれば、それで良いのである。

「小さな船長さん」は、映畫として特に優れた作品ではないが、少くとも、以上に略記したやうな問題を含んでゐるのである。

中央公論社発行の「綴方教室」は、綴方の指導教育上からみても興味深い参考資料であるが、この書物の前篇をなす貧しい一人の少女豊田正子の作文は、一つの文集として極めて注目に値する。この文集から一般讀者の受ける感銘が、何處まで筆者の貧困な生活から来るか、何處まで文章の持味に基くか？——それを判断するのは相當むづかしいであらう。然し、正確な記憶力と素直な描寫技巧を持つこの筆者が、悔ましい貧困のうちに少しも心の明るさを失はないところに、文集全體を通ずる和やかな快さがあり、さう云ふ筆者の主觀が殊更に讀者の好感を誘つてゐることは甚だ大切な點である。

従つて、この文集を原作に求めて映畫を製作する場合には、一面に於いては極く素直な生活描寫でなければならぬと共に、また他の一面からみると、無邪氣な明朗さを持つものでなければならぬわけである。餘りにも悔ましい貧困生活が無慈悲に描き出されてゐる觀者の心が暗く壓迫されるやうなことになる、原作の美しい味ひが全くなくなるばかりでなく、映畫作品としても重苦し過ぎるものになる。

けれども、この映畫は、同時にまた何處までも正しく子供の世界を描いたものでなければならぬ。大人の扱つた子供でなく、子供らしい子供の世界でなければならぬ。ひねくれたところやこまじやくれたところの少しもない、本當に無邪氣な氣持で一貫したものでなければならぬ。往々にして從來の興行映畫に見受けられたやうな灰汁を、清潔に洗ひ去つた作品にまともななければならぬのである。

さう云ふ條件から觀ると映畫「綴方教室」は、殆んど理想通りの優れた出來榮をみせてゐる。登場人物も總て素直で、悪達者なところなど少しもなく、各々の人物の性格描寫として氣持良くまとまつてゐる。中でも、正子と二人の弟達は、子供らしい子供の演技として非常に快よい。上の弟が黙つたまゝで人を見る格好など殊に良い。これほど子供の姿が、自然の儘に描かれた映畫は先づ無かつたと云へる。それだけでも既に劃期的な作品なのであるが、正子の兩親の住む貧困な生活環境の描寫も手際良く浮き出でた。全體として過剰な演技を使はず、時としては、動きも台詞もないところに、反つて優れた効果を盛り上げさせてゐた。

これほどにこの映畫を成功させた原因の一つは、的確に選定された原作に求むべきであらう。豊田正子の綴方は、これを原作として映畫の構想をまとめ、仕草や台詞を決定するに甚だ都合なのである。然し、それだけではない。この原作を巧妙にピク・アップしたりアレンジしたりする手際も良く、原作に缺けてゐるものを補ふ方法にも申し分がない。そこで、この映畫を充分に理解するためには、先づ映畫を一覽し、次に原作を大木訓導の文章と共に讀み、兩者を詳細に比べて考へ、其處に他の「兒童主演」の映畫を持つて來て並べてみる——と云ふ程度の準備が是非とも要る。

斷るまでもなく、この映畫の一つのテーマになつてゐる綴方教授上の方針に就いては、教育論上の異説があるに相異なる。「有りのまゝを正直に書く」ことに就いても、この映畫に出て來るモデル問題以外に考慮の餘地を残してゐるものと云へよう。然し、映畫作品としての「綴方教室」は、決して「教育映畫」ではないのであるから上記の議論は別問題として鑑賞すべき性質の作品である。若し取りたて、問題とする點があるとすれば、それは

大木先生の言葉使ひである。「君は……だらう」と云ふやうな語調と、「あなたは……でせう」と云ふやうな使ひ方が混じり合つてゐるところが氣になるが、この二つの語調の使ひ方は、もつと何うにかならなかつたであらうか？

冬の朝、正子が井戸端で顔を洗ひながら弟に向ひ、「冬の香ひ」を感じさせようとするところがある。この點は、正子の文章の内容には關係がないが、この少女の氣持の描寫には非常に大切な部分である。季節の香と云ふものは實に不思議な魅力をもつてゐる。かう云ふ言葉を捕へて來て、貧困の街に住みながら新鮮な感覺を育て、ゆく子供の主觀を浮き出させてゐるところなど、何でもないうで大切な技巧である。

この程度に優秀な兒童主演の映畫が出來たことは極めて悅しい。この映畫を観ることを多くの人達にすゝめる私は、この作品のロケーションに使はれた實際の小學校をも訪れてみたいと思つてゐる。

ドイツ映畫と指導精神

一

今回の大戦中、一九四一年にドイツ國內で上映された「希望音樂會」(Wunschkonzert)は、國策娛樂映畫として傑出した作品であり、貴重な參考資料である。この映畫は、今度の大战中ドイツが初めて試みた實際の「希望音樂會」に取材したものである。ドイツでは、前線と銃後とを密接に電波で繼いでゐる。前線の戰士達は、銃

後の慈善團體に醸金し食糧を送り、これに對して銃後は、前線の戰士達から希望して來たプログラムで慰安放送を行ふ。そのほか、出征兵の家で出産があつたものも前線に知らせる等、マイクの機能を出來るだけ利用し前線と銃後を結び、戰爭遂行のため活力の源泉とする意義深い試みである。この試みに取材して、これを劇映畫にまとめたのが「希望音樂會」である。

一九三六年の夏、ベルリンに開催されたオリンピック大會は、第一次大战後の困窮から更生したドイツの「民族の祭典」であつた。ナチス政權の確立した一九三三年から三六年に至る期間は、第一次四ヶ年計畫の實施期間である。この間、失業救済を目標とする積極政策が實施されたが、その成果の紀念を兼ねたオリンピック大會はドイツ國民にとつて追憶の新しい祝典であつた。續いてドイツは第二次四ヶ年計畫を實施したが、その目標は國防力の擴充にあつた。そして、的確に擴充された軍備によつて、今回の第二次大战の優れた成果が得られたのである。従つて、歐洲新秩序の確立を目標として戦ひ抜かうとするドイツ國民にとつて、三六年のオリンピック大會を回顧することは、特に感慨深い筈である。劇映畫「希望音樂會」は、現在の大戦下に公開された映畫であり劇的構成の發端を一九三六年の夏に持つのである。

オリンピック大會發會式の直前、偶然に知り合つた青年士官と娘とが急いで觀覽席に入る。ヒットラー總統以下の入場についで神火は聖盆に炎へ、序曲の響はドイツ國民に新しい「時代」の希望を感じさせる。この祭典に結ばれた二人は、士官の休暇を楽しみながら婚約するのであるが、士官は原隊からの緊急命令で赴任地を秘したまゝ娘に別れなければならなかつた。彼は夜明まへテンペルホーフ飛行場を出發し、スペインのフランコ陣營

に赴く。軍の命令で任地からの通信は出来ない。一切の私情を棄て、軍務を厳格に遂行してゐるのである。

一九三九年、イギリスの保證なるものを信じたポーランドはドイツに向つて挑戦し、國民は銃をとつて起つことになつた。その中には、肉屋、パン屋、音楽學生、小學教員、等があり、娘の幼な友達の航空士官もゐる。これ等の人物の各々に就いて、家庭の生活と前線の生活とが描かれてゐる。

休暇のとき、皆自分達の家庭を訪れる。小學教員は教へ子達から贈られた花束をもつて、出産の近い妻を訪ね二人で靜かに親しんでゐる。音楽學生は老母のもとで愛用のピアノに向ひベートーフェンのソナタを弾く。カフェーが入つたと云ふので、呼びに来る戦友仲間も、共に靜かに演奏をきく。

或る町の戦鬪の折、霧の深い夜である。偵察に出た兵達が霧に迷つたときの集合地點は寺院である。寺院に音楽學生が見張つてゐる。視界を失つた戦友達が歸れずゐるのを察し、決心してパイプ・オルガンを弾きはじめる。この音をきいて敵が猛烈に撃つて来る。迷つた戦友達は霧の中にオルガンをきき、集合地點に歸ることが出来たが、音楽學生は炎の中にオルガンに向つたまま、敵弾をうけて戦死してゐる。

希望音楽會のとき、パン屋と肉屋は前線で捕へた豚を銃後に贈るため、朗讀用の稚拙な詩を作り貨車に乗つて歸つて来る。出演のとき詩稿を見失ひ任務報告だけしたので反つて愛嬌があり、銃後の明るい笑ひを誘ふ。音楽學生を失つた母親の希望で、亡兒の愛誦歌「お休み、お母さん」が演奏される。母親は空しいピアノの側に常の如く坐り、亡兒の寫眞をみながら、獨り寂しくこの演奏をきいてゐる。音楽會につづいて出産報告がある。前線で耳を緊張させてゐた小學教員は、男兒誕生、母子健全の報に戦友達から祝はれてゐる。

この音楽會に、士官は娘と會つた日のためオリンピック大會序曲を希望してゐる。希望した士官の名と共に演奏される序曲をきき、娘は士官の誠實を推察する。そして、居所を調べてもらひ手紙を出す。空軍基地にゐる士官は、娘の幼なじみの部下と軍務につくしてゐる。ハンブルグで娘と會ふ約束が出来、娘はいそ／＼として旅立ち、會合にきめたレストランで待つてゐる。然し士官は、敵艦隊の所在を偵察するため進んで任務につき、愛する婚約者に會ふ大切な機會を、何事もないやうに思ひ切る。偵察の任務を終り敵艦の位置を報告してから乗機は敵弾をうけ、負傷した部下に代つて操縦しながら海上に不時着し、浮囊に部下を乗せ、救援に来た潜水艦で歸る。そのとき、部下の所持する娘の寫眞をみて自分の婚約を斷念するが、病院に幼なじみを見舞に来た娘に會ひ、誤解がとける。

この映畫の劇的構成をみるに、注目すべき最も重要な點は、「誓ひの休暇」と「希望音楽會」との比較である。假りに若し、この二つの作品を同時に映寫してみるとすれば、ドイツ國策劇映畫の特質を理解する上に、非常に貴重な參考資料が提供されたこととなるであらう。然し、「誓ひの休暇」は日本で上映禁止となつた作品であるから、さう云ふ機會は得られない。従つてこゝに要點だけを抽象して記し、概念のみを指摘するに止めて置く。

劇的構成の大體の形式からみると、「誓ひの休暇」と「希望音楽會」とは相當程度の共通性をもつてゐる。然し前者は一九一八年の状態を「反省」の立場から扱つたものであるが、後者は現在の事情を「理解」させる建前から扱つたものであり、其處に根本的な相異が窺はれる。「誓ひの休暇」に於いても戦士の規律を重んずる精神は中心のテーマであるが、國內窮乏の悲惨な状態は鋭く描寫されてゐるし、銃後の國民生活の無秩序な事情は批判的

な態度で扱はれてゐる。これに對し「希望音樂會」は、何處までも全線と銃後とが緊密な精神的聯關を保ち、國家的義務と個人的生活とが的確に調和してゐるのである。

「希望音樂會」の優秀さは、この指導精神が十分に注意深く、而かも、娛樂映畫としての豊かな味ひを含んでゐるところにある。二作とも人情の必然性を極めて自然に扱つてゐるが、「希望音樂會」のごとき特質の作品にその確な表現をみることは、特に注目に價する。何處までも人情に即して自然であり、しかも、啓蒙せんとする内容は十分に徹底してゐる。公式的な觀念を遊離させて觀衆を倦ますごとき缺陷が少しもなく、それでゐる主旨は完全に透徹させてある。

「誓ひの休暇」の中で嚴肅なほどに美しく描かれてゐるのは、音樂學生を扱つた部分であるが、「希望音樂會」でも其點は同様である。私は歐洲滞在中、事情の許す限り音樂會を訪れてゐたが、會場内の雰圍氣が特に美しく氣持よかつたのはドイツだけであつた。實で敬虔で、靜寂な熱情を包んでゐたからであるが、この美しい國民的感情が、上記の二種の映畫の中に極めて自然に攝取されてゐるのである。私が長期のイタリア旅行を終つて眞冬のドイツに入つた頃は、ライオン地方には未だ聯合國の軍隊が鐵甲をかぶつたまま、街路の要所にたつてゐたし、混亂したドイツ人の心理を反映する廢類的な表現派の繪畫が主要な美術館の内部にまで侵入してゐた。然し、ドイツ古典音樂を演奏する會堂の雰圍氣は嚴肅なほどに美しいものであつた。敵國の首都パリでは、戰勝記念日の頃にも主要な音樂團體が大規模なベートーフェン祭を行つたほどで、コンセルトワールはじめ何處でもプログラムの大部分はドイツの古典音樂だつたから、優れた音樂會は多く聴く機會をもつたが、場内の雰圍氣には嚴肅さ

が缺けてゐた。それだけに、イタリアからミュンヘンに来て、敗戦の苦難を受けつゝあるドイツの音樂會で受けた美しい雰圍氣には心を打たれた。そして私は、この敬虔な美しさを、ドイツ旅行中到處と感した。かう云ふ國民性が、この二種の戰時劇映畫の中で、音樂學生の部分をも美しく嚴肅に盛り上げてゐるのであらう。殊に「誓ひの休暇」の中の音樂學生を扱つた部分は、靜寂で簡素な中に感銘の深いものがあつた。休暇の短かい時間に、音樂學校を訪れた學生が、恩師の好意で自分の作曲を演奏し、樂譜を恩師に委ねて去る——と云ふだけの描寫であるが、私は、音樂を織り込んだ一切の映畫の中で、この短かい部分ほどに心を打たれた經驗を他にない。

配役上この映畫の中心となつてゐるのは、云ふまでもなく士官と娘である。オリンピック大會當時の少尉は後に大尉になつてゐる。映畫の劇的進展につれ、この士官の性格も軍人として成長してゐる。また、私的生活と公的任務とに於ける態度の轉換も、極めて自然であり素直であり、なだからかである。此處にも決して、公式的な觀念の遊離がなく、觀衆に少しの摩擦も感じさせない。好ましい士官の姿であり、部下に對しては良き上官である。娘の幼なじみの部下(少尉)との間の三角關係も、人間的な感情の素直な描寫の中に、何等の灰汁もなく自然な解決に導いてある。

私はこの優れた國策娛樂映畫をみながら、一九四一年のドイツに於ける觀衆の氣持を想像してゐた。そして、久し振りでみだ的確で健全な劇映畫の面白味を感じ、同時にその良好な社會的効果を考へてみた。まことに感慨無量である。

ウィリアムの映畫「祖國に告ぐ」は、「最後の兵まで」と同様にリッターの監督作品であるが、第一次世界大戦を扱ふ方法に於いて、この二つの愛國映畫を比較することは興味深い。

「最後の兵まで」は、或程度まで第一次世界大戦とドイツの作戦とを批判的に扱ひながら、大なる目的の下に個人の存在と感情とを犠牲にする國家的精神を重點とする作品であつた。これに對して「祖國に告ぐ」はフランス軍隊とフランス民衆とに正常な敬意を表しながら、國家の大目的のため犠牲にされる個人の感情に主題を求める映畫にまとまつてゐる。兩者とも、國家と個人との正しい關係を強調した映畫であるが、何處までも人間性を尊び、個人の人情をいたわり、決して類型化した「愛國物」や、皮層的なヒロイズムに墮してゐないところ、注目を要する作品である。殊に「祖國に告ぐ」では、フランス人の描出を何處までも尊重し、決して皮肉化したり漫畫化したりしてゐないところ、現在の對佛政策と照應してみると非常に興味深い。對外感情を的確に考慮することを要するこの種の映畫として、極めて深刻な教訓を含む作品と云へる。

「祖國に告ぐ」の構想は下の如き要素から成立してゐる。フランスの空で職務に殉じた飛行機がある。その乗員の一士官は墜落後意識を回復し、戦死した戦友の遺骸と共に飛行機を焼き、傷を忍んで敵の領内を脱出しようとしてゐるうち、疲労しつくして國道に倒れる。其處へ、前線慰問の旅藝人の一座が通りかゝり、花形の踊り子の純真な同情に救はれ、審問の危険をかくまわれ負傷と疲労を養はれてゐるうち、娘の心がこの青年から離れ難い

ものになる。感謝と困惑とも拘らず、士官の心は祖國愛の氣持と軍人としての責任感とに充ち、遁れる機會を求めてゐる。ある前線の近くで藝人の仲間に入つてゐるとき、眼の前に楽しむ敵兵達をみ、勞役に従ふ戦友達をみる。戦友達と連絡をとり脱走を計畫してゐる日、士官はスパイとして密告され捕はれる。やがて軍法會議となり、脱走に成功した戦友を祝しながら、娘の純情を傷けることなくスパイの疑ひから解放され、飛行將校として禁錮されることとなる。

以上のやうな構想の映畫であるから、旅藝人の生活を扱つた部分は、大戦當時の劇映畫に通常見受けられるものと異らない。然し、この作品が國策的なドイツ映畫であると考へるとき、二つの點で著しい注目を誘ふ。即ち其一は勞役に従ふドイツの捕虜を描いた部分であり、其二は軍法會議に於けるフランス軍を扱つた部分である。國策的な軍事關係の劇映畫の中に、敵國で勞役に服する自國軍人の捕虜を描出すると云ふことが、既に肚のすわつた試みなのであるが、軍法會議に於ける敵國軍人の威嚴ある態度と公正なる判斷とを「禮節を以つて」扱つてゐるあたりは、第三國の觀衆の眼に非常に快よい印象を與へるばかりでなく、國策映畫としても極めて至當な企劃であると云へる。その主要な理由は下の如くである。

一、ドイツの觀衆にこの映畫をみせる場合、フランスの軍法會議が、武人らしい規律と法廷らしい公正さとの中に嚴肅な雰圍氣を示してゐることは、本來から云ふと絶對的な必要條件である。何故ならば、ドイツ國民の心に正しい意味の愛國心を呼び覺し、對外關係の嚴肅さを的確に理解させるためには、決して敵國の軍人を輕視するやうな扱ひかたをしてはならない。むしろ、敵國の實力を明瞭に認識させてこそ、自國民の國家

的意識を堅實に涵養することが出来るからである。

二、更にこの映畫を現下の對外政策に結び付けて考へ、フランス人がこの作品を観る場合を豫想するとすれば「祖國に告ぐ」の原名 *Patriotism* は、ドイツ人と共にフランス人をも指示するものとなり、フランス人からみても決して嫌惡すべき作品でなく、むしろドイツ映畫であると云ふ點に或種の好感を豫期し得るものと云へる。従つて、對外政策の立場からみても、かう云ふ扱ひかたをするのが至當であると認むべきであらう。この二つの點は非常に教訓的であるが、中で最も印象に残る場面は下の通りである。軍法會議の間にドイツ軍の砲撃がはじまる。會議室の近くに落ちた砲彈の破片は窓ガラスを破り、論告中のフランス士官の腕に散る。然し、當の士官は泰然自若として腕の破片をはらうだけで、嚴肅な會議はそのまゝ繼續されてゆく。それからまたドイツ將校の最後の陳述があつたのち、軍法會議の裁決をやり直し、「偏つた判斷」を訂正して至當な判決に導くあたりも、法の精神を敵國の軍人に對しても守り、少しも感情に揺がぬ嚴肅さを示してゐる。この二つの部分はこの映畫全體の中で最も優れてゐる場面であり、ドイツ映畫の國策的企劃そのものに尊敬の念を抱かせる要點である。敵國を徒らに漫畫化したり、故意に輕視するやうにしむけたり、さう云ふ方法をとつてゐる限り、決して國策映畫の實を擧げることが出来ない。正しい國民的自覺は對外關係の嚴肅さを自覺させるところに涵養することが出来る——と云ふことをハツキリ理解してゐる映畫である。

尤もドイツは、かう云ふ劇映畫を製作してゐる他の半面に「ポーランド進撃」の如き作品をまとめ、各種の軍事文化映畫とニュース映畫とを國の内外に發表してゐる國である。ドイツのニュース映畫をドイツ大使館に來て

るる原型でみると、自國の軍隊の力強い歩武と共に敵國の捕虜の廢殘の姿を極めて無慈悲に描寫して、その著しい對比を繰り返して國民に示してゐる。甚しい場合になると、傲慢なイギリス兵の捕虜に、皮肉にも第一次大戰當時の流行歌を謡はせてゐる。これを觀るドイツ國民が何れほど溜飲を下げるか——この氣持は、過去二十五年の苦難を味つたドイツ人のみの感じ得るものではあるが、或程度まで吾々にも想像することが出来る。かう云ふ風にして、二つの異なる側面からの確な方法で國民に働きかけてゆくドイツの映畫國策は、注目すべく興味深い種々の問題と教訓とを含んでゐるのである。

三

「民族の祭典」。この映畫を正しく鑑賞しようとする場合、決して忘れてはならぬ一つの根本問題がある。随分昔の話だが、ロスアンジェルスオリンピック大會の折、優勝して歸つた水上競技の選手達に向ひ、かつて水泳界にその名を歌はれた末弘嚴太郎博士が與へた嚴格な教訓を、此處に更めて思ひ起す必要がある。當時の政黨政治家にはジャーナリズムから「スポーツ大臣」と呼ばれたほど、一種の人氣取政策として優勝選手を花形扱ひにした人もあり、アマチュア・スポーツの健全なる精神を涵養する主旨に甚だ沿はぬ弊風があつた。そこで末弘博士は選手達を歓迎する挨拶に苦言をもつてアマチュア・スポーツ本來の精神を説き、單なる優勝がそれ自身として些細なことであることを述べたうへ、「諸君は一日も早く故郷に歸り、平常の業務に忠實な生活を行ふべきである」と云ふ意味を力説した。そして、この主旨を更に詳細な論說として當時の雜誌にも發表したのである。

現代の日本では、アマチュア・スポーツとプロフェッショナル・スポーツとが一般社會から混同されてゐる。所謂「六大學」の野球戦が大相撲と同一態度で享樂されてゐるとき、本來のアマチュア・スポーツ精神からみれば最も不健全なる廢物的現象と云ふべきである。

この點をハッキリ理解して置いて「民族の祭典」をみることは、この優れた實寫映畫の眞の價値を正しく鑑賞する第一の根本條件である。

「民族の祭典」は、この映畫の實質的價値とは無關係に、日本人の素直な人情から悦ばれる一つの特徴をもつてゐる。陸上競技を扱つたこの第一部の最後に出て來るマラソン競技が日本選手の輝かしい優勝となり、翻る日本國旗と吹奏される日本國歌とが、恰もハッピー・エンディングの如く現はれるからである。この悦びは、素直な人情をもつ誰しも等しく感じるところであらう。さう云ふ點でこの映畫は、殊更に「日本向き」として編輯されたのであらう——と云ふ邪推を感じさせざるほどである。この悦びを素直に受け容れることは元より當然であらう。然しその感激はこの映畫のもつ本來の價値に何等の關係もない。

「民族の祭典」がもつ優秀な特質を一言に要約すれば、オリンピック大會の「雰圍氣」が詳細なディテールまで鋭く把へられ、盛り上げる力をもつて觀者をその「雰圍氣」に巻き込んでしまふところにある——と云へるであらう。單なるスポーツ映畫とこの作品との根本的に異なる點は此處にある。各種の競技そのものの撮影技術も非常に美事であるが、休んでゐる選手やスタートにうつる選手の微妙な表情も見逃してゐない。それから、あの廣大な觀覽席を一ぱいに埋めてゐる各國民の緊張と失意と熱狂と歡喜とを鋭く捉へてゐる。ヒットラーやゲーリングさ

へも、普通の映畫にみる儀式的なポーズを示さず「人間」として描寫されてゐる。更にマラソンのやうに、平凡に扱へば甚だ意屈な競技種目が、反つて非常に面白くみられるのである。

この映畫の撮影に要した一切の配列と機構とを詳細に圖解してみたら定めし面白いであらう。かつて輸入された豫告篇は、原型でみる限りそれだけでまとまつた別種の美しさをもつ作品であつた。また、この映畫の製作擔當者がこしらへた寫眞帖も、數多いオリンピック寫眞帖の中で一つの特徴を示してゐた。けれども、完成された映畫「民族の祭典」は、それ等の附隨的なカメラ作品を遙かに超越した魅力をもつてゐる。それは、美しさであると共に強さである。そして何處までも、オリンピック大會と云ふ一つの「現象」を純客觀的に表示した「雰圍氣描寫」である。従つて、この映畫をみる觀衆は、黒人の選手に勝つてもらつて悦んでゐるアメリカ人に意地悪い皮肉を感じるのには當然としても、この映畫を通して安つぽく「日本精神」を云々してはならない。むしろ、アマチュア・スポーツの國際競技場を包む明朗な雰圍氣に浸つてゐれば良いのである。

但し、この映畫には一つの難點があつた。それは、最初の部分に出て來る古代の彫刻が、大部分選定を誤つてゐることである。最後に出るミューロンのディスコボロスの模造品だけが、正しく選定された唯一の作品だと云つても良い。甚しきに至つては、ギリシヤ末期の感能的な彫刻さへ念入りに撮影されてゐるのである。

一九三六年ベルリンに開催されたオリンピック大會は、一面から云ふと昔ながらの「民族の祭典」であり、現代の受け繼いだ遺産としては、アマチュア・スポーツの國際競技であるが、他の一面から考へれば、世界大戰後の重壓から再起した新興ドイツの國民的式典であり、文化的示威であると解することが出來よう。この事情は、

の大會を機としてドイツ當局が刊行した非常に豪華な國策寫眞帖の内容に窺はれる。「ドイツ」と單に名付けられたこの大掛りな寫眞帖は、非賣品として各方面の關係者に配布されたものであるが、編輯と撮影との技術が巧妙なことに於いて、當に劃期的な意味をもつものと云へる。

この寫眞帖と似た内容の文化映畫は、日本に輸入されて「ドイツの四ヶ年計畫」と云ふやうな題名で發表されたが、作品としては寫眞帖の方が遙かに優れてゐたのである。其他、最近ドイツ國策宣傳用の最も高級な技術となつてゐる立體寫眞帖の叢書が、その第一編として、このオリンピック大會の撮影を刊行してゐる。かくの如くカメラ技術を總動員した新興ドイツの宣傳事業の中で、最も大規模であり最も傑出してゐるのがオリンピック大會そのものを直接に扱つた實寫記録映畫「民族の祭典」である。

四

「ブルグ劇場」。ゲーテの「ファウスト」を一個の藝術作品とし一個の舞臺劇として形式上から観るときは、決してまとまりの良いものとは云へない。然し、この作品の中に盛り込まれてゐる思想内容や、部分的に散見する詩的雰圍氣は、いつまでも「心の糧」として残る優れた力をもつてゐる。

ゲーテの「ファウスト」が演劇の形式をもつに對して、フランスに出た二人の音楽家グノーとベルリオーは、二種のオペラをまとめてゐる。然し、「ファウスト」のやうに思想的要素の著しく濃厚なものは、オペラに作曲するに適してゐない。この二つのオペラとも、私は十數年の昔に觀てゐるが、部分的には美しいに拘らず決して成功した作品とは思はれなかつた。

ところが、ウィリ・フォルストの「ブルグ・テアタル」(宮廷劇場)は、ゲーテの「ファウスト」をモティーフに求め、ファウストの第一部に似た構想を見出しながら、これを興行映畫としてまとめた試みで、その點非常に注目に値する作品であると共に、映畫としても優秀な出來榮をみせてゐるのである。

ゲーテの「ファウスト」第一部の初めの場面「夜」の終りに近く、ファウストが毒を盛つた盃を唇にあてやうとして復活祭の合唱をきき、自殺を思ひ止まるところがある。親の時代には歡喜の宴のあるごとに、その盃を氣のきいた言葉と共に空け、客の間を楽しくまわすのが習慣であつたから、ファウストもこの盃に盛られた酒を飲むと、遙かに遠い青年時代を追想するのである。その盃に酔ひのまわりの早い毒液を盛り、隣りの客にわたすこともなく死なうとするとき、寺院の鐘の音と共に天使のパートを唱ふコーラスの「主は蘇り給ひぬ！」と云ふ言葉がきこえて來る。この部分は、ゲーテのファウストでも舞臺の印象が深く、作品の構想にも重要な場面なのであるが、映畫(日本名「ブルグ劇場」)でも、此處に全體のモティーフを求め、ファウスト・シーンとラスト・シーンとをこの場面の舞臺に置いてゐるのである。

「ブルグ劇場」の主人公である年老いた名優は、舞臺の中だけに暮して活きた人生を味はなかつたことを思ひ、忠實な僕のプロンプターをつれて街に出、教會の中で純情な祈願を捧げてゐる愛らしい娘に心を惹かれる。この構想は、ファウストとマルガレーテの關係に似せてある。氣持の若返つた老優が園の中で娘の弄ぶ「花の占ひ」に愛情を示さうとする部分は「マルテの園」を思ひ出させるし、二人が小卓によつてゐる夜の場面では、アッコ

「デイオンを奏する樂師達がメフィストフェレスのセレナードを聯想させるのである。

老俳優は純情な娘に戀を感じるが、娘はその老人を父親のやうに信賴してゐる。俳優として名聲を得たいと思つてゐるブルグテアテル新參の青年が娘の婚約者であることを知り、化粧臺の鏡に向つて自分の愚かしさを嘲ける。その青年がブルグテアテルを追はれ自殺するつもりで舞臺横の高いブリッジに昇つたとき、守衛につきそはれて歸らうとする老優が下を通り、青年の取りおとした護符をみて教會堂に祈願する娘の姿を思ひ出し、下から聲高に青年に呼びかけ、彼を愛人の下に歸らせてやる。

そのときの老優の言葉に「立派な芝居だ、見物達に生の貴さを教へるため死んでみせるのもよからう」と云ふやうな意味の文句がある。そして最後に、老優の演ずるファウストを見物席から觀てゐる青年と娘が現はれ、復活祭の明け方、毒盃を空けずに天使の合唱をきくファウストの姿となるのである。

かゝる意味から、ドイツのクラシック演劇をモティーフに扱ひ、歴史的名優の傳説的生活をモデルに選んで興行映畫にまとめたこの作品は、ストーリーも相當に引きしまつてゐるし監督の神經も注意深くゆきとゞいてゐる上に、主演者がウエルネル・クラウスであるから非常に氣持よく觀られる。近頃の最も感銘深い映畫であるが、ファウストに關する充分の豫備知識をもつて味へば更に興味深い。

加ふるにこの作品は、興行映畫としても至極健全であり趣味程度も高いから、さういふ點で教育關係者は特に注目する必要があると考へる。

科學者の生涯に取材する作品二種

一

パウル・エールリヒの行績に取材するワーナー・ナショナルの映畫は、近頃輸入された外國映畫中の優秀作品であるが、そればかりでなく、この映畫に因んで考へられる問題も多く、種々の點で非常に興味深い意味をもつ作品である。

先づ、この映畫の背景となつてゐる醫學史上の「時代」を考へてみるとする。十九世紀後半期から二十世紀初頭にかけて醫學界に大きな功績をもつ三人の學者が、この映畫の中で最も主要な人物になつてゐることは、當時の「時代」を簡明に描出する手段として甚だ的確な處置である。此處に云ふ三人の學者は、ローベルト・コッホとエミール・アドルフ・フォン・ベーリングとパウル・エールリヒとであるが、その略歴中この映畫に關係した部分を拾つてみると下のやうになる。

Robert Koch(1843—1910)は一八八二年に結核菌を發見してゐる。細菌學を築いた彼は、結核にも特別の病原體があること、そしてそれが細菌であることを豫想し、その發見を自分自身の仕事としてゐた。元來コッホは、擴大率の大きい顯微鏡を彼自身の示唆によつて造らせた人であるが、特別な染色法を必要とする結核菌の發見は決して容易ではなかつた。この結核菌鑑別染色法に就いて化學者としての立場から功績を残したのがエールリヒ

である。

Emil Adolf von Behring (1854—1917) はコッホの門下として免疫學の研究に秀で、ジフテリアの血清療法は彼の偉大なる功績にぞくする。これによつて、小兒の一般死亡率が著しく減少したことは云ふまでもない。エーリヒも當時、血清療法に功績を残してゐるのである。

Paul Ehrlich (1854—1915) は、一八七八年ベルリンに Friedrich Theodor von Frerichs (一八五九年以來ベルリン大學教授)の助手となり、一八九〇年に傳染病研究所員になつてゐる。(コッホがこの研究所長になつたのは一八九一年であるから、エーリヒの入所はそれに先立つてゐるわけになる)。サルバルサンの創製によつて、梅毒の療法に新時代を劃したのは一九〇九年であるが、この仕事は秦佐八郎の協力に待つところが多かつた。

以上三人の醫學者は、何れもドイツ學界に重きをなす人物である。假りに若し、ノーベル賞と云ふものが學者の實績を評價する規準として或程度まで役立つとすれば、この三人が何れも受賞者であることを附言すべきであらう。

此處に引用した上記の學者達の功績は、この映畫の中に攝り容られてゐるが、警戒を要する點は、その全部がエーリヒを中心に扱つてあることである。コッホの如き、フランスのバストゥールと共に偉大な學者であるが、この映畫の中では、或程度まで官僚的な人物のやうになつてゐるし、ベーリングの功績に至つては、エーリヒに従屬したものに變つてしまつてゐる。そしてエーリヒの人格が、その反對に著しく理想化され、恰も人道精神の偉大な闘士の如き觀を呈してゐる。

従つて、上記の三人の學者の相互關係やエーリヒの占めてゐる位置を、映畫が史實通り忠實に扱つてゐるとは云へない。この作品の製作意圖を善意に解するならば、一人の學者エーリヒを理想化して醫學的建設の精神を象徴してゐるものと云へるが、然し、惡意に解するならば、巧妙に仕組まれた反獨的ユダヤ主義の宣傳とも云へなくはない。けれども、一般に優れた人物の傳記に取材する興行映畫は、概して人道主義の精神を主題に選んでゐるし、さう云ふ建前で著しく理想化されるのが常である。かゝる點ではこの「偉人エーリヒ博士」も、常規的な傳記映畫の傾向を帯びたものと云へるであらう。

この映畫の初めには、微病患者に水銀軟膏が何かを與へる診療室の場面がある。結婚の希望を抱いてゐる一人の青年が、失望の餘り更衣室で頸動脈を切斷し自殺するところからはじまる。云ふまでもなく、エーリヒの名を通俗的に有名ならしめたサルバルサンの創製を主眼として構成された映畫である。型の如く裁判事件が起り、過勞による死が訪れるところに終局の結末をもつ作品であるが、全體の構成は非常にツツカリしてゐるし少しの甘さもなく、極めて堅實に組み建てられてゐるのである。最後に臨終の床に所員達を集め、人道主義の教訓を與へるところが蛇足であるのと、官廳の豫算委員が漫畫化してゐると、その二つの點を除けば、良く引きしまつた立派な映畫にまとまつてゐるのである。普通の觀客を悦ばせるやうな派手な場面は少しも見あたらす、地味な實驗室の雰圍氣に殆ど統一されてゐるのであるが、主要な俳優達の優れた演技と畫面や編輯にみる的確な技巧によつて手堅く快よい作品にまとまつてゐるのである。

この映畫の全巻を通じて特に優れてゐるのは、ロビンソンの演ずるエーリヒである。ワーナー・ナショナル

で製作した四ツ切二枚の寫眞をみると、壯年時代から晩年期に至るエールリヒのポートレート十種を選び、これ等のポートレートの型と表情とに似せたロビンソンのメイク・アップと表情とを十八種ほど集め、兩者を詳細に比較出来るやうにまとめてある。ロビンソンと云へば、普通はギャング物や探偵映畫に活躍する主演俳優であるが、それがエールリヒのやうな學者に扮しながら實に立派な性格を示してゐる。肉體のタイプから云ふと、ロビンソンとエールリヒとは根本的に異つてゐるのであるが、それにも拘らず、この程度まで寫實的に描いてゐるのである。かう云ふ點は、俳優の利用限度やメイク・アップの効果を考察する上で、非常に有益な資料であると共に、また、映畫「偉人エールリヒ博士」を優秀作たらしめてゐる所以でもある。

他の二人の人物、コッホとベーリングに就いては、ローベルト・コッホが寫眞でみた實物に似てゐることを感じたが、ベーリングに就いては肖像をみてゐないから何とも云へない。また、サルバルサンの創製に功勞のある秦佐八郎は、映畫の中では特に優遇して扱ひ、ドクトル・ハタと云つて紹介してゐるばかりでなく、研究員達を集團的に撮影してゐる場合のカメラの据ゑ方をも、秦を主要視してゐることは良くわかるのである。

實際のエールリヒは、映畫に理想化されてゐるよりも遙かに企業家的であつたときいてゐるが、葉卷を常に愛用したことや娘を可愛がつてゐたことは、エールリヒ逝去の當時に日本の醫學者の追憶にあつた。それ等の點に就いても、この映畫は良く節度になつた扱ひかたを示してゐた。なほ、この映畫は、エールリヒ夫人の扱ひかたが極めて巧妙であつた。この作品にシンとした落付きを興へてゐる一面の効果は、夫人の扱ひかたに負ふものと云へる。

ところで、映畫「偉人エールリヒ博士」に因んで聯想される數多い醫學物の中で、最も直接に比較の對象となるのはパストゥールを扱つた「科學者の道」である。この作品もやはりワナー・ナショナルの製作であるから兩者を比べて考へることは、この際として非常に興味深いのである。

Louis Pasteur (1822-95) はローベルト・コッホと業績上の聯關をもつが、活動してゐた時代は更に古く、近世醫學史に占めてゐる地位は一層大きい。化學者と云ふ點ではエールリヒと共通性をもつが、この大科學者を扱つた映畫「科學者の道」は、その出來榮からみると、「偉人エールリヒ博士」より劣るのである。

その主な理由としては二つの點を數へることが出来るであらう。即ち第一は、パストゥールの學界に於ける功績が範圍廣く問題が専門的であるため、エールリヒのやうに簡明なまとめかたをするわけにゆかないことである。また第二は、パストゥールになつた主演俳優ポール・ムニの性格描寫が餘り成功してゐなかつたため、この歴史的人物に相應しい大きさが表示されてゐなかつたことである。

最後に、「偉人エールリヒ博士」を観る場合、サルバルサンの効果に關して觀衆が誤解しないやうに一言注意して置く。私は醫學者でもなく、まして皮膚科の専門家でもないから詳しいことは知らないが、サルバルサンが創製された當時と現在とは、この注射藥の効力に關する見解が餘程變つて來てゐるらしく、その効力の限界も現在ではハッキリしてゐるらしい。而かも、マラリヤ療法のやうな進歩したものが現在では出來てゐることであるから、ベーリングのジフテリアに於ける場合やパストゥールの恐水病に於ける場合と全く同程度に考へることは當を得てゐないかも知れない。かう云ふことは、エールリヒの功績をテーマとする映畫の價値とは何等の關係も

ないことであるが、知識内容に結び付いた問題としては一と通り考へて置いて良からうと思はれる。

二

MGMの「若い科学者」は、發明家エディソンの少年時代をアメリカ風の興行映畫にまとめたものである。この映畫の作品としての出来栄は、極く普通の「興行物」程度であり、特に取りたてるほどの作品ではないが、中に扱はれてゐる人物が發明界の通俗的クラシックとも云ふべきエディソンであり、殊にその少年時代を扱つたものであるため、嚴密に批判して置く必要を感じるのである。

元來エディソンが何の程度に「偉大」な人物か？——と云ふことを考へてみると、要するにアメリカ的な「發明家」の代表者であるにすぎない。従つて、エディソンの少年時代を扱つた凡庸な興行映畫が、一人の發明狂的少年の奇行ばかりを集めて、云はゞ「發明小僧」に仕上げてしまつたとしても、「發明家の代表者」であるエディソンを特に冒瀆することにならないかも知れない。殊にアメリカのやうに、軍事思想普及の國策映畫に安っぽい戀愛關係を織り込んだり、鐵道開發の映畫を常規的な西部劇に仕立てたりする國では、發明家の少年時代を安價な「悪戯小僧日記」にまとめ上げるのも、別に不思議はないかも知れない。従つて、アメリカのやうに「發明屋」大衆が多く、而かも、さう云ふ大衆を利用して科學文明を發達させてゐる國では、この映畫も充分な社會的必然性を持つに相異なるのである。

然し、この映畫を日本に輸入して、日本の映畫大衆にみせるとなると、問題は自づから別になるし、殊に、こ

の映畫が少年に親しい題材である關係上、日本の少年達に特殊な意味を持つと云ふ點になると、慎重に考慮すべき問題が多くなるのである。かゝる事情から、このアメリカ興行映畫の扱ひかたに就いて、私個人の判斷を以下に記して置く。

一、現在の日本は、科學的考察と科學的技術とに關する一般社會の「健全」な思想涵養を特に必要とする國である。従つて、科學者の中に精神的變質者が多いやうに考へたり、兒童の科學的興味を智的惡戯と混同したりするやうな誤謬は、「健全な科學思想」を涵養する立場として、極力排除するやうに注意しなければならぬ事情にある。そこで、エディソンのやうに最も通俗的であり大衆的である發明家の少年時代を漫畫化した興行映畫は、アメリカと國情の異なる日本で公開する場合には、特に慎重な考慮を必要とするのである。

二、而かもこの映畫の如く、何等の必然性なき暴力行爲をエディソン親子が敢てして勝ち誇るやうな結末があつたり、灰汁の強い惡戯が多かつたりする場合には、殊に年少者の觀覽上に好ましくないものである。子供のもつ模倣性を考慮しなければならぬことは勿論であるが、年少者に「健全」な科學思想を涵養させようとする重要な點からみても難點が多い。考へかたによつてはこの映畫など、「非一般」映畫の部類に入れるべきものとも解し得るであらう。文化立法としての映畫法の建前から、低俗趣味の映畫や家庭問題の映畫と同程度に科學思想涵養の立場を注意する必要もあるやうに思はれる。

三、なほ、この科學的なるべき映畫の中には、甚だ科學的ならざる部分も含まれてゐた。例へば、ニトロ・グリセリンの部分の如きこれである。この危險なる爆發性藥劑を何うして少年が發明したか？——を考へてみ

る。假りに若し、極微量の實驗を行つたものとすれば、この少年はその危険性を良く承知してゐる筈であり決して鐵道橋上の列車内に於ける如き不注意をしなかつたであらう。また、假りに若し、さほどの危険を豫知することなく爆發性藥劑を發明したとすれば、その發明の時に於いて、少年の肉體は生命の危険にさらされてゐなければならなかつた筈である。更に、あの藥劑をポケットに入れたまま、動搖の激しい車中を平然と歩きまわつてゐたことと、水に流すため大騒ぎをすることの間に甚しい矛盾がある。この程度の矛盾は、「活動」だからかまわない——とも解し得ぬことはないかも知れないが、元來が通俗科學的な映畫であるから許容し難いものと解するのが常識であらう。

四、且つこの映畫は、「少年時代」だけであつて青年期以後を含まないから、この發明家の甚だ異常にみえる少年期の性格が將來如何に發展するかを示してゐないのである。假りに若し、一人の科學者なり發明家なりの少年時代が、人間として異常でないものとすれば、その少年時代だけを切り離して扱つても差支へない筈である。けれども、この映畫に現はれてゐる限りのエディソンは、後年の發展を待つて初めて理由づけられるやうな性格異常者である。従つて、この少年時代だけを切り離すと、單なる性格異常者と餘り變らないのである。云はゞ、將來の「肯定」を待つてはじめて許容さるべき「否定」的要素が多すぎるのである。

五、この映畫の中に存する救濟的要素は、温かい氣持をもつて子供をかばう母親の愛情である。この愛情がこの映畫そのものを辯護してゐるのである。然し、この辯護は、大人の立場からこの映畫を観る場合に役立つので、子供を觀覽者に豫想する場合には全く事情が違つて來る。従つてこの映畫は、大人の觀る娛樂として

なら充分に肯定することが出来るし、それ以上に相當面白い問題を含むのであるが、決して、子供にみせるに適した映畫ではない。然し、強ひて子供にみせたい部分を拾ふとすれば、金を得て少しづつ、本を買ひ集めるところ位であらう。かう云ふ部分がこの映畫の中にもつと澤山含まれてゐたら、少しぐらい惡戯があつても異常にみえても、私は子供にみえることを大いに薦めたであらうと考へる。

六、日本の子供達は、エディソンを一人の優れた人物として考へるやうに教育されてゐる。従つて、エディソンを主人公とする映畫は、子供の徳育を考慮したものでなければならぬ。「徳育」の點からみて好ましくない映畫が子供達の尊敬する人物を主人公に扱つてゐる場合には、子供達に及ぼす教育上の危険は二重になるであらう。さう云ふ意味から、「徳育」に相應しくない點を多く含んでゐるこの映畫は、子供にみせるに適しないのである。

七、それならば、理想として何う云ふ映畫が科學者や發明家の「若い時代」を描いたものとして好ましいか？例へば、ヘルムホルツの詳細な傳記など、健全にして優秀な映畫の材料として、適當なものを含んでゐるのである。少年期から青年期にかけて、この優れた科學者の傳記は幾多の美しい「場面」をもつてゐる。それから、ダーウィンの少年時代なども、素直な良い映畫にまともさうに思はれる。科學の世界に専門知識をもたない私であるから何とも云へないが、例へば、故人になられた寺田寅彦先生のやうに、科學者の生活に就いても極めて深い理解をもたれ、且つ、映畫に關しても非常に優れた識見をもつて居られた徳の高い學者に教示を仰げば、材料はいくらでもあるに相違ない。

五

東洋美術と西洋美術

東洋と西洋——といふやうな問題について、現代の學界は全く新しい研究方法と考察態度とを採りはじめてゐる。かつては甚だ粗雑な考へ方から、極く漠然として對概念を豫想し、恰も鮮明な對比があるかの如く、觀念的な類型を單純に想定してゐたのであるが、さういふ幼稚な時代は既に遠く過ぎ去つてゐるのである。従つて、美術上の問題についても、昔のやうに、漠然と「東洋美術」と「西洋美術」を對立させる慣例は、その根本から改めなければならぬ筈である。元よりこれは今にはじまつたことでなく、本來かくあるべき性質のものである。然るに、美術について「東洋と西洋」とを比較する試みの多くが、現在でもなほ舊來の幼稚・淺薄な類型化の慣例を踏襲してゐるのは、恐らく、基礎問題に關する思索の缺如によるのであらう。

ここに豫想される基礎問題に就いては、既に、歴史哲學や地政學の専門家達が、研究的思索を進めはじめてゐる。また現代の南方建設に關係ある一部の技術家や、東亞大陸の文化工作にたづさはる一部の當事者も、現實の問題として注目しはじめてゐる。

現代に於ける造形文化の専門關係者として、この種の基礎問題を注目しはじめてゐるのは、主として、建設的な使命を感じた建築家の一部である。然し、その注目する範圍は、日本と東亞大陸と西南太平洋地域との特殊性

を、實證的に區別し、相互の關係を明らかにし、將來の文化工作と建設計畫とに就いて、基本問題を解決しようとするにある。これ元より當然のことである。「東洋」そのもの、内部構造を理解するのが、技術家にとつては先決問題だからである。

二

日本建築の性格に就いて論ずる考の中には、神明造の神社建築をギリシヤ盛期の神殿建築に比較し、兩者に共通な造形美を指摘しようとする場合をみるやうである。然し、この二つの宗教建築が共有する性格は、材料と構造とを造形的に純化し部分と全體とを有機的に緊密化し、簡單・嚴肅な記念性を表示してゐる點だけである。即ち建築美學の一般概念に就いて比較する限り造形的性質を共有する二種の典型的示例を此處に見出すのである。

けれども、假りに若し風土の特異性を考察する立場から、日本の神社とギリシヤの神殿とを例に引くとすれば兩者に就いて、その相反する側面だけを指摘することが出来るであらう。例へば、降雨量の著しく相異なる點だけを擧げて、この二つの宗教建築の性格を比較すると假定すれば、凡そ下のやうな對比を見出すであらう。

更めて云ふまでもなく、降雨量多く植物の繁茂に適した季節風をもつ日本は、植物性の良材に富み、木造建築を發達させた。降雨量の關係から屋根を重要視する建築形態が育成された結果、平面设计に於いても平入、妻入の區別が生じ、立面設計に於いてもまた、屋根の外観効果が決定的な意味を持つに至つた。また宗教建築としての「永久性」に就いても、木材の腐朽による改築が前提され、式年造營の制度が生ずる契機の一つをなすやうに

なつた。更に、宗教的雰圍氣の構成に關しては、社殿をめぐる森林の環境を必要とし、孤立した一個の建築物としてでなく、樹木の繁る神域全體に森嚴な深さを求めるのである。

降雨量の多い點だけから導き出された日本の神社の性格を、反對に、降雨量の著しく少いギリシヤに發達した神殿に就いて指摘すれば、上に列擧したものと全く異なる性格をみる。即ち空気が透明で陽光の強いギリシヤでは微細な部分まで神經のゆきわたつた彫刻的な神殿建築を求める。黎明期には木造であつたが、良質の石造建築として發達する。軒廻りの部分を除けば、屋根の上面は全く建築的效果に關係がない、三段の基壇に建ち、軒と梁と破風とを支へる柱の列が、外観の重心となる。平面设计もまた、柱の配列形式によつて分類される。外観の様式も柱の様式を主として構成される。一個の神殿そのものに彫刻的な統一性を求め、多くは丘上の公共市區に造營される。

然し、二つの宗教建築を比較する觀點はなほ複雑である。宗教思想、國體觀念、社會制度、民族性、其他の各々に就いて、日本の特殊性を明らかにし、古典ギリシヤの性格を窮め、種々の側面から考察することによつて、はじめて総合的な比較に言及し得るのである。

例へば、上に記した神社の式年造營制の如きは、日本独自の國體觀念と日本人の清淨を尊ぶ性格とを豫想してはじめて全面的に理解し得るものである。また、ギリシヤ神殿の史的意義は、古典時代の都市國家に於ける經濟形態を前提して、はじめて理解し得るのである。

これ等の點については、此處に更めて斷るまでもない。以上の一例で推知されるごとく、異なる國土に發達した

美術の特質を比較考察する場合、問題は極めて複雑である。

三

住宅建築の歴史を考察するとき庭園と建築との関係を特に重要視する國は、日本とイギリスとである。住宅建築の發達に庭園が密接な関係をもつ點で、兩者は或る程度の共通性を示してゐる。自然の姿を模倣した庭園形式を發達させてゐる或る期間には、兩國とも、支那の庭園の影響を或る程度まで受けてゐる。フランスの庭園のやうに、平面圖型に構成された庭園内部に視野を限るのでなく、周圍の自然的環境を攝り容れてゐるところも似てゐる。庭園の發達と併行して風景畫の發達が見られる點も、或る程度まで類似してゐる。然し、兩者の相異する點を數へればいくらでもある。

例へば、氣温と湿度との比率関係も日本とイギリスは非常に異ふし、社會生活と居住形式との関係も著しく相異なる。まして日本のやうに、茶道と庭園との特殊関係の如きものは、イギリスにはないのである。

従つて、兩者を比較考察する場合には充分の注意を要するのであるが、米人ライトの住宅設計などには、イギリスにみるよりも遙に「日本的」な構想を散見する。即ちライトは、一般の洋風住宅と異り、特定の正面意匠を持たない住宅建築を設計する。そして、室内の空間配列と周圍の庭園とを融合させる。平面設計は元より、外装の意匠や建築材料の選定法においても、この特徴が窺はれる。

ライトはかつて、日本に淺薄な流行を生じさせた。彼の「大作」にぞくする東京の帝國ホテルは、決してライ

トの代表作でもなく、優秀作でもない。然るに日本には所謂「ライト式」なる住宅建築が流行した。日本の氣候と日本人の生活形式とを無視して、皮相的にライトの様式に似た住宅を造ることが流行したのである。ところがライト自身がアメリカに造つた住宅建築のうち、出來榮の良い幾つかの作品には、反つて、日本の傳統的な住宅様式の優れた點がとり入れられてゐるのである。即ち、庭園と建築とを巧みに融合させる形式である。このライトの創意は、日本建築からの暗示によつて育成されたといふ。ドイツの優れた建築理論家が、この點を特に指摘しながら、ライトを稱讚してゐるのである。

かういふところにも、「東洋美術と西洋美術」とを比較する場合の示唆ある問題の一つをみることが出来るであらう。

戦争畫の精神

二四四

現在の日本では、現在の戦争の「世界歴史的意義」が反省されてゐる。これは決して皮相的な觀念の高翔であつてはならない。歴史哲學の堅實な思索であるべき筈である。劃期的な時代が要求する思想的基礎工作であり、國民的自覺を深める根本前提なるべき筈である。この種の哲學的思索は日本個々の觀點から充分に體系を整へ、社會的に浸透して、はじめて、強力な指導理念の全き形態が整ふのである。

造形文化の世界にあつても、問題は根本において共通なるべき筈である。然し、また造形文化には、この文化部門獨自の特質に基づく種々の制約がある。且つ、同じ造形文化の中でも、建築と彫刻と繪畫と寫眞とに、各自個々の性格があり、いづれも社會的用途と表現機能とを異にする。従つて、假りに若し造形文化の全體について、戦争の歴史的意義を表示し國家的意義を顯彰する場合を考察するとすれば、問題は著しく複雑となり、廣汎にわたる筈である。

斷るまでもなくこの稿には、それ等の全面的考察を試みる餘裕がない。問題の視野をたゞ「戦争畫の精神」の一部に限り、他の範圍には少しも觸れずに置く。然し、藝術國策の立場から觀るとき造形文化の諸部門には相互

に密接な關係があり、これを切り離すことは出来ない筈である。

二

廣義に解釋された戦争畫は、凡そ二種に大別し得るであらう。即ちその一は、單に繪畫作品の主題の一種として、畫家個人の藝術的意圖から扱はれる場合である。この場合に選ばれる主題は、傳説であつたり、歴史であつたりする。例へば、ペーテル・パウル・リューベンスが描いた「アマゾーンの戦」や、ユージェヌ・ドゥラクロワが製作した「十字軍のコンスタンティノポリス入城」の如き、世界美術史上第一級の傑作がこれである。またその二は、戦争畫が、國家的な意圖に基き、記念的な企劃として扱はれる場合である。ここでは、國家の歴史にとつて特に意義深い追憶と、特定の時代における戦勝の記録とが描出される。國家の當事者の企劃に基いて、主題が定まり作者が選ばれるのである。

國家的意圖の下に製作された戦争畫も、數は多く、性質も種々異なるが、美術史上特に重要視すべき代表的な典型は三つである。即ちその一は、紀元前四世紀の末葉に一時ギリシヤを支配したカッサンドロスが、畫家フィロクセノスに命じて、アレクサンドロスのイソスにおける戦果を描かせた場合である。その二は、十六世紀の初頭にフィレンツェの政權を掌握してゐたピエロ・ソデリニが、レオナルドに依頼して、ミラノに對するフィレンツェの戦勝を記念させた場合である。其三は、ナポレオン一世が行つた藝術政策の下に、畫家グロが働いてゐた場合である。

二四五

この三種の場合は、戦争畫に關する各種の基本問題を性格的に表示してゐるから、以下に要點を略記して置く。

三

カッサンドロスは、アレクサンドロス大王の後継者の一人である。大王の肉親を殺害させ、大王の妹テッサロニーケを妻とし、ギリシヤの支配權を獲得した人物である。彼は畫家フィロクセノスに命じ、大王がベルシヤ王ダリオスの軍を撃破したイソスの戦ひを描かせてゐる。イソスの戦ひは紀元前三三三年に、アレクサンドロスとダリオスが直接に會した戦闘である。

大王は、ベルシヤ勢が槍で固める中に果敢な突入を行つたといふ。その有様を迫眞性の強い優れた戦争畫に描出した傑作である。この原作は傳はらないが、フィロクセノスの作品は名聲が高かつたので、その構想を傳へる模造品が多く造られたらしい。

現存するものには、ボンベイの一邸宅を装ふたモザイクと、石棺の外面を飾る浮彫との二種がある。カッサンドロスが行つた政策と當時の事情とから推察するに、この傑出した戦争畫は、光輝ある先進者を顯彰しながら自己の支配權を表示する意圖に企劃したものであらう。

ピエロ・ソデリニが終身任期のゴンファリオニエルとなつたのは一五〇二年である。當時のフィレンツェ市は都市國家としての諸事情が積極的に展開してゐた。政廳舎の大會議室の竣工したのは十五世紀の末であるが、この室内をフィレンツェの戦勝記念畫によつて裝飾することになつたのは、十六世紀の初頭である。

同市に滞在中の巨匠レオナルド・ダ・ヴィンチと新銳の大家ミケランジェロとに相對する壁面を與へて、二種の戦争畫を競演の形式に完成させるのがソテリニの意向であつた。レオナルドに提供された主題は、一四四〇年にフィレンツェとミラノが戦つた激しい戦闘の有様である。

レオナルドは「アングアリの戦」を騎兵戦にまとめ、軍旗を奪ひ合ふ騎士達の姿を中心として、雄渾な構想を創造したやうである。制作半ばに放棄され消滅した作品ではあるが、レオナルドの戦争畫論と素描の斷片と若干の模寫とによつて想像するに、この巨匠特有の寫實精神に徹し、迫眞力の著しく強いもの、やうである。

ナポレオン一世は、當時のフランスの國情に即應して、國民精神を統率する必要から、特殊な藝術政策を實施したが、中で最も典型的であつたのは、戦争畫の奨励企劃であつた。この場合、主題は總て皇帝自身の戦功記録に限られてゐるが、皇帝が殊に重く用いたのはジュアン・グロであつた。

グロは特に優れた畫家ではないが、ナポレオンの軍に従つてイタリアを経た體驗によつて、その構想を養ふことができた。犠牲者の多かつた「エイロウの戦」に、皇帝は戰場を巡視して敵の傷兵をいたはつた。また、フランス軍がベストに惱まれた「ジャファ」では、皇帝は病兵を慰問して士氣を鼓舞した。この二つの主題を扱つたグロの作品は、數多い當時の戦争畫の中で、深い感銘を國民に與へたのである。この場合にも、戦争畫として優れた點は、その迫眞性にあつたのである。

四

改めて断るまでもなく、戦争畫の根本制約は、迫眞性と記念性である。この制約は、古今を通じて變ることがないが、現代では、報道寫眞が著しい進歩を遂げてゐるため、繪畫と寫眞との性能を深く考慮する必要をもつてゐる。

例へば、戰士の撮影になるハワイ空襲の寫眞の如きは、寫眞の世界歴史百餘年を通じて、最も深い感銘を國民の心に與へた作品であるが、この一群の報道寫眞がもつ迫眞性を、繪畫に求めることは不可能である。假りにいふ、傑出した一人の戦争畫家を想定するとしても、この報道寫眞と同程度の迫眞性をもつ繪畫は創造し得ない筈である。寫眞と繪畫では、迫眞性の性格が全く異つてゐるからである。

こゝに、現代の戦争畫にとつて極めて根本的な問題があると共に、國家が現代の造形文化を育成し利用する場合、慎重に考慮すべき基本事項がある。これ等の問題をこゝに述べてゐる餘裕はないが、現代の戦争畫に就いてその個々の使命の一端を指摘するとすれば、次の如くなるであらう。

一、例へば、記念建造物の内部に戦争畫を組み込むことによつて、國民の心を深い追想に導く永久的施設を完成する場合を想定する。こゝには、現代の戦争の性格を的確に表示すべき、優れた畫家の創造力が前提される。嚴格な意味において、この重き使命を完了し得る畫家は、現在の各國になほ存在しないやうである。然し、かゝる優秀な畫家を出現させることが、日本の畫界の重き任務であると共に、これを育成する確な方策もまた必要である。

二、啓發用の繪畫として、報道寫眞と共に組み合わせられ、展覽會の展示、及び、刊行物の複製、その他に適用さ

るべき戦争畫がある。この場合には、特に傑出した畫家の創造力を前提としない。唯だ、寫眞と組み合わせられる展示、及び刊行物に適し、機械化された戦争の性格に相應しい特殊な「形式」を案出することが必要である。例へばドイツの如き、繪畫に秀でた國民ではないに拘らず、この種の啓發工作においては多くの優れた成績を収めてゐる。こゝにもまた、日本の畫界の解決すべき重要な課題の一つを認むべきである。

映畫作品の價值評價

一

藝術作品の價值を評價する規準——と云ふ難問題は、數千年の傳統と歴史的發展とを回顧する様々の藝術部門に於いてすら、容易に解決されてゐない。藝術の歴史に關する特殊な經驗的科學の立場では、何處までも相對的な「價值關係」に基つて藝術作品と藝術家の價值判斷を行ふから、問題は比較的簡單である。歴史科學上の専門的技術を充分に持つてゐる——と云ふことが、この場合に要求される方法論上の主な條件である。然し、この觀點から、具體的に考察を進めるときでさへ、實は、藝術の價值判斷に關する複雑な諸問題が背後に密んでゐる。表面に出て來ないと云ふだけのことで、歴史科學者の主觀性と歴史考察の客觀性とを詳細に分析しつくすことは出來ない。體驗が豊富で洞察の深い優秀な歴史家であるほど、この關係は一層に複雑である。

けれども、上記の如き藝術史學の價值判斷と全然性質を異にする他の價值判斷、即ち規範學としての美學が具體的な畫家や作品を直接に考察する場合とか、或は、藝術評論家や藝術批評家が具體的な評價を行ふ場合とか、さう云ふ性質の仕事になると、藝術價值を判定する規準の問題が正面に現はれて來る。歴史科學の觀點に比べて云へば、絶對的妥當性が極めて難解な問題を提出するのである。而かもその上に、藝術の種類に従つて、その性

質が異なり、その構成要素が一樣でなく、價值評價の目標が藝術によつて違ふ——と云ふ事情が此處に加はつて來るから、この難問の扱ひかたには更に數倍の注意が必要となる。

二

これ等の諸問題に聯關して、甚だ大衆的で而かも適切な一つの例を挙げ、藝術價值の判斷に關する具體的な説明に代へることとする。

ミレーと云ふ畫家は技巧の點から判斷すると先づ三流程度の拙い繪描きにすぎないであらう。然し、日本の小學生もこの畫家の名は知つてゐるし、通俗的には非常に親しまれてゐる。また當のフランスでも、現在に至るまでミレーを扱つた大掛りな出版物が出てゐるほどである。この不思議な存在を、色々の觀點から價值判斷してみると、大體下のやうな結果になる。

ルーブル美術館でミレーの作品を他の優れた畫家の作品の間に置いてみると、恰も小學校の圖畫の先生の描いた繪がまぎれ込んでゐるかの感を誘ふ。例へば「落穂拾ひ」のやうな作品でも、筆觸はいぢけてゐるし色彩は幼なく、全體として非常に稚拙な印象を受ける。假りに若しこの作品が、十九世紀の優れた諸作家、ドラクロワ、アングル、クールベ、コロ等を集めた大きい室に仲間入りしてゐる場合を想像するとすれば、一層の見おとりがすることであらう。

次に、フランス繪畫史上に於けるミレーの位置を測定してみると、十九世紀後半期の藝術思潮や文化史の背景

と密接に連關して、著しく重要な意義を持つて來るのである。十九世紀の後半期は、産業の勃興に伴ひ勤勞生活者の社會的關係が非常に擴大された時機で、それに順じて一般藝術界の關心も勤勞生活者に向けられ、各種の藝術作品や藝術論にその顯著な現象が窺はれた時代である。そして、さう云ふ時代を代表する特殊な人物としてミレーが存在し、時代の進展と密接に聯關して一種の建設的な意義を完ふしてゐるのである。(この事情を詳細に分析することは美術史學上の興味深いテーマであるが、この稿で立ち入る必要はないであらう)。

然し、日本の藝術大衆がミレーの繪畫に親む氣持はまた別である。最も通俗的で而かも代表的なミレーの繪——例へば「落穂拾ひ」や「晚鐘」のごとき作品は、實物のみより複製で想像してゐる方が美しく、これ等の繪の持つてゐる優れた要素は、複製でも決して失はれない。そののみか、むしろ、複製の方に却つてハッキリ浮き出てゐると考へられる。ここに、これ等の作品が健全にして善良なる大衆性をもつ原因がある。「落穂拾ひ」や「晚鐘」は、繪畫としての畫面効果や技術の巧拙と全く無關係に、大衆の心に親しめる一種の「人間性」を含み、純造型的な問題以外に、或る程度のストーリーをもつのである。従つて、セビヤ一色の大型の複製を立派な額縁に入れて壁に懸ければ學校の生徒達に親しまれるであらうし、印刷の餘り良くない繪葉書のまま小型の額に入れば、下宿屋の二階に暮す農民藝術の友に謙遜な慰安を與へるのである。

上に述べたやうに、極く單純なミレーの繪を價値判斷する場合でさへ、随分色々な立場がある。そして此處に挙げた三つの代表的な觀方と考へ方とは、それ自身として何れも間違つてゐないのである。

だが、何處までも「それ自身として」間違つてゐないのであつて、その間に立場や觀點の混同があつてはなら

ない。これは一つの極めて卑近な實例にすぎないが、判斷の標準の限界が遙かに不明瞭な場合も決して少くないのである。

三

ところで、問題の境界を限定し、現在製作されつつある藝術に就いて價値の判斷を下す場合を考へるとすればまた別な面倒が生じて來るであらう。

例へば、美術博物館の建築を取り出してみるとする。美術博物館の眞の目的は、館内に保存され展示される美術品に最も好都合な條件を與へ、これを鑑賞する一般觀覽者にとつて最も便利な施設を提供するところにある。従つて、博物館の外觀に何う云ふ建築様式を與へるか?——と云ふやうな問題は、第二義的な意味しか持たない。假りに若し、外觀だけみると非常に良く出來てゐるが、中に入ると甚だ不便である、と云ふやうな建築は、その藝術の基本條件を無視した愚作と見做さざるを得ない。また、假りに若し内部の施設としては完全なほど良く出來てゐるが、外觀が外國の新しい流行を唯だ模倣しただけであると云ふ場合を考へてみるとする。この建物の設計者は、決して優れた構想の持主ではないに相異ないが、博物館を利用する一般の鑑賞者には極めて便利でありその限りでは立派に建築家としての義務を充してゐるのである。

然し、同じ造型藝術でも展覽會にみる寫真などになると、問題が全然違つて來る。如何に手際良く出來てゐても、外國の作家が試みたモチーフなりコンポジションなりを模倣したものである場合には、何等の價値も認め

められない。「寫眞のやうに、機械の性能が製作過程の大部分を占有してゐる藝術では、一つのモーターなりコンポジションなりを「發見」すると云ふところに、その作品の價値を規定する重點が求められるからである。まして映畫のやうに、過去に古い傳統も持たず、これと云つて「完成期」も經驗せず、常に活潑な成長を營みながら、最も進歩した科學的技術を絶えず攝り容れ、社會の要求を鋭敏に反應してゐるものになると、作品を構成する要素と條件と制約とが非常に複雑であるし、これを享受する觀衆の判斷も著しく雑多である。且つ映畫ほど諸藝術との關係が錯交してゐるものは他にない。直接に關係するものだけでも文學、演劇、音樂、建築、寫眞放送、等を數へるが、それ等の諸藝術と聯關しながら、而も映畫独自の世界を次ぎ々に創造し試作してゆく性質をもつてゐる。その上に、「映畫」は恰も「文章」の如く、藝術以外の審美性を含む各種の表現技術として利用されてゐるのである。従つて、映畫作品の審美的價値を判斷するためには、極く大ざつばに見積つても、下記のやうな獨特の評價目標が考慮されなければならぬわけである。

- 一、映畫の綜合藝術的特殊性に基き、各種の技術に關する出來榮を評價すること。
 - 二、映畫と密接な關係にある諸藝術と綿密に對照し比較して評價すること。
 - 三、常に新しい境地を開拓してゆく映畫の發達現象を念頭に置き、他の諸藝術より試作を重要視すること。
 - 四、映畫に要求されてゐる多面的な社會的使命を充分に認識すること。
- 以上がこれである。言葉で簡條書にすると甚だ簡單であるが、この項の一つ宛を説明するだけでも、私に與へられた枚數を遙かに超越するであらう。

民衆娛樂地域に關する諸問題 (昭和十二年)

民衆娛樂地域に關する都市計畫上、並びに、都市美化問題上の諸件を指摘する目的から、參考資料を東京市の都市形態内に求めるとすれば、代表的な主要地域は下の如くであらう。即ち――

- A 麴町區丸ノ内から京橋區銀座方面に互つて存在する都市中心區域
- B 淺草區の公園を中心として其の周圍に存在する區域
- C 省線新宿驛に近接する四谷區内の地域
- D 省線及び私線の澁谷驛を中心とする一帯の地域
- E 深川區、城東區、兩區に近き本所區内に目下計畫されつゝある「江東樂天地」の五つの地域がこれである。

この五つの地域は、娛樂地域としての性質と都市計畫上の關係とを各々異にしてゐる點に於いて、代表的示例として適當なのである。従つて、この五つの地域に關する諸問題を各々具體的に指摘すれば、大都市の形態を構成する要素としての娛樂地域に就いて考へられる種々の問題は、大體理解し得るわけである。かゝる意味から以下に主要な點を略記して置く。

鷗町區から京橋區に互る娛樂地域は、單に東京市ばかりでなく日本全國を通じて、最も「高級」な民衆娛樂地域と考へられてゐる。その範圍は、皇居前面の外堀に向つて建つ帝國劇場から、京橋區の東京劇場まで及び、全地域の中央を横斷する銀座遊歩街の全線を包含してゐるもので、東京の主要なビジネス・センターと直接の關係を有する區域である。

この地域に含まれる民衆娛樂施設の構成要素を、その主なものにつき種類別に見れば下の如くなるであらう。

- 一、常設的な劇場と映畫館。 東寶劇場、有樂座、日比谷映畫劇場、帝國劇場、日本劇場、丸の内松竹劇場、歌舞伎座、東京劇場、新橋演舞場、築地小劇場、銀座シネマ。
 - 二、娛樂施設として利用されるホール。 日比谷公會堂、仁壽講堂をはじめ各種のビルディング内にある講堂。
 - 三、遊歩道路其他に存在する百貨店、商店、宴會場、飲食店及び各種の特殊飲食店。
 - 四、省線(有樂町驛、新橋驛)、市電、地下鐵、及び各種のバス、其他によつて市内各地と聯絡してゐる交通機關。
 - 五、間接に關係ある主要な施設。 日比谷公園、帝國ホテル、東京會館、各新聞社、其他。
- 以上に列記した五種の構成要素の各々につき、注意すべき事項を略記すれば下の如くである。

- 一、劇場と映畫館とを所謂「丸の内」區域に増設することは當局の好まざるところであるらしい。この點に就いては、第五回全國都市問題總會の報告にも記して置いたが、民衆娛樂の質的向上をはかる上から云ふと、丸の内に各種の娛樂を進出させることは、その趣味程度を高める意味から甚だ良好な成績を示しつゝあるほどである。従つて、この地域の興行は、或程度の質的制限を置けば、むしろ奨励すべきであらうと思はれる。
- 二、然し、これ等の娛樂に用ふる建築の設備と形式とは、代表的な都市生活の保健と保安との關係上、並びに中心區域の外觀を整へる關係上、現在よりも設計に注意する必要がある。
- 三、各種のビルディング内に設けられてゐるホールは、構造の關係から上層に置かれる場合が多い。然し、かかる性質のホールは、常に、階段とエレベーターとが觀衆の總量に對して不足である。これは保安上からも改善さるべき點であるが、同様にまた、觀衆の氣分を害し、公衆道徳の精神を損ふことも多いから、一層改善する必要がある。
- 四、この區域内に存在する各種の消費施設は、保安と保健との點で改善の餘地の多いことは云ふまでもないが、夜間の照明裝飾に就いても、都市の外觀を整へる上で注意すべき點が多い。なほ、時折り問題になる特殊飲食店の地域的制限等に就いても、考究すべき點は多からうと思はれる。
- 五、各種の交通機關の中では、路面電車を銀座通りから除いて、これを昭和通りに移すことが絶対に必要である。車體大きく速度の遅い現在の路面電車は、交通整理の上からも一種の障害であらうと思はれるが、更に大きい弊害はその甚しい騒音にある。この騒音は、娛樂地域に慰安と歡樂とを求め民衆の氣持を荒さませ

る精神的害毒を伴ふもので、かゝる意味だけからも、路面電車の廢止は中心區域として必要である。

六、地下鐵の布設と共に遠い地域から銀座に集る民衆の数が著しく増加してゐる上に、各種の娛樂施設の享受者もまた銀座に向つて集まるが、其他、この地域に數多く存在する事務所の勤務者の中には銀座に出る者が相當に多いから、非常に雜踏し、現在の歩道では保安上保健上の關係のみならず、精神的にも弊害を伴ふ。而かも現在の東京では、所謂「遊歩道」を代表してゐるものもこの銀座なのであるから、路面電車を廢して得る幅員を以つて歩道を擴大する必要がある。

七、銀座の街路面から露店を全部取り除くことは、單に東京市の主要消費區域の外觀を整へる上に必要なばかりでなく、銀座に向つて今後益々集中される民衆の數を多少とも制限し、歩道の狹隘を緩和する點では是非とも必要である。

八、この區域の廣告類は、現在でも既に當局で制限を行つてゐるが、實はむしろ、或種の宣傳ビラ類に、都市の美觀を害し、心の餘裕を奪ふ懸念を含むものがあるやうに想像される。この點に就いては、折り／＼批評の言葉をきくから、當局としても一應の考慮を希望する。

二

淺草區の民衆娛樂地域は、淺草寺と公園とを中心として發達したものであるから、一面に於いては傳統的な遺産を残してゐると共に、他面に於いては最も典型的な「民衆娛樂」の特質を持つてゐる。この地域の示す特殊性

を主な要素に就いて指摘すれば下の如くである。

- 一、大衆的な宗教施設。直接には淺草寺、それに繼いで間接に東本願寺。
 - 二、娛樂施設を含む淺草公園。
 - 三、映畫館、劇場、寄席、見世物、花屋敷、等を含む各種の大衆的娛樂施設。
 - 四、仲見世、百貨店、商店及び各種の飲食店。
 - 五、江東地方、千葉縣、等をはじめ、上野及び市内各地に聯絡する交通機關として省線、私線、地下鐵、路面電車、バス、小蒸汽船、等。
 - 六、過去に於いて特殊な關係にあつたものとして隣接する公娼地域。
- 以上に列記した各種の構成要素につき、特に「大衆的」なこの地域の特殊性を考慮して注意すべき事項を擧げれば下の如くである。

- 一、一般に各種の施設につき保安、保健、等に關して、この地域の特殊條件を考慮した取締りを必要とすることは、更めて斷るまでもない。
- 二、かつては淺草の娛樂地域に集つた大衆が近頃では或程度まで銀座に移動してゐるやうであるが、かゝる現象に對しては、銀座の雜踏を緩和し、淺草の衰頹を防ぐ上からも適宜な處置を講ずる必要がある。而かもその上に、全く性質を異にする二種の娛樂地域を市民の階級に従つて使ひ分ける便宜からも、混合形式の變態的な發生を抑制して置く必要があらう。従つて、淺草の繁榮を計る目的から、先づ飲食店の設備を改善し、

主要な興行館の入場料と飲食店の程度との間に存する矛盾を除去する必要がある。例へば、映畫封切館の料金に相應するだけの飲食店がないことなど、現在の浅草で不自由を感じられてゐるやうである。

三

「新宿」と云ふ名稱で總括されてゐる娯樂地域は、省線の新宿驛を中心として半圓を描く四谷區内の一範圍を指すのであるが、新市域各地をはじめその隣接區域の居住者を背景として特に發達したものである。従つて新宿では、娯樂施設と各種の日常生活品販賣施設とが融合してゐるのである。この地域を構成してゐる要素は下の如くである。

- 一、映畫封切館（帝都座、新宿松竹館、大東京、武蔵野館）と代表的な二番館（昭和館）及び、新宿第一劇場、ムーラン・ルージュ等の如きレビニエの劇場。
 - 二、三越、伊勢丹、其他の百貨店と、三福、二幸の如き大規模な食料店、及び食料品店と飲食店とを兼ねた代表的商店。
 - 三、中央線、山ノ手線、小田急をはじめ各種の私設郊外電車、路面電車、バス、等の交通機關。
 - 四、各種の特殊飲食店、ダンス・ホール。
 - 五、娯樂地域と直接に隣接する公娯地域。
- 以上に列記したところから指摘される注意事項は下の如くである。

- 一、現在の新宿は、主要道路が甚しく狹隘で、保健上からも憂慮すべき點があると共に、精神的にも好ましからぬ影響があらう。この點は、郊外居住者の日常生活と關係の深い地域であるだけに改善の必要を痛切に感じる。而かも新宿は、新市域と舊市域とを結ぶ交通上の要點になつてゐるから、この問題は更に切實である。
- 二、現在の省線新宿驛は、日常生活に關係の深い驛であるに拘らず、保健上考慮すべき點が多いやうに思はれる。
- 三、現在の公娯地域は、事實上、民衆娯樂地域と融合してゐる。單に地域上相接するのみならず、兩地域の利用者も實質上共通してゐるやうである。娯樂施設内に於ける性的要素の混入を如何なる程度まで許容するか？——と云ふ問題は、カフェーやバーの地域的制限問題にも關係が深いが、公娯地域の隣接は更に切實な問題を提供することと思はれる。殊に新宿の如く、一面に於いては郊外居住者の家庭生活と密接な關係にある地域にあつては、この問題は一層複雑であらう。

右に指摘した三つの難點は、近き將來に實現すべき新宿驛の移轉と、主要道路の新設と地下鐵の布設との完成後に於いては或は自から満足な解決を見ることが出来るかも知れない。然し、これ等の諸問題に就いては、今から充分の審議を必要とする。

四

省線、及び各種私線の澁谷驛を中心とする地域は、現在に於いてはなほ交通上の要地たるに止まるもので、郊

外と市内とを日常生活上聯絡する地點に他ならないが、郊外電車の著しく發達しつゝある地域である上に、東横電鐵の如き私設電車の經營に聯絡する各種の政策が畫策されつゝある現状から推察すると、近き將來に於いては或は娛樂地域として發達する可能性があるかも知れない。現在でも既に、東横映畫劇場など所謂「一流館」の設立をみるほどであるが、交通上、及び日常商品上の要地に過ぎぬ現在の澁谷としては、東京市の主要娛樂地域として尙ほ未發達の状態にあるやうである。例へば、映畫館の利用状況にしても、近傍に娛樂を求める者は道玄坂キネマを訪ひ、然らざる者は丸の内まで出る——と云つたやうな習慣がある。而かもこの習慣は、地下鐵が新橋まで布設される最近の將來に於いては、一層強化されるであらうと推察する。

五

深川區に目下設立を計畫されつゝある「江東樂天地」は、東寶直系の株式會社として誕生する筈のものであるから、娛樂地域として如何なる程度に發達するかは、現在のところ全く不明である。従つてこれを、東京市内に現存する娛樂地域として取扱ふことは出来ないが、他の娛樂地域の如く自然發生的に構成されたものと異り、一つの經營政策的方針に基いて新設されるものであるから、其處に独自の興味深い問題が存するわけであり、かゝる意味に於いて一つの代表的娛樂地域と認め得る。而かもこの娛樂施設は、江東一帯の工場勤勞者を主として豫想する試みであるから、他に類例のない存在なのである。

「江東樂天地設立大要」をみると、丸の内の東寶娛樂街がビジネス・センターを背景として設立されたに對して

- 樂天地は「工場センター」を背景とする施設であると云ふ。大正道路と四ツ目通りの交叉點に接し、千葉行省線の錦糸町驛に近く、城東電車の終點と白木屋百貨店とは大正道路を隔て、相對する。而かも市電は、洲崎と兩國とに至る錦糸堀終點が此處に位してゐる。其他この地域を挾んで錦糸公園と猿江恩賜公園とが近く存在する。かく交通上有利な地域に娛樂施設を一區域として新設しようとするもので、その規模は下記の如くである。
- 一、劇場、映畫館、寄席、サーカス。
 - 二、遊戯場、及び、高等遊戯場。
 - 三、喫茶店、高等屋臺店、食堂。
 - 四、仲見世。
 - 五、神社。

以上のうち、現在既に着手してゐるのは劇場と映畫館とであり、他は、なほ計畫中のものであるが、東寶囑託の建築設計者である友田董氏から提供された詳細な設計圖を實行案として假定する限り、極めて興味深い企圖であることがわかる。目下着手中の映畫館と劇場とは、何れも鐵骨鐵筋コンクリート造で、建坪は四百坪と四百六十四坪、共にタイル張りの表面仕上げの豫定であると云ふ。この二つの興行館は間に通路をもちながら列んで建つわけである。

サーカスは圓形のプランに豫定され、鐵骨鐵筋コンクリート造で、同じタイルの表面仕上げになるらしい。

「高等屋臺店」は恰もボンベイの大住宅の如く、内面に中庭をとり、周圍に室を割つたものである。全體として

この地域の建造物は廣義の「モダン・スタイル」に装はれるらしい。當局の許可方針次第で全體のまとめかたは變化するかも知れないし、其他の事情によつても部分的には變更があることと思ふが、兎も角も、この豫定圖から娛樂地域の全貌を推察することは可能である。假りにいま、現在の豫定圖面通りこの娛樂地域が實現したと考へると、下の如き諸問題が直接考慮されるであらう。即ち――

- 一、この娛樂地域を含む周囲の地域に如何なる影響を及ぼすか？
- 二、浅草娛樂地域、及び國技館に對して如何なる關係が生ずるか？
- 三、東寶系の興行企劃方針全體に如何なる變更が生ずるか？

此處に略記した五種の民衆娛樂地域につき直接指摘される諸問題と、これに因んで考慮される各方面の課題とをその各項に就いて具體的に考察し詳細に審議するとすれば、都市計畫、並びに都市美に關する主要な注意事項を大體に於いて指摘することが出來ようと思はれる。

實況放送の表現形式（昭和十二年）

實況放送の中に包括されてゐるもののうち、過去一年間に偶然なめぐり合はせから私の聴いたものにつき、興味を惹いた點を下に指摘して置く。

一 叙景放送としての「歳末風景」

「恒例のリレー中繼」と稱する歳末風景は、昨年十二月三十日の夜に約一時間に亙つて試みられた。名古屋、京都、大阪、東京、横濱の五大都市から、様々のヴァラエティーある歳末氣分を拾ひ出したもので甚だ興味深い問題を持つてゐた。

その一の名古屋は「ラジオディスプレイ」と稱する形式のもので、アナウンスはタイトル・アナウンスと現場のアナウンス、實況の自然音とスタジオ内の擬音と、エキストラの會話と伴奏的な音楽と、種々のものを組み合はせながら、名古屋驛、廣小路、熱田神宮、大須觀音、等の雰圍氣描寫を試みてゐる。この名古屋の部は良く出來てゐるが、やはり、實況の自然音を聴くときが灰汁もなく氣持が良い。例へば名古屋驛の構内にしても、スキ―問答のところなどになると、どうも取つて附けたやうで、きいてゐてもシツクリしないし、間延びがしていけ

ない。實況のクローズ・アップらしく出来れば面白いのであらうが、未だ其處まで行つてゐない。かう云ふ點になると、外國から来る實寫映畫などには随分把へ方の巧妙な實況のクローズ・アップがあるし、ほんの偶然な事情から忠實なカメラに撮影されたやうにみえるものに、返つて觀る者の心を強く打つものがある。例へば、パー少將が南極から歸つて人々に取り圍まれながら歓迎をうけてゐるところにしても、少將の愛犬が自分の主人に飛び付かうとしながら人にさへぎられて近寄ることが出来ない。それが如何にもいじらしい。同様に、北極から救はれてシベリア鐵道で歸つた探検隊員をモスコウで歓迎するところにしても、汽車がプラットホームに着くと出むかへに來てゐる家族の中に、老婆がうれし泣きに泣いてゐるところが、ほんの一瞬間出て來るが、それが直ぐ觀る者の心に働いて強い感動を與へる。かう云ふ「無意識的」なクローズ・アップは意識的に仕組まれたクローズ・アップよりも遙かに實感的である。

斷るまでもなく、耳の場合と目の場合とは、クローズ・アップの性質が非常に違ふわけであるし、マイクロフォンとカメラとは性能が甚しく相違してゐるから、兩者に共通な類推を使ふわけにはゆかないし、映畫で可能なことをラヂオに其のまゝ應用することも無理である。然し兩者の相違を充分承知した上で、應用し得る範圍もまた見出せさうに想像される。

かゝる意味から考へると、少くとも「スキー問答」の如きものは、恰も偶然マイクに入つて來たかの如く扱ふ方が、より實感的で面白いであらう。従つて、かう云ふ性質の會話などを入れる場合には、始めから終りまでハッキリ聞き取れるのでなく、途中から聽えて來て、終りの方は他のもつと強い音がオーバー・ラップして來て、

それに消されてしまふ——と云ふやうにしたら良からうと考へる。

さう云ふ點から云つて、この放送中で最も拙劣な感じがしたのは、東京銀座の部分に出て來る原節子と林芙美子の會話であつた。「歳末風景」と云ふやうなものは、何處までも雰圍氣描寫で統一すべきものであるから、其處へ、人氣俳優や女流作家などを持つて來ると、甚しく低俗な感じがするばかりでなく、まとまりが非常に悪くなる。同様な缺點は、横濱の支那街でも繰り返されたから著しく終りがダレ氣味になつた。

それからまた、東京の部で中州の水の上のところに出て來るアナウンスも、二十年位の昔に流行つた文學青年趣味で滑稽な感じがした。「見つめてゐる。見つめてゐる。じつと見つめてゐる。水の面を……」と云つたやうな臺詞が突然現はれて來たときには一驚を喫した。あゝ云ふアナウンスは、實況の中で聽くと鼻持のならないほどキザなものである。先づ時代物映畫物語りにでも役立てるべき臺詞である。

全體として、この歳末風景で實感の良く浮き出てる部分は、京都の二條城外濠と東京の上野驛であつた。大阪の部で文樂座や吉田屋は、材料が面白いに拘らず時間が長過ぎたせいか妙に間延びがしてゐた。實況放送の場合には、時間の限度が非常に大切で、いくら興味ある材料でも、長過ぎると直ぐ聽衆は怠屈してしまうであらう。それから、各地の盛り場であるが、實際には歳末らしく音が豊富であつても、餘りに豊富であり過ぎるために返つて放送には適さない場合が多い。目から來るものだと、いくら混雜してゐても各々の物象が明瞭に見別けられるから良いが、耳を通して聽くものは選擇作用が充分に行はれないから困難である。

二 ニュース放送としての「神風」

「神風」が羽田航空港に歸還したときの實況放送は、内容が人氣の頂點に達してゐたニュースであるだけに、一種の大衆的迫力を著しく持つてゐた。「今着きました」と云ふアナウンスと前後して機關の音が聴え、群衆の「ワー!!」と云ふ歡聲がきこえて來る瞬間は、聴取者の心に迫るものがある。恐らく、このニュースほどに「現在」と云ふ時間の同時性が強い力を持つ場合は、それほど多くあるまいと思はれる。假りに若し神風號の到着が早朝か深夜であるとして、聴取者の都合から、録音されたニュースが適當な時間に置き代へられて放送されるとしたら、このニュース放送の持つ迫力は殆どなくなつてしまふに相違ない。「今、大阪を出發しました」、「今、下田を通過しました」と云つて來て、發動機の爆音と共に「今到着しました」となるところに、大衆の心を動かす迫力がある。この點では、如何に早く封切られたニュース映畫よりも強味があるわけであらう。

然し、それだけに、この種の放送に出て來るアナウンスは、「現在」と云ふ時間の流れを的確に捉えてゆくに必要な簡明さを持たなければならぬ筈である。従つて、同じ言葉を二度づゝ繰り返してアナウンスすることは、餘程考へものであらうと思はれる。尤も、「二人の勇士は笑つてゐます。然し恐らく、心の中では泣いてゐることでせう」と云ふやうな言葉を、たてつづけに二度だけ繰り返すことは、或は効果を強める上に必要かも知れない。けれども、「男子の本懐」と云ふやうな陳腐な言葉や、「一生にたつた一度の悦び」と云つたやうな誇張された言葉は、唯だ一度限り使ふべきもので、これを繰り返すと甚しく耳障りでもあるし、この種のニュースに必要な

な緊張感が失はれる。この點は「神風」のニュースをきながら特に興味深く思つた點である。

だが、この場合にもやはり、最も強い迫力をもつてゐるのはアナウンスでなくて自然音である。「ワー!!」と云ふ群衆の歡聲がなかつたら、如何に巧妙で的確なアナウンスがあつても何等の感動を與へ得ないであらう。斷るまでもなく此處には、最も素朴な形に於ける群衆心理が現はれてゐた譯だから至極當然な話だが、各種のスポーツ放送で常に聴き馴れてゐる歡聲であるに拘らず、決してこれを缺くことが出來ないのは面白い。

三 生態放送としての「海猫」

動物の生態描寫と云ふものは、普通寫眞の場合でも映畫の場合でも、常に環境を取り入れることが絶對的な必要條件になつてゐる。ところが放送の場合になると、自然的環境そのものを特徴づけるだけの音がない限り、環境を描寫し取り入れるに充分な方法がないわけであらう。土地の状態などを言葉で説明しても、それは環境描寫にならない。従つて海猫の鳴聲を放送して少しでも「生態」を描寫しようとなると、甚だ困難を感じるに相違なく、聴く方でも退屈しがちである。

然し、海猫の場合には、鳥の鳴聲そのものに興味がある。海猫と云ふと何となしに海豹などと同じく獸のやうな氣がするが、猫のやうな聲で鳴く鳥であると云ふことになれば、その鳴聲をきいてみたいと思ふ人は多いであらう。従つて、海猫の聲を放送することそれ自身は甚だ有益でもあり面白くもあるのだが、問題はその放送の仕方である。あの聲なら恐らく一分間位で充分であり、それ以上續いたら退屈で困るに相違ない。私は、金華山沖

の江ノ島に行つたことがないから解らないが、今年のラヂオ年鑑に掲げである寫眞で推察する限りでは、波の音や鳥の羽音を組み込むことは、不自然でなく出来さうに想像される。それ等の自然音を適當に組み込むなら、あの放送はもつと面白くなつたのではあるまいか。勿論この場合には、波の音や羽音を現場で取らなくとも良い。江の島の磯にあたる程度の波の音と海猫ぐらいの大きさの鳥の集團的な羽音を録音したレコードを製つて置きさへすれば、適當に鳴聲とミックスすることが出来る筈である。他の場合でも、その位の準備をしなければ「生態放送」らしいものは出来ないであらうと思はれる。但しこの場合にも、各種の音をミックスする方法は餘り簡單ではない。恰も寫眞・映畫の編輯の如く、的確な感覺に基づく編輯の技術が是非とも必要である。さう云ふ技術がないと描寫が平面的になり稀薄になつてしまふ。

時局下の文展を観る (昭和十二年)

「文展」に就いて限りなく繰り返された議論を此處で取上げる必要はあるまい。それに年中行事「美術展評」の行列の中に加はることも私は趣味として好まない。然し唯だ、今年の文展に限つて見受けられる一つの特異現象に就いて短かい覺書をとつて置くことだけは、現代の藝術界を傍觀してゐる私の興味を惹く。

此處に「一つの特異現象」と呼ぶのは、目下の重大時局を直接に反映する相當数の作品が今秋の文展に陣列されてゐるのを意味する。先立つ二科會では、三つで五十錢の時局手拭を賣つたり、會員の小品を即賣したりしてその賣上金を寄附するような試みが見受けられただけで、作品のテーマは平時と變るところがなかつた。ところが今回の「第一回文部省美術展覽會」では、直接に時局を反映する作品を全部で十三點數へるのである。これを内譯してみると、日本畫四點、洋畫六點、彫刻三點となり、そのうち十點は無鑑査級と會員との作品である。

先づ日本畫をみると、帝國藝術員會員の川村曼舟が「秋空」と題して防空用聽音器を描いてゐたり、無鑑査の小早川秋聲が「軍國の秋」として青空に翻る日章旗を描いてゐるほか、千人針を畫題に求めたものが二つある。一つは無鑑査の榎本千花俊作「眞心を結ぶ」であり、他は神保治夫作の「千人針」である。

次に洋畫をみると、松田宙重と冢永騏三郎との二人が何れも「千人針」と題する繪を出してゐる。三、四人の無鑑査畫家が變つた着想に時局色を示してゐる。そのうち最も生々しい主題を扱つてゐるのは朝井閑右衛門の「通州の救援」で、小品風な野口謙藏の「應召風景」と面白いコントラストをみせ、草光信成の「軍曹」と小林眞二の「萬里長城」との二點は淡く時局を反映してゐる。

更に彫刻をみると、藝術院會員の齋藤素嚴が「避難者」と題する高肉浮彫を出し、無鑑査の一色五郎が「陸軍」と云ふ名で歩兵戦をクローズ・アツプにとつた浮彫を作つてゐる。そのほか、同じく無鑑査の河村龍興が童子達の群像を「挺身隊」と云ふテーマで漫畫風にまとめてゐる。

これ等の作品の各々に就いて詳細に述べる餘地はないが、注目に値する點だけを僅かに指摘すれば下の如くである。

全體の中で最も大掛りであり主題も最も直接的なのは「通州の救援」であるが、油繪の作品として恐らく陳列の許される限度に達してゐるさうなこの大作は價額も一萬二千圓と云ふ展覽會中での最高額である。生々しい寫實味を大膽に使つて強い迫力を表示しようとしたものであらうが、かう云ふ扱ひかたには的確な自己批判が必要である。また「軍國の秋」のように繚る日章旗一個に象徴的な意味を持たせる試みは、藝術寫眞などでは動的効果が充分に現はれるから扱ひ易く、これまでも成功した作例を多く見受ける。然し日本畫で同様な効果を擧げることが甚だむづかしく、これが出來たら餘程非凡な作家と云へよう。

それから、日本畫と洋畫とに四點出てゐる「千人針」は、何れも時局風景の挿繪に過ぎないし「聽音器」の如

きは變形された一種の花鳥畫である。浮彫二點は恐らく、紀念館の室内裝飾に需用を見出す作品であらう。

時局を反映する作品全體の中で、藝術的興味を惹くことの出来るのは「應召風景」と「挺身隊」との二點であらう。洋畫の「應召風景」は、一種の雰圍氣を浮き出させながら油繪としての畫面効果を持つてゐた。それから彫刻の「挺身隊」は、漫畫化された子供の群像として手際よくまとまつた作品であつた。

然し、もつと優れた作品が、藝術界の各分野から出て来ても良い筈である。

建築界の革新 (昭和十三年)

非常時下の現在は建築界の受難時代だと考へられてゐる。建築材料の使用が極度に制限された結果、多くの大建築が様々の形をとつた「未完成」の姿を示すことになつた。地下を掘下げたまゝ、基礎工事の途中で終つてゐるもの、大掛りな潜函工事の興味ある實驗として止まるもの、コンクリートを打つただけの巨大な形骸をさらすもの、等、等は一群の傷ましい時局風景に相違ない。建築學科の應募人員は急激に減少し、建築事務所は業務の縮小に伴ふ結果を憂慮してゐる有様である。けれども、別の立場から考へてみると、現在の建築界は一つの試練時代であるばかりでなく、更に積極的には重要な革新時代であると云へる。平時から既に必要の痛感されてゐた施設をこの機會に實現し、當然改革しなければならなかつた諸問題をこの秋に解決することが、少くともその實現性を希望し得る事情に置かれてゐるからである。以下に指摘する問題は、そのうちの最も重要なものであり、詳述すればその各々が非常に複雑な條件を含んでゐるのであるが、今は唯だ略記して、問題そのものの意味を簡単に説明するに止めて置く。

研究機關の確立

建築材料の缺乏に伴ひ、所謂「代用品」の問題が此處にも生ずると共に、必要品の使用を極度に合理化し、節約する方法も研究されてゐる。不燃焼木材の發明や木骨構造技術の再認識などは、廣く一般の社會にも報導されてゐるが、元來から云ふとこれ等の問題は、缺乏時に於ける窮餘の策としてでなく、平時に於ける最も基礎的な研究題目として當然取り上げてゐなければならぬ性質のものである。工學關係の専門教育機關としては、東京工業大學内に建築材料研究所があり、大學部内の建築學科とは獨立した一個の研究施設として存在してゐる。また、非常時下の應急施設としては、建築學會内に特定の委員會が出来て對策を考究してゐる。然し、これだけでは未だ足りない。もつと大規模な國家的研究機關が設立されて、而かも、的確に選定された人事組織と有益に使用し得る豊かな費用とを持つ必要がある。そして、此處で取扱はれる建築學上の課題は、各種の基礎科學に就いて充分に専門化しながら総合的な目標を正確に見きわめてゆくものでなければならぬ。現在の建築科學が他の工學的諸科學に對して弱點を示し困難を感じてゐるのは、建築の総合的な性質上、兎もすれば諸科學のディレックタントになる恐れがあるからである。従つてここに想定された理想の「建築科學研究所」は、基礎的であると同時に総合的であることを必要とする。

斷るまでもなくかゝる研究所の任務は、單に建築材料の改良や補充にあるのではない。日本の如き氣象狀態の特殊な國では湿度と温度との關係に對する建築上の問題だけでも大規模な研究施設を必要とするであらうし、地震其他の災害に就いても同様である。其他、保健上の諸問題も根本的な基礎研究を要求する點では變りなく、これ等の建築國策的な主要課題は設備と人材との充分にととのつた國家的研究機關を前提してはじめて解決し得ら

れるものである。然るに例へば防空建築の問題にしても、徒らに追従的な見解を述べて不必要な範圍にまで所謂「防空色」を云々するとき皮層的な態度を建築界の中堅層に見出すやうな事情にある。これに類する缺陷は、他の流行的トピツクに就いても折り／＼窺はれるが、この種の輕薄な「専門家」の發生も、基礎的な研究機關が充分に備つてゐれば自づから除去し得るに相違ない。

營繕機構の改善

現代日本の主要官廳が持つてゐる建築關係の機關では、逓信省の營繕課が特に傑出した成績を収めてゐる。最近に完成した東京逓信病院と名古屋逓信局との二つは、何れも、新興日本の實質的に誇り得る優秀作品であるが逓信省營繕課は、既に古くから、東京中央郵便局などに於いて、建築上の新時代を最も健全に代表して來たのである。

事實を故意に歪めて自らを守らうとする者の中には、逓信省營繕課の設計が恰もモダンな形式主義を尊重してゐるごとく曲解してゐる者もある。然し、この機關ほどに堅實な指導精神と科學的研究と藝術的感覚とを綜合し使用目的を明確に理解して合理性と審美性との兩側面を的確に考慮してゐるところは、他にないであらう。云ふまでもなく、個別的に存在する建築技術家としては、同程度に優秀な人物を所有する機關も他にあるが、或程度まで指導精神を統一的に實現してゐる點では、逓信省の營繕課が最も興味ある成績を示してゐる。

それから次に、中央官廳舎の新築されたものを見渡すと、鐵道省だけが唯だ一つだけ特に優れてゐるのを認め

る。鐵道省本廳舎は、現代日本の傑出した建築作品の一つである。新築された各省の本廳舎の中で、鐵道省だけは省内の建築機關で設計したものであるが、他の總ては大藏省營繕管財局の設計である。ここに問題がある。建築上の専門的技術に關係のない各省の當事者から考へれば、直接に財務を掌握してゐる官廳の建築機關に依頼する方が、經理上の手続きも面倒なく便利なやうに思はれるかも知れない。然し、假りに若し、大藏省營繕管財局の建築設計技術を極めて高度に見積るとしても、各省の特殊性を理解しその特質に基いて設計するためには、一般的に考へて、各省營繕課に依頼するのが至當だからである。

けれども、各省附屬の營繕課が設計監督した建築は、必ずしも優秀だとは云へない。逓信省、鐵道省の二つの官廳は、その性質上工學的技術を多く豫想した事務建築を必要とするが、それは同時に、この官廳の人事組織が他の事務官廳に比して遙かに多く専門技術家の參與を必要とすることを示すものである。ここに、これ等の官廳建築に散見する優秀さの基礎がある。従つてこの問題には、建築關係の機關が其處に當然含まれて來るが、例へば、鐵道省本廳舎の設計監督が大藏省の手に委ねられず独自の建築機關によつて實施されたときも、決定當時の事務當局が専門技術の尊重すべきことを良く理解してゐたによるものである。

従つて、單に經理上の便宜から官廳建築機構の集中化を計ることは非常なる間違ひであり、むしろ反對に、各方面の特殊事情に基いて的確に分散するのが至當である。また、現在の状態をみると、最も優れた建築機構をもつ逓信省すらも、その機能を充分に利用しつくしてゐるわけではないが、此處には現在注目されてゐる文官對技術官の一般問題を充分に反省する餘地が残されてゐるものと云へる。

新興の機運の強力な歐洲の國家として、イタリアほど建築の傳統を豊かに持つ國は他にない。古典文化とクリスト教文化とを紀念する建築的遺跡をイタリアほどに誇ることに出来る國は他にない。が、それにも拘らず現代のイタリアは、最も大膽に新鮮な建築様式を採用してゐる國であり、建築を通じて新興の機運を最も盛大に誇示してゐる國家である。

この事情は、イタリアの都市に窺はれる特殊性に良く表示されてゐる。古代の廢趾が中世の紀念物と共存してゐる同じ地域に壯大なる現代風のモニュメントが聳え、古雅な滋味で統一されてゐる昔ながらの雰圍氣の間に明快な現代様式の建築施設が混じつてゐる。然し、それは決して、現代日本の都市に窺はれるやうな混沌たる雜居状態ではない。古代、中世、近世、現代、の諸時代が、建築様式の優れた「時代調」を通して明確に描き出されてゐるのである。文化史上の進展につれて、各々の時代に特有な「新しい」建築様式が創造され、その様式を基礎づけてゐる當時の社會的要求と藝術的感覚とによつて統一されてゐるのである。

従つて現代のイタリアは、濃厚な國粹主義の精神に基いて固有の傳統を尊重してゐるに拘らず、決して、形式上の傳統主義に墮落しないし、骨董的な回顧趣味に陥らない。何處までも、現代文化の科學的基礎に立脚して、建築施設の社會的使命を明瞭に自覺した形態を創造してゆくのである。最近イタリアから豊富に出版される建築書をみると、この國に漲る「實質的」な新興の機運を極めて切實に感じるが、この大方針はまた、現代の日本に

とつても非常に暗示的な意味をもつてゐる。

現代に即した日本固有の文化を建設すると云ふことは、古くから殘存してゐたものを復活させると云ふことではない。日本古來の傳統を尊重すると云ふことは、回顧的な骨董趣味を獎勵すると云ふことではない。外來文化の追従的模倣を排除し、日本の特殊性を正確に認識し、現代日本に最も必要なものを創造するのである。それと同様に、現代日本の建築の使命は、鐵コンクリート構造の建物に木造建築を模倣した屋根と軒とを附けることではなく、日本の地理的條件と國民性の特質と社會的事情とを的確に研究しつくした基礎の上に「新しい」創造を營むことである。

けれども、現代の日本にはまた、幼稚にして皮層的な現代主義を掲げ、狹量にして單純な態度を標榜する空虛な運動が繰り返されてゐる。そして、現代の低下したジャーナリズムと泡沫の如き流行意識とを利用しようとしてゐる。幼稚な進歩主義が老朽な回顧趣味と同じく、現代建築界の革新機運を阻止することは更めて云ふまでもない。

建築史上の日本は、如何なる古い文明國にも劣らぬ立派なモニュメントを豊にもつてゐる。神社や佛寺の如き宗教建造物はもとより、茶室のやうな住居建築に於いても、吾々は優秀な歴史的作品を誇ることが出来る。それだけにまた現代の日本は、「現代」を最も健全に表示する新興の建築を創造しなければならない筈である。

科學日本の新築 (昭和十三年)

東京市内に最近完了した建物の中で特殊な興味を感じるのは第一生命の新館と東日會館と公衆衛生院本館との三つである。この三つの建物を單に外觀だけ列べて考へると、その不思議なコントラストに現代日本らしいプロファイルを見出すが、内部の施設はまた別な意味から現代日本の各々異なる側面を代表してゐるのである。

第一生命保險會社が、僅か七五坪の土蔵めいた建物から出發して、ファッショ・イタリアの新時代を聯想させる一四〇八〇坪の大建築に進展する経路を回顧することは、建築的にも甚だ興味深いであらう。日本橋に建つた三〇九坪の第二舊館と、京橋に出來た三五〇七坪の第三舊館とが何れも角地面に似たやうなシルエットを描いてゐるのも面白いが、この第三舊館の東洋殖民地的外觀から新館のファッショ・イタリア風に變化した有様も、好意ある微笑をもつて觀察するに價する。

尤もこの外觀には、中世紀以來のイタリアに残る Palazzo のやうな Massenwirkung を充分に發揮するほど完全に肚をすへ切つてゐないところが見受けられる。例へば、正面の角柱の上端に存在する微かな柱頭の殘存物、兩端の柱が外壁面との間に離してゐる細い溝等がそれであるが、更に徹底して外壁面全體の仕上げを整理してみたら、現代的な感覺に再生した様式の強い迫力を示すことが出來たかも知れない。

第一生命の潜函工事現場をみたのは確か昭和十年だつたと覺えてゐる。元の警視廳の跡に興味ある基礎工事の進められたことは、それ自身實に科學日本の進歩を象徴するものであつたが、竣工つたこの大建築を地下四階から屋上まですつかり歩いてみると、此處にもまた改めて科學日本の發展を感じる。機械室・金庫室・書類整理室・氣送管中繼室・中央監視室等を重役室・會議室・客室などと對比させてみるのも興味があるし、正面入口内の營業室や地下二階の配管床も有益な問題を色々もつてゐる。兎も角もこの程度に見えたえのある建物は、非常時下の日本には他になからうし、今後幾年かの間は希望することも許されまい。

同じ堀端にたつ二つの生命保險會社の「第一」と「明治」とを外觀のコントラストや内部施設の相異に就いて比較してみるのも興味深い一つのテーマであり、色々な問題が引出せさうにも思はれる。

東日會館の外觀は、ロンドンのデイリー・エクスプレスの黒色ガラスの外装を、明るい色のモザイク・タイルにしたやうなものにもみえるが、同時にまた、關西から東京に進出して來た東寶の建物らしいところもある。東寶劇場と東日會館とを列べて建てたら定めし面白かつたらうと云ふやうな氣持もするが、全體の感じは東寶劇場など、全く異なり、明快な中に一種の「ふくよか」さが含まれてゐる。唯だ外觀上の難を拾へば最上部のブラネタリウムの外被に使はれた骨格が露出してゐて、全體のエレベーションに何となく「甘い」感じを與へる結果を生じたことである。あの構造體はむしろ平たい圓筒形の外壁で掩ふてしまつた方が外觀を引きしめて良かったらうと想像する。隣接する東日新聞社の建物と比べてみると、凡そコントラストの限りをつくしたやうな相異を

示すに拘らず、兩方の外觀に何となく似たところがあると思つてゐたが、良く考へてみると、東日新聞社の屋上にある亭のやうなものと東日會館の屋上に露出してゐる構造體とが、相俟つてまう云ふ印象を誘ふことが解つた。ちよつとしたものが意外に大きな作用を起す面白い例である。

この會館は、全體の平面设计がプラネタリウム本位に出来てゐるから、借事務所の室割りなどもその制約を受けてゐるが、初めの設計が後になつて變更されたため、プラネタリウムを中心に吹抜きの積りになつてゐた空間まで借室に利用されてしまつた。利益の計量から割り出された變更であらうが、この點は最初の設計通りにして置くべきところである。

東京市には科學知識普及の施設が餘り發達してゐない。上野の科學博物館のごときも、何となく、動物の墓と古道具屋の店とを混合したやうなもので、建物そのものもまた墳墓の聯想を誘ふに充分である。鐵道關係の啓蒙的な施設も神田の萬世橋驛の一部を使つて出来てゐるが、新に完成した東日會館のプラネタリウムは東京市には非ともほしかつたもの、一つである。さう云ふ意味で東日會館が營利的にせよこの企劃を試みたことは好ましい。然し、餘りに營利的に計量しすぎて、一階の廣々とした商店區域を殺さぬやうに注意すべきである。場所も良く、交通上からも人目に付きやすいところであるから、ガラス越しにみても綺麗で建物の外觀に相應しいサービスマ・ステーションか喫茶室にでも使ふのが本來であらうと考へる。

公衆衛生院本館を外觀だけで見ると、中世西歐の寺院を現代風に翻案したやうな印象を受けるが、同じロック

フェラー財團の資金による大建築として帝大圖書館と列べてみても仲々に面白いものである。設計者の苦心談によると、文部省所屬の傳染病研究所と厚生省所屬の公衆衛生院とは日本を代表する二つの衛生研究機關であり、同じ敷地内に相對して建つてゐるのであるから、何れからみても互に引け目を感じないやうな外觀にしてほしいと云ふ當局の要求があつたさうである。微笑を誘ふ味のある話である。

然し、この建物の實の面目は内部の研究設備にある筈で、四百萬圓の資金による教育機關の特質はこの設備に發揮されるわけであるが、現在のところは未だ何も無い。従つて中を歩いて、唯だ平面设计の錯雜した感じを味ふばかりであるが、一つ非常に氣に入つたのは五階にある學生の宿所であつた。ペンティレシヨンの充分な中央の通路に向つて各室は玄關めいた入口を持ち、六疊の室の外にはラヂエーターを置いた縁側と明るいガラス窓が開け、室内には床の間と書棚を置く場所とがあり其他、押入と郵便入れともあるし、書齋用の机も置いてある。宿者の使用する共同の浴場も豊かであるが、洋室には獨立した浴室が附けてある。帝大を出てから二ヶ年の修學期間を終ると公衆衛生員として各地に派遣されるのだと云ふが、この二年間の生活は甚だ良さうに思はれる。

この建物の屋上塔は地上よりの高さ三六米餘にあたるが、その上に立つて周圍を展望するのも非常に快い。私はかつて日吉臺に新築された慶大豫科の寄宿舎を設計者に案内されて視たことがある。昔の第一高等學校に入學したとき私が取つた最初の手續きは理由を設けて皆寄宿制度の重壓を逃がれることであつた。萬年床の不潔な寄宿生活を思ふと、一高入學の喜びに憂鬱の影がさしたものだ、學生時代を遠い昔に回顧する近頃になつて二

つの快よい寄宿設備を視ると、「今の若い人達は幸だ」と云ふ老人めいた言葉も云ひたくなる。けれどもまた考へてみると、この住みにくい世の中をもう一度繰り返すことは何うもおつくうな氣がする。

日本紹介と壁面寫眞 (昭和十四年)

一

近頃の建築雑誌をみると、建築内部の裝飾意匠として壁面寫眞を使用するものを折り折り見受ける。それからまた、従来ならば色彩的な効果をもつ壁面裝飾を配合したであらうと思はれるやうな部分に、黑白だけの寫眞的圖案を適用してゐるものも見掛ける。これ等の「試み」或は「流行」の發生した原因として、凡そ三つの場合を想像することが出来るであらう。即ち其一は、現代的な建築内部意匠に調和したものととして、この種の壁面裝飾が考案された場合であり、その二は、新しい藝術(或は工藝)としての寫眞を云はゞその「新鮮味」によつて使ふ場合であるが、第三の原因としては、製作上の費用が比較的安價であり、一定期間の後に取り換へ得る——と云ふ便宜を數へることが出来るであらう。同様に壁面寫眞はまた、ショー・ウィンドウのバックに使はれる。商店で販賣してゐる商品を並べたショー・ウィンドウのバックに、その商品を使用してゐる有様を示した大型寫眞を割りつけると、裝飾意匠としても快よく、觀者に強ひることなしに宣傳の目的を達することも出来る。尤も、これには商品の性質が深く關係するし、飾窓を取りまく建築意匠とも調和するものでなければならぬが、タイプライターとかスポーツ用具とか、さう云ふ商品を賣つてゐる氣のきいた店では、日本でも既にこの種の壁面寫眞

を利用してゐる。そして、この場合にもまた、観衆の注目を喚起し目先きを變へると云ふ便宜が、考慮に入れられてゐるのである。

二

巨大な面積を有する宣傳用の壁面寫眞は、歐米諸國で可成り古くから使つてゐるし、その使用法も様々である。また、各種展覽會や博覽會に寫眞を利用し、種々の形式にレイ・アウトする試みも既に以前から存在してゐる。昨年日本で行れた「大獨逸展」や最近の「イタリア展」の如きその興味ある一例(後に纏めて略記する)だが、先年のパリ萬國博なども、各國とも盛んに壁面寫眞を應用した。Architectural Review のパリ博特輯號をみても、壁面寫眞の使用法や目的は大體わかる。單に壁面裝飾として用ひられてゐるもの、陳列物品と相待つてその使用價値を説明するもの、額畫の代用をなすもの、統計表の中に組み込まれたもの、等々あるが、嚴密に云ふと全體としてパリ博の壁面寫眞は尙ほ模索の段階にあり、中にはディレクタントイズムを示す程度のものもあるらしい。

其内で特殊な性質をもつ極端な試みの一つは、ル・コルビュジェの計畫したテント張りの會場であるが、レジエの設計による壁面圖案風の表現形式を使つて、都市計畫上の諸問題を中心に各種のテーマを扱つたものであるに拘らず、著しく遊戯的な傾向を帯びてゐるやうに考へる。

DES CANONS, DES MUNITIONS? MERCI! DE LOUIS... S. V. P. と云ふル・コルビュジェ式の題名をもつ

單行本で、Monographie du „Pavillon Des Temps Nouveaux“ a l'exposition Internationale „Art et Technique“ de Paris 1937 として出版されてゐる。子供の繪本のやうな表紙圖案をもつこの本は、黄、赤、緑のテントの中に、レジエの彩色圖案に組み込まれたフォト・モンタージュ、大都市の雜踏を描いた子供の繪、圖解等から不思議に構成されてゐる。

この不思議な展覽會は、ル・コルビュジェ宗の作家達、フランスかぶれした拜外的な日本人、自分の「能力」を無視して徒らに氣焰をあげてゐる年若い「藝術擁護者」、等々からは、絶讃されたり感歎されたりするかも知れない。然し私などから考へると、かう云ふ表現形式で誰に呼びかけ何を訴へやうとしてゐるのか解らない。正しい専門家に企劃の主張を了解させるものとしては甚しく不眞面目であり、大衆を啓蒙するには甚しく不親切である。

かう云ふ性質の試みは、漫畫的に扱はれた一枚のタブローとしてなら微笑のうちに作者の氣概を認容することも出来よう。然し、重要な社會施設を扱ふ表現としては、甚しく不當である。殊に現代の日本のやうに、堅實な研究態度と健全な専門的自覺が要求されてゐる國であるに拘らず、稍もすれば排外主義の弊に陥り、徒らに氣焰を擧げて自己の能力を顧みず、ジャーナリズムに媚びて専門の權威を淫する——と云つた類の淺薄な現代主義や狹量なセクト主義の存在してゐるところでは、貧困してゐる建築思想を表面的に助長したり、反對に、無氣力な傳統主義に好都合な口實を與へたり、さう云ふ好ましからぬ影響を残す恐れがある。

四

パリ博に日本から出品した壁面寫眞は、鐵道省國際觀光局と國際報導寫眞協會との協同企劃に基いて製作した大型の宣傳寫眞と、國際文化振興會が日本の建築や學校生活を紹介する積りで製作したものである。

このうち、國際觀光局の壁面寫眞は、觀光宣傳の目的をもち、恰も巨大なポスターをみるやうなものである。張り合はせの技巧に未だ自信の持てなかつたせい、全部に着色をほどこしたため、寫眞としての効果が甚しく稀薄になり、圖柄からみても内容を過剰に盛り込みすぎて印象が混濁してゐたが、當時としては、日本最初の試みであり、かゝる點で日本の寫眞界に一定の意味を有するものであつた。國際文化振興會の企劃した壁面寫眞のうち、學校生活を扱つたものは、フォト・モンタージュとして未熟ながら兎も角もまとまつてゐた。然し、日本建築の方はモンタージュを誤用し完全に失敗したもので、文化映畫「日本の建築」と共に、この會の出品作中では最も成績の悪い代表者である。

然し兎も角もこれ等三種の壁面寫眞が、今回のサンフランシスコ・ニューヨーク博に進む一つの段階として、或程度の役割をはたしたことは、肯定して然るべきであらう。

五

米國萬博に日本が出品した壁面寫眞に關しては、商工省のほか、寫眞界の客觀的事情に精通してゐる朝日新聞

社アサヒカメラが最初の企劃に參與したので、他の出品部門と異り、相當に公平な態度で日本の寫眞界を動員することが出来た。然し、商工省をはじめ對外事業を扱ふ諸機關の官制や人事組織が未だ不完全なため、優秀な日本の寫眞機能を十分に發揮し得なかつたことは止むを得ない。今回の萬博に出品した壁面寫眞は全部で七種あるが、それを内別にと下の如くである。

- A 日米修交（資料複製額シリーズ、タイトル）
- B 交通・通信（フォト・モンタージュ壁面、額面シリーズ）
- C 日本風物懸賞寫眞（額面シリーズ）
- D 蠶糸産業（實演所のバックとなる壁面寫眞）
- E 觀光日本（カヴァード・スペースの建築意匠と連關する寫眞應用の壁面裝飾）
- F 靈峯富士（カヴァード・スペース内大型壁面寫眞）
- G 躍進日本・科學日本（同上）

これ等七種の壁面寫眞は、各々その性質を著しく異にし、出來榮もまた甚しく相異してゐるので、以下にその各個につき簡単な概評を記して置く。

六

日米修交を表示する壁面寫眞は、國際報導寫眞協會のH氏が設計したものである。室の平面、寫眞の割付け、

觀衆の視點等は的確な計量をもつてゐる。眞珠の鐘を中央に飾つた小室が通路で半分に分ちられ、片側に三方の壁がある。その正面の上部にタイトルが位し、兩壁面上部に油繪と日本畫との大型複製が置かれ、その下の適當な高さになる三方の壁に、資料を複製し引延ばした額面が列なる。その下のショウ・ウ・ケースに資料が收められるのである。従つて、日米修交の壁面寫眞は、全體として極く地味な形式をもちながら、室内の雰圍氣を構成する役割りをなすもので、中央のタイトルの如きも、甚だひかへ目に全體との調和を求めてゐる。大型複製二種以外の額面シリーズは、何れも小さい資料から擴大複製されたもので、むしろ寫眞技術上の問題として注目すべき性質をもつてゐる。

壁面寫眞と云ふと人目を驚かさやうな派手なものばかりを考へる者からみれば、この作品は甚しく物足りないであらう。然し、空間のコンディションと主題の性質とを的確に活かしてゐる點で、地味ながら手堅い仕事と云ふべきであらう。唯だ、府の美術館に陳列したとき、第一回と第二回に分けたため、一般の觀衆から誤解されたところが著しく多い。仕事が地味なだけに、本來から云ふと陳列の方法は注意深く扱ふべきであつたらう。

七

交通・通信の壁面寫眞は、鐵道省、逓信省、放送協會、國際文化振興會の協同企劃によるものである。引延ばしに關する寫眞技巧は良く仕上げは綺麗に出來てゐる代りに、材料の選定を誤りモニター・ジュの圖案に失敗してゐる點が少くない。例へば、交通の一面をみる。中央に巨大な汽關車があるが、アメリカのやうに鐵道施設に優

れてゐる國に持出すべき性質のものではない。アメリカの建築雑誌をみると、設備の良い車室の内部を紹介した寫眞など出てゐるが、さう云ふ汽關車を持つ國に向つて日本の鐵道を表示する場合には、材料の選定を充分に考慮すべきであらう。恐らく、自然の風光の中に鐵道を組み入れ、これを大型の壁面寫眞にまとめることが、最も安全にして賢明な方法であらう。

更に放送の部をみると、マイクの前で語る少女の顔が大きく出てゐる。少し口を開け上に傾けてゐるその顔は甚しく愚鈍にみえる。また、ラヂオ體操する少女の姿がある。畫面の上縁にまで達する大きい姿であり、それが上體を横に曲げた形なので、上がつかへてゐるやうな歪んだ構圖になり、不快な印象を與へる。

逓信關係のものでは、川口無電塔の基部とか、逓信病院の正面とか、中央郵便局の裏側とか、フォトジェニックなものは色々あるから、これ等を思ひ切つて擴大し、壁面に刺付けるべきであつたらう。このうちでは、中央郵便局一つだけが、小型の額面中に組み込まれてゐるが、このシリーズにも材料選定の誤謬は少くない。

八

日本の風光を紹介する寫眞の懸賞募集は、國際文化振興會とアサヒカメラの協同主催になるものだが、應募作品の多かつたに拘らず入選作の成績は思はしくなかつた。落選したものに優秀作があつたか否か私は知らないが商工大臣賞を授與された少女の人物寫眞も普通のアマチュア寫眞展に見る平凡なものであつたし、殊に、建築や都會を主題とするものは成績が悪かつた。

何時の場合でも同様だが懸賞募集の方法で、一般アマチュアから「都會」とか「建築」とか云ふ主題の作品を求めると、結果は常に不良である。その最大原因は、これ等のテーマを扱ふに必要な豫備知識を一般のアマチュアが缺いてゐるからであるが、他の主題に就いても、今回の成績は良くなかつた。これはむしろ、各種目の賞金各々一百圓を以つて、各種の専門寫眞家に指定撮影させ、材料も豫め審議を経て決定し置くべきであつたらう。例へば建築のごときは、優秀な技術家W氏に依頼し、古いものなら奈良の法華堂、新しいものなら鐵道省か逓信病院を撮影してもらふべきであつたらう。これ等の作品は、私の知る限り大型寫眞や映畫で外國に紹介する機會を一度も持たなかつたやうに考へる。

この懸賞寫眞は、國際文化振興會で適當な「日本的」額縁を選定し、日本畫風に扱つて装つたので幾分救済された。外國人のエキゾティズムに喜ばれるものは含まれてゐるに相異なるが、さう云ふ態度は現代日本の清算すべきものであらう。

九

蠶糸産業の壁面寫眞は、中央蠶糸會の出品である。同會は、製品の輸出向見本として巨大で惡趣味なフスマの如きものを出品してゐるから、寫眞を餘り重要視しなかつたやうである。この壁面寫眞は、蠶糸製作實演のバックになるばかりでなく、其處には同時に製品も陳列されるので、背面意匠らしい消極的なものになつてゐる。製作者としては日本蠶風の味を出さうと考へたらしいが、實際は、日本畫と寫眞との距離を痛感させたのみで効果

は非常に稀薄である。この圖柄を小型の寫眞でみると仲々面白くまとまつてゐるやうに推察されたが、擴大してみると甚しく散漫なものになる。これは、優れた日本畫の持つ畫面効果が寫眞には全然ないためであるが、かう云ふ錯誤は、今後の問題として極めて教訓的である。

この壁面寫眞は、一人のモデルを使つて蠶糸作業を半ば象徴的に表現した試みであり、バックの裝飾圖案としては好ましいアイデアなのであるが、壁面寫眞だけを切り離してみた場合と、背景の中に沈ませた場合とでは効果が著しく異ふから、實際の評価は現場でないと解らない。

一〇

國際觀光局出品の「觀光日本」は、カヴァード・スペースの館内意匠を全體として設計したY氏の圖案による。従つて必然的に建物内部の構想と調和するやうにまとめられ、「竹を主題とする」構想で統一されてゐる。この作品は、圖案としてまとまりの良い點で今回の出品作中最も優れてゐるが、その主要な特徴を列記すれば下の如くである。

- A 國際觀光局は設計者の意向を尊重した。
- B 設計者は館内意匠と調和するやうに圖案し得た。
- C モーティーフを單純化し、寫眞の使用面積を的確に縮少し、壁面の建築意匠の中に割り付けた。
- D 主題の性質上、日本の傳統的側面から多くの材料を得てゐるので、仕事が容易であつた。

E 材料は常規的なだけに安全であり、且つ、この構想の中には良く適應した。

以上の如きコンディションを持つこの壁面裝飾は、何處にも難點のない出來榮にまともつてゐる。笛、箏を吹く藝妓、能面、扇、扇面に描かれた城と大佛と橋、扇をもつ三人の少女、孟宗竹の林を背景とする女、等、等と云ふ具合である。出て來るものは何れも舊套を脱してゐず、この設計に不満を抱く者の多いのは當然である。然し、この「觀光日本」はこれで兎も角まとまつてゐるし、カヴァード・スペースに良く調和してゐる。従つて若し、正しい理由からこの壁面意匠を非難しようとする人は、更に溯つて、「竹を主題とする」アイデアを採用させた費用の乏しさを問責すべきであらう。

何時までも「竹」を賣物にしてゐることは私も好まない。鐵道省國際觀光局で映畫「竹」を作つてから、國際文化振興會製作の映畫にも竹が現はれ、ドイツの手工藝博にも竹細工が出る——と云ふ具合である。對外事業に長年の經驗をもつ人でさへ「竹は土人的である」と云つてゐる。その竹をまた此處に持ち出した點に就いては、常事者と設計者とを共に批判すべきであるが、一度テーマを決定した限り、そのテーマに基づいて徹底的にまじめたこの構想そのものは、缺點を持たぬと云つて良い。

一一

最も巨大な面積を有する靈峯富士は、國際觀光局内の對外團體が出品した名義になつてはゐるが、實は材料商の六櫻社を出品者と見做すべきものである。元來この仕事は、云はゞ「天降り」的に六櫻社の企劃したもので、

早くから撮影に取りかかり、富士を中心とする巨大な風景寫眞を製作しつゝあつたのである。

従つてこの壁面寫眞は、カヴァード・スペースの空間的コンディションをネグレクトし、下から見上げる觀衆の仰角度を無視して上から俯瞰した構圖をとる作品として、會場裝飾の第一條件を缺くものである。けれども假りに若し、壁面から相當の距離を置き、床面から相當に高められた位置に觀衆の眼を置くとすれば、充分に興味をもてる寫眞である。云はゞ、昔のパノラマのやうなもので、高いガレリーを歩きながら日本の風光に親しめるやうな館内の構造とすれば或程度まで面白いものになつたであらう。パリ博に於けるアウストリア館の山岳寫眞が失敗してゐるのを考へ併せてみると、甚だ教訓的である。

けれども、日本の對外事業關係者の中には、端睨すべからざるほど幼稚にして低級な頭腦の持主が居て、この富士山に色を塗り照明を加へ、近景には小道具を使ふと云ふ驚くべきアイデアを平然と述べてゐるやうな有様だから、さう云ふ事情から見るとこの富士も余程良い方である。會場のコンディションを無視してゐるため、近景の山が石炭殻のやうに見えるであらう——と云ふ非難もあるが、今回の出品作中にあつた寶船のやうな悪趣味なものや、前回のパリ博に出た偉大な金網細工の日本地圖のやうに幼稚なものに比べると、甚だ良い部類に屬するかも知れない。

一一

躍進日本、科學日本は國際文化振興會の出品である。「科學文化」と云ふものを強調し標榜するこの會の一側面

は、對外事業諸機關の中で特筆に價するであらう。然し、觀念的な議論に墮いたためか、恐らくは豫期したであらうと思ふものと正反對の成績を示す結果に到着してゐる。今回の壁面寫眞の如きその適例で、「主旨」は良いが「結果」は悪い。徒らに聲高く呼びかけやうとしてゐるだけで、畫面は驕然として混濁し、カヴァード・スペースの雰圍氣を破壊してゐるのである。

現在の日本としては、科學文化強調する方法は餘程の用心を必要とする。少しでも弱點があれば、當不當に拘らず、それを利用して無氣力な傳統主義に引きもどさうとする氣配が甚だ濃厚である。従つて、躍進的な日本の側面を對外事業に示す場合には、その仕上げの美しさを特に考慮し、何人をも納得させるほどに手際良くまとまつてゐなければならぬのである。

ところが、この壁面寫眞に於ける國際文化振興會の企劃は、その運用上に一つの缺陷を含んでゐた。無氣力ながら原案は、この館内の雰圍氣に兎も角も適應させた試みであつたから、それを基にして材料の選定を充分に審議すべきであつたに拘らず、館内意匠の原案を無視したこの壁面寫眞は、畫面効果として統一なく、甚だ觀念的なものとなつてゐる。國際文化振興會は、國際教育會議を機として作つた寫眞帖、ドイツ手工藝博に出品した天然色小型映畫、等々の優れた事業を企劃してゐる點で、日本に於ける對外事業團體として著しく進歩的であり、知的教養の點でも他の諸機關に比して豊富なのであるが、今回の壁面寫眞は、むしろ「知識」と「効果」とのバランスを誤つたものと云へる。この點も、今後にとつては大いに教訓的であるに相違ない。

最近に東京府美術館で開催した「ファアシスト伊太利展覽會」は、昨年に美術協會會場を化粧して使つた「大獨逸展覽會」と比較しながら考察すると、壁面寫眞の利用上興味深い問題を多く見出す。目下私は、國策的に統制されてゐる歐洲の二大新興國として、ナチス・ドイツとファシヨ・イタリアとを建築施設中心に比較し、建築の背景となつてゐる古來の傳統や近世に於ける建國の歴史をはじめ、現在の文化施設を綜合的に理解する材料を出来るだけ調査しつつある關係上、この二種の展覽會は面白く觀たが、さう云ふ廣汎な問題を離れ、單なる「壁面寫眞と展覽技術」に視野を限るとしても參考になる點は非常に豊かである。

ナチス・ドイツは國策用に寫眞を使用することの的確巧妙な點で、現代世界中の特に傑出してゐる國である。各種の普及宣傳に寫眞帖を利用し、その用法の優れてゐる點で、ドイツに比べると他の諸國は遙かに及ばない。さう云ふ宣傳企劃をもつてゐるだけに、「大獨逸展」でも寫眞の應用は充分に効果的であつた。この種の巡回展として、相當大型の壁面寫眞を最も良く活かしてあつたのは、記念室に先立つ軍備の室だが、其他、敗戦の困苦から起ち上る部分や、殉難者記念碑の部分にも的確な利用法が窺はれた。然し、この展覽會全體の基調から云ふと寫眞は決して「主」でなく、模型、繪畫、圖解などと相俟つて説明的な役割りを單に「分擔」してゐる感があつたのである。

ファシヨ・イタリアは、現在までのところ、寫眞の利用法に就いて左程に優れてはゐない。場合によると、む

しろ甘いディレクタントイズムが感じられ、「未來派」めいた痕跡さへ明瞭に看取されるのである。然るに、今回の展覧會をみると、全體の基調が壁面寫真本位に統一され、主要な構成分子になつてゐるのを見る。その關係を略記すれば下の如くである。

A 個別的な額面を順序よく列べて、一定の施設を紹介したもの。(リットリオ・イタリア青年の活動、生産工場の施設)

B 空と水と土とに淡彩をほどこし、フォト・モンタージュの壁面にしたもの。(水力發電所の規模)

C 建設前後の對比を美しい壁面寫真に構成したもの。(全面的土地改善)

D 迫力の効果をねらつてレイ・アウトした壁面寫真。(軍備)

E 裝飾的バックに組み込んだ寫真。(殖民地風物)

F 人物寫真に濃厚な彩色を加へた額面。(殖民地の諸人種)

G 商品及び模型と組合せたもの。(産業)

H 統計表のバックとして手際良く扱つたもの。(全面的土地改善)

I 彫刻の代用をするもの。(アウグストゥス、女神ローマ)

以上の中で、最も壁面寫真として良く出来てゐたのは、全面的土地改善の部分で、上記の壁面寫真の他に改善地區の地圖や農業改革の事情が美事な裝飾効果を以つて指示され、金屬を使ひ衝立のやうに造つたものもある。唯だ遺憾ながら、この部分の室は、向ひ合ふ壁面にラグーザ・オタマの幼稚で甘い繪額が澤山に並び、折角の室

内効果を破壊してしまつてゐた。其他は、特に優れた手際を示してゐないが、陳列の主旨は良く徹底してゐた。但し、美術館の會場をそのまま使つてゐるためか、ドイツ展のやうに統一した印象が残らないものであつた。

現代寫眞家の作畫態度 (昭和十四年)

現代の寫眞界を展望して、健全に發達し優秀な成果を収めてゐる諸現象を観るとき、其處に窺はれる注目すべき事實は、各種の寫眞家の作畫態度が何れの方面に於いても著しく専門化して來たことである。この事實は寫眞本來の性質からみれば當然の結果なのであるが、現代寫眞界の全般は未だ決してその自覺を充分に持たず、進歩した機能を用ひし、無批判な趣味に溺れ、技術と感覺との訓育を輕視する、等々の缺陷を示すのである。従つて此處に、現代寫眞界の傑出した業績につき、その作畫態度を一應反省して置くことは必要であらうと考へる。

世界各國の優秀な寫眞家の作品をみるに、その製作態度は何れも、「科學的」であり「藝術的」であり「職業的」である點で純化洗練されてゐるのを興味深く思ふのである。極く卑近な一例として小さい叢書に刊行されてゐる「ドイツ優秀作家集」の中から三冊を選び出してみるとする。北海の小島の荒寥たる性格を描いたレンゲル・パッチュと、幼ない少女の無邪氣に遊ぶ姿を扱つたヘッダ・ワルテルと、宮殿建築の豪華な雰圍氣を浮き出させたワルテル・ヘーゲと、三人の優れた寫眞家の作畫態度をこの小冊子の奥にみるだけでも、上記の必要條件が完全に具備されてゐるのを知るのであらう。北海の風に鍛へられた寂しい小島の風物は、かつて鐵材の特徴を美しく描いたレンゲル・パッチュを聯想させる。「子供の散歩」は家畜や小兒の「生態」を撮る手心を誰よりも良く知つ

てゐるヘッダ・ワルテルを感じさせる。ウエルツブルグのバロック式宮殿は、ナウムブルヒの寺院やアテンの神殿が要求したワルテル・ヘーゲを思ひ出させる。

いま此處に、僅かな一例として引き合ひに出した寫眞家達の製作態度をみると、何れも寫眞作畫の要點に於いて著しい共通性を持つてゐるのを知る。即ち、被寫體の特質を深く觀察するその理解力は充分に「科學的」である。その特質を表現する感覺は正しい意味に「藝術的」である。その感覺を作畫にまとめる技巧は豊かな經驗に基礎づけられて「職業的」である。

多種多様に専門の分化してゐる現代寫眞界では、例へば風景寫眞のごときものも、各々技巧を異にし感覺を異にする幾つかの種類に分れてゐる。空中撮影によつて新しい自然美を創造するもの、天然色の進歩した用法を通して自然を觀察するもの、發達した立體寫眞を使つて郷土の風物に親しませるもの、古い風景畫の構想を復活させるもの、明朗な快さを強調するもの、等、等を數へられるほどで、此處に寫眞美のグリエテを楽しむことが出来る。

肖像寫眞、商業寫眞、報道寫眞、などの如く職業的に最も専門化してゐるものは元よりであるが、寫眞によつて研究する雪の結晶や雲の形態、空中寫眞を利用する湖沼學、動植物の生態寫眞、等の自然科學的記録寫眞までも、科學的であり職業的であり藝術的であることによつて、實際上にも非常に役立つ、觀賞しても審美的な價値を有する「作品」の域に達してゐるのである。

また例へば、パウエル・ウォルフの從事してゐる國策寫眞帖やウィル・コンネルの才をみせた諷刺寫眞帖など、

ドイツとアメリカとを背景として考へれば、何れも最も現代的で優秀な藝術作品の一種である。同様に、山岳寫眞、建築寫眞、等の専門作品をはじめ、夜のバリを描いたフランスの寫眞帖、等、何れも立派な藝術である。

これ等の多種多様の寫眞作品は、一流の作家の製作になる限り、何れもその作畫態度に於いて、上記の奥義に徹してゐるのである。

現代人の日常生活に寫眞の受持つてゐる分野が何れほど大きいか——それを詳細に分析し反省してゐるのは興味深いことである。従つて現代人は、寫眞の有する作畫的意圖を通じて知らぬ間に一種の「視覚教育」を受けてゐるわけであるが、この教育の効果を支配してゐる當面のものは、直接に製作を行ふ寫眞家の作畫態度と、これを的確に利用する事業關係者とである。

然し、日本のやうに興味としての寫眞を自覺し標榜しながら愛好する國民にとつては、各種の優秀な専門家の仕事ばかりでなく、指導的な立場にあるアマチュアの作畫も、或程度まで國民の感覺を訓育してゐる結果になる。かう云ふ事情にある國では、餘技として寫眞にたづさわる者の作畫態度も、また注目し價する現象の一つであるに相違ない。

小型映畫界の動向 (昭和十四年)

一

現代日本の小型映畫界を總括的に展望して、その發達程度と社會的役割とを考察しようとする場合、主要な目標を下の如くたてる事が出来るであらう。即ち、一面にはプロダクション映畫と異つてアマチュアの世界が成立し、ここに小型獨特の興味ある現象が窺はれると共に、他の一面に於いては、スタンダード映畫と根本的に相異なる小型の性質を利用して、教育や宣傳の特殊技術に利用する問題がある。

斷るまでもなく、小型映畫界の現状を全體として考察すれば、標準映畫や普通寫眞に比べて甚だ稀薄な存在であるに違ひない。しかしこの長閑な世界に見出される若干の業績は、現在日本の藝術界を代表して歐米諸國に誇示することが出来ると共に、また對外的にも對内的にも、スタンダード映畫に見ることの出来ぬ優れた任務をはたしてゐるのである。

日本の全國で小型映畫を弄ぶ人の量を調べてみるとしたら、恐らく非常な數字を示すであらう。けれども、單なる大人の玩具として扱はれてゐる小型映畫は、此處で問題にする必要はない。従つてこの稿では、小型映畫界全體からみると數量的に極く限られた、しかも、仕事の成績からみると日本の小型映畫を代表してゐるやうな、

興味ある現象や優秀な作例に就いて、各種の問題をまとめて考察することとする。

三〇六

二

日本の小型映畫界と共に直ぐ思ひ出される作家は塚本閣治である。この代表的な優秀作家は、各方面の製作に關係してゐるので、云はば一種の「理想型」として見做すことも出来るし、塚本一人の作品を通じて小型映畫の發達程度と利用範圍とを考察することも、或る程度まで可能なのである。

やがて十年の昔になるが、ある映畫商から文部省の委員會に審査を申請してきた小型映畫の中に九ミリ半の能力を當時の最高限度に使つた二本の作品「水」と「火山」とがあつた。委員の一人であつた内務省の田島理事官なども、長い開映畫の檢閲をしながら、これほど優秀な九ミリ半をみたのは初めてだと感心してゐたが、私がある者の塚本閣治を知つたのはこのときからである。その後九ミリ半時代の新作はなるべく注意してゐたが、次第に發達するうち十六ミリの時代が來た。

一九三九年には塚本の十六ミリ作品も百本を越え、作品の範圍も著しく擴大され、技巧や形式にも非常な伸展が窺はれるやうになつた。東京鐵道局をはじめ、交通機關の宣傳企劃と直接間接の關係をもつものが大部分をしめてゐるが、その性質は決して宣傳映畫でなく、むしろ本格的な文化映畫の特徴を具へてゐるのである。内容からいふと、山岳關係のもの、地方的風物を扱つたもの、生物の生態や狩獵に取材するもの等が殆んど大部分であるが、例へば雪氷協會の依頼をうけて製作した最近の作品の如く、科學映畫の部類にぞくするものも含まれてゐる。

る。

これ等の數多い作品のうち、富士山麓の野鳥類や小湊の白鳥を撮した生態描寫とか、初夏の山旅や蔵王の樹氷を主題に求めた風景撮影とか、紅葉の山や花咲く高原を天然色に浮出させた試みとか、さういふ自然の物象を非常に美しく扱つたものもある。また、飯豊山獵人の生活を描寫した熊狩、宮内省の千鳥獵、等の興味ある狩獵實寫もある。それから、山岳に於ける遭難救済に傳書鳩を使ふ素直な演伎映畫も見出される。

これ等の作品の中では、「初夏の山旅」、「蔵王」、「野鳥の生活」等が諸外國の國際コンテストで、著しく優秀な成績を収めてゐるし、傳書鳩を扱つた「小傳令使」は、日本を海外に紹介する目的で昨年企劃された國際文化振興會の第一回コンテストに最も優秀な結果を示してゐる。

しかし本年の日本に設立された雪氷協會から依頼されて製作した二本の作品中「雪と風」のごときは、科學映畫として興味深く、東寶の「雪の結晶」や藝術映畫社の「雪國」と共に、雪害防止を主題とする第一期の試みとして注目に價する作品である。

塚本の小型映畫は、各種の知識階級や學生の間に著しい人氣をもつてゐるばかりでなく、一般藝術關係者や映畫研究家達からも尊重されてゐるから、今後もなほ多方面の社會的要求を満足させ、藝術鑑賞者を喜ばせてゆくことであらう。この作者は仕事の態度からいふと全くのアマチュアであるが、それにも拘らず作品の性質は個人的好みを超越して堅實な社會的效果を持つのである。

小型アマチュアの世界を廣く理解させるものは各種のコンテストであるが、主要なコンテストの成績をみると、単に映畫技術ばかりでなく、趣味や思考の傾向も明瞭にわかるし、一定の社會的目的に應ふその利用範圍も測ることが出来るのである。かかる意味から私は此處に代表的な三種のコンテストを選び、その成績を通して知られる小型アマチュアの特質を指摘して置く。

その三つのコンテストとは、一九三七年に「さくら小型映畫協會」が企劃した第一回國際コンテストと、一九三八年に國際文化振興會が創案した「日本を海外へ紹介する」コンテストと、一九三九年に「さくら小型映畫協會」が發表した「銃後の日本」を主題とするコンテストである。

第一回國際コンテストは、日本の作家のみならず諸外國のアマチュアも参加して相當に興味ある成績を示したものであるが、日本作家の仕事を見ると、非常な根氣を要する製産過程を撮影したものが含まれてゐた。例へば「寒天」とか「趣味の菊栽培」とかいふ作品は、素直にまとも好み感の持てるものであつた。

それに對し同じ製産過程を描寫した試みでも作者の趣味程度が混入してゐるものは多少の難點を含んでゐたし、生物や人物を扱つた作品になると一層それが甚しかつた。撮影の技術は相當に優秀でも、趣味が低かつたり灰汁が強かつたりして推稱し得ないものが相當に多かつたことは、注目に價する現象である。甚しいものになると拙劣な演技を濃厚にみせ幼稚な感を誘ふのである。

銃後の生活を描くコンテストは、同じ主旨に基づくスタンダード映畫に對して、顯著なコントラストを示したところに、特殊な興味が感じられた。例へば、「戦地の友に」といふ書簡體の作品のごとき、その代表作である。現に文部省の委員會に審査を申請してくる所謂「國策映畫」をみると、各種の公益機關によつて製作されたスタンダード映畫の大部分は明朗性を全く缺き、抽象的な精神主義や狹量な形式主義を徒らに標榜して缺乏に堪へることばかりを強調したものが多く、中には國策に反して觀者の反感を誘發するものが少くない。ところが、この「戦地の友に」といふアマチュアの作品は、日本内地に物資が豊富であり、國民の心が明朗な餘裕を持ちながらしかも銃後の國民に必要な心がまへを示してゐることを知らせたもので、非常に氣持良く觀ることの出來た作品である。なほこのコンテストには、「吾等も銃後に」といふ作品のごとく、軍用犬の訓練を面白く撮影した試みもあり、ここにも和やかな明朗性が感じられた。

國際文化振興會の懸賞募集は、この會の黒田常務理事が「第一回國際コンテスト」の審査から着眼した企劃であるが、塚本閣治の諸作を除くと、「舞扇」や「器用な手」の如き輸出向映畫の優秀作のほか、「蜘蛛と頼光」とか、「日本の子供達」とかいふ種類の微笑を誘ふに足る興味ある作品があつた。このうち「蜘蛛と頼光」は、昔のドイツ映畫「アクメット王子」のやうに圖案化された試みで、能樂の「土蜘蛛」を簡単な小型映畫にまとめたやうな面白味を持つてゐた。頼光に退治される蜘蛛の描寫など圖案的に極めて手際よくまとまつてゐた。このコンテスト第一回は、企劃そのものも摸索的であつたが、第二回からは主題を限定してゆく方針である。

これらのコンテストの結果に就いては、アマチュア界からセクト的な非難なども出てゐるやうであるが、小型

アマチュアの安價で狭量な氣持を裏書きする缺陷がそこに認められると共に、これらの小型アマチュアを強ひて無反省にする特殊機關の態度と相俟つて、自からその社會性を狭めるごとき弊害を伴ふものである。この點に就いては、小型アマチュアのサイコロジを良く理解して指導する責任が、各種の企劃者側にもあるわけだが、適宜に導いてゆけば、小型アマチュアの利用率は相當に大きいことを認め得るであらう。

四

小型映畫を教育上の技術や宣傳用の手段として使ふ場合は諸外國にも多いが、日本でも相當に注目されてゐる。このうち、教育方面の利用は、熱心な當事者達の抽象的論争が盛んなほど實質的な優秀作は出来てゐない。それからまた、スタンダード映畫を小型に縮寫したフィルムの利用率も、統計的數字の示す範圍内では相當の量に昇つてゐる。しかし、これは單なる便宜上から小型映畫を適用してゐるにすぎないので、小型そのものの特殊性を活用した試みではないからここには觸れずに置く。

宣傳の目的から小型映畫を的確に利用してゐるのは國際文化振興會である。近頃の興味ある示例は、昨年ドイツに開催された手工藝博覽會に出品したシリーズで、その中には、友禪染をコダクロームで撮影した二巻が、最もこの企劃に相應しかつた。また、この種の手工藝を紹介した作品としては、先年のパリ博に出品した「日本人形製作」と上記のドイツ博に送つた「日本の紙扇子」とが觀衆の興味を惹く作品であつた。しかし振興會の小型映畫企劃として特に着想の面白かつたのは、數年前アメリカカ舞踊博に出品して良好な成績を収めた「京鹿子娘

道成寺」である。小型映畫はコダクロームの技巧に未熟な點があつたが、注意深く扱はれたレコード伴奏が附いてゐるから、舞踊博覽會の出品作としては非常に適してゐた。

けれども、國際文化振興會の小型映畫利用はこれだけに止まらない。スタンダードで製作した各種の作品も小型に縮寫して多數のプリントを作り、廣く海外に配布してゐるのである。外國に於ける外交官の社交生活では、例へば御茶の會などに人を招くとき、かういふ小型映畫が非常に役立つといふ。尤も、外交官の努力次第であるが、南阿聯邦に行つてゐる岡田公使など、自分自身小型映畫のアマチュアであるだけに、振興會の配給作品を良く利用し、外交官の中で最も文化紹介に熱心だといはれてゐる。

だが、小型映畫の社會的利用範圍は未だこれだけに限るまい。その性能の限度と特徴とを國內教化の任にある當局が正確に理解してゐれば、これによつて適當な効果を擧げる企劃は充分に可能な筈である。

遺構と現代 (昭和十五年)

一

かつて外務省の文化事業部長をしてゐたO氏から私がきいたところによると、日本の建築史學界で元老の位置にあるI博士が熱河の遺跡保存のため當局に提案した豫算は、日本の財政状態としては極めて老大なものであつた。O氏の言葉によれば「空想的」なものであつた。然し、この話をきいた私は、唯だ微笑のうちに聞きのがすことの出来ない一つの問題を、この雑談の中に感じたのである。

現代日本の一般建築家達が、所謂「新東亞」の時局を機會に、急激に東亞大陸の遺構を注目しはじめたと云ふことは、冷静に考へてみれば甚だ不思議な現象である。既に二十五年の昔、私は故關野博士から東亞最古の木造遺構に就いて話をきき、「このまゝにして置いたら早晚失はれるでせう。惜しいものです」と云はれ、思はずハッとしたのである。インドの遺構に對してイギリス當局のつてゐる處置を更めて考へ合はせたからである。そのとき私は、關野博士が、ネパールの中まで無理に入らうとされた話をきき、不自由な旅行を想像してみても、深い感銘を受けたが、さう云ふ昔のことを今になつて比較しながら考へてみると、甚だ不思議な氣持がして來るのである。けれども、それは別問題とする。新東亞問題に聯關して、日本の建築界が更めて東亞の遺構を「發見」(?)

し「再認識」したことは、兎も角も結構なことである。然し、それが、時局に因んだ單なる「流行」となり、日本個々の優秀な建築の遺構を忘れがちになつてゐることに就いては、大いに反省の必要があらうと考へる。

熱河の遺跡が如何に貴重であるとしても、日本に現存する遺構の貴重さには比ぶべくもない。而かも、日本の建築史學的使命からみれば、何をおいても、先づ、日本在來の優秀な建築を各種の學術的觀點から深く認識し、それと同時に、その大切な遺構を出来るだけ完全に保存する方法を講ずべきである。ところが、遺構の保存法に關しては、極く微弱な審議機關がある程度のもので、強力な實施機關など何時になつたら出來るのか、全然不明な状態である。従つて、日本の建築界としては、遙かに遠い昔から、日本の優れた遺構を安全に保存する方法に就いて、根強い態度で政府當局に働きかけてゐなければならなかつた筈である。

ところが、奇怪なことに、日本建築界の正しい「義務」とも云ふべきこの種の努力は、殆ど企てられなかつたに拘らず、たまたま「新東亞」の時局にあつて、新大陸の建築の保存事業が問題になつてゐるのである。日本内地の優秀な遺構は、藝術的價值から云へば、大陸に現存する遺構より遙かに高級なものである。而かも日本の遺構は、火災、風害、震災、其他に對して、甚だ危険な事情にある。従つて、日本の建築界が當局に働きかける仕事としては、第一に國內に残る貴重な遺構の保存事業に向けらるべき筈である。それにも拘らず、日本國內を忘れて大陸を問題とするところに、今の日本人の嚴肅な反省を必要とする點があるやうに思はれる。

近頃のジャーナリズムは、法隆寺壁畫の模寫に就いて記事を掲げ、この壁畫が最高の日本美術であり、最善の處置を必要とするものとして述べてゐる。然し、この壁畫と同程度に大切な遺構がもつと簡単な方法で救濟され

るのであるが、それを力説する有力者が日本の建築界に一人もないやうである。

二

雑誌「現代建築」は千利久の特輯號を刊行した。この雑誌の今後が何うなるのか私は未だ聞いてゐないが、この特輯號は意義ある企劃であつた。更めて述べるまでもなく、優れた茶室建築の特徴は、一面から考へれば、日本建築の造型的性格を最も純粹に表示するものと云へるであらう。特殊な審美的價値を含む生活目的に即した建築形態として、材料と意匠と、自然的環境と造型的形態と、審美性と合理性とが、簡素で純粹に構成されてゐるからである。従つて、優れた茶室建築を正確に研究し鑑賞することは、日本個々の建築藝術を基本的に理解する上には是非とも必要な前提であると共に、建築作品の創造に志す専門技術家にとっては、造型的感覚を養成する大切な課程であると云へる。

けれども、建築専門の技術家が過去の優れた茶室を考察してこれを現代建築の觀點から扱ふ場合には一つの警戒すべき危険が存在することを注意しなければならない。優れた茶室建築が現代日本の建築界に與へる最も重要な効果は、専門技術家の教養と感覺とを基本的に養ふところにあるが、これを自分の體驗に組み入れて製作に活かし、而かも現代社會の要求する建設的な仕事にまで直接結び付けることが出来るためには、非凡な努力と才能と思索とを豫想しなければならぬ。さうでないと、他の優れた傳統藝術の場合と同じやうに、ディテールに精通した單なる知識に終るか、然らざれば、高級なディレクタントイズムに溺れる危険が多いであらう。

尤も、特殊な有産アマチュアの鑑賞に供する住宅建築の設計としては、幾多の需要を持つことが出来るであらう。然し、廣く一般社會の要求を満足させるに足る審美性を創造するのでない限り、現代建築界にとつては何等の積極的意義もない。熟練のつんだ茶室大工の手際と、地味で高價な良質の材料と、それ等の條件を前提してはじめて個々の價値を生ずるものに止まる限り、現代建築としての積極性は認めることが出来ないであらう。元來茶室建築が特選階級のエステーティシズムに發達の契機をもつものであるだけに、なほさら上記の危険は多いのと考へざるを得ない。

三

この夏のはじめ、全國都市協議會が京都で開催されたので、役員として出張した機會に私の仕事に必要な材料を少しばかりあさつてみた。久し振りに南禪寺の山門や蓮華王院本堂も訪れた。南禪寺の方は環境が良くまとまり、周囲の住宅地までこの寺の雰圍氣に調和し、あの美しい山門を様々の角度から充分に鑑賞することが出来るだけの豊かな餘裕をもつてゐた。ところが、蓮華王院本堂の方は、この建築に個々の鑑賞上の觀點が全然なくなつてしまつてゐる上に、火災其他の危険にもさらされてゐるのを残念に思つた。

蓮華王院本堂のやうに特殊な形態の美しさをもつ建物は何處にもない。それほど貴重な遺構であるに拘らず、當事者は唯だこの建物に「三十三間堂」の俗稱的價値しか認めず、千體佛に幼稚な好奇心を満足させる遊覽客相手の建造物としてしか扱つてゐないやうである。遊覽バスから流れ出る修學旅行の生徒達に圍まれて建つこの堂

は、私の心を非常に憂鬱にした。

甚だ奇怪なことであるが、世に二つとないこの本堂の美しさを何うしても観ることが出来ないやうにするために、當事者は最も適当な方法を講じてゐるやうである。極めて大膽な形態をもち、高さが低く横に細長い建物でありながら、軒の効果を實に美しくみせてゐるこの建物の性質から云ふと、周囲を廣く空けて、あらゆる観點から遠く望み近く仰ぐやうに境内を整理しなければならない筈である。然るに此處の境内は、正面から本堂の効果を仰ぐに適した丁度その位置に、お上りさん相手の茶店が間近く建ち、裏面から軒の長く連なる美しさを透視しようとする、程良い角度をもつ位置に寶物事務所が邪魔をしてゐる。雑草の繁つた裏庭は柵をして入れないやうになつてゐるし、表側は樹木で視野がさへぎられてゐると云ふ具合である。

私は、本堂の周囲を一巡して思はず苦笑したが、假りに若し、何等かの法規があつて境内の整備が出来るとしたら、こゝほど経費がかゝらず而かも簡単に効果のあがる整備事業は他にあるまい。境内から目障りで危険な建物を取りはらひ、高さの低い樹木を適當に配置することが、最も完全で的確な處置だからである。

この簡単な處置をとる機能は、文部省宗教局の保存課にはない。内務省の都市計畫委員會なら出来るが、當面の仕事に追はれて「藝術」の範圍に關係する餘裕などはない。簡単な法規さへ設ければ何の面倒もないことだがそれが出来ずにゐる。要するに未だその必要を感じてゐないからである。だが恐らく、必要を感じるときは既に手おくれとなつてゐるであらう。

支那事變と寫眞 (昭和十五年)

一

今回の事變を通じて、寫眞の世界を總括的に考へてみると、非常に複雑な現象が窺はれるばかりでなく、寫眞發達の歴史に織り込んで、一つの大きな「時代」を劃してゐることに氣が付く。又今後の寫眞國策を企圖する上からも、重要な資料を多く散見する。従つて「事變と寫眞」と云ふ一つの主題を取り上げて、あらゆる角度から考察して置くことは、現代日本の寫眞界にとつて、是非とも必要であらう。

かゝる意味から此處に極く簡単な瞥見を試み、日本寫眞界の具體的な現狀に即して、種々の問題を指摘してみたいと考へる。それ等の諸問題が、實は一つ宛、詳細な觀察と、徹底した審議とを経て、はじめて本稿の主題を満たすものであることは云ふまでもない。

二

事變現地を主題とする藝術は、文藝と、映畫と、繪畫と、眞眞との四種である。このうち、繪畫は藝術の性質が不適当なため今のところ成功してゐないが、文藝と映畫と寫眞とは、各々その特徴を發揮して、興味深い効果

をそれぞれ示してゐる。將來、日本の藝術史を回顧するとき、今度の事變がこれ等諸藝術の歴史に、一つの新しい「時代」を劃してゐるのをみるであらう。

断るまでもなく、映畫には事變關係の「際物」を多少散見するから、さう云ふ點では或程度までの弊害を認める。然し、積極的な側面に於いては、新しい主題を求め、新しい形式を創り、新しい効果をもつ作品を相當に多く完成してゐるのである。最近の「土と兵隊」のごとき、文藝と映畫との協力になる優秀な作品と云へよう。けれども寫眞は、もつぱら報道寫眞の方向にのみ純粹に發展してゐるから、その點では文藝や映畫と異るところが少くない。

三

現地の報道を扱つてゐる寫眞關係の仕事は、云ふまでもなく、新聞社寫眞班の任務であるから、その事業範圍内に殆ど總括されてゐるわけである。國內に發表する一般の形式には種々あるが、日刊新聞の寫眞、グラフ雜誌、印畫紙による寫眞展、の三種に代表されて良からう。このうち寫眞展としては、陸軍省の報道機關が主催し、各新聞社の參加した展覽會が最も整つてゐるが、此處には、なほ開拓を必要とする餘地が多く残されてゐる。またグラフ雜誌では、朝日新聞社出版局の支那事變畫報が良くまとまつてゐるし、殉職寫眞家の作品集「カメラの戦士」なども特筆に價する。然し、日刊新聞の寫眞では、或る期間に於ける讀賣新聞社の活動が最も興味深かつた。これ等各種の報道寫眞は、今回の事變だけに視野を限ると、その發達程度が良く解らないが、日清、日露、兩

役時代のものと比較して考へると、その相異の著しさが目に付く。なほ、第一次世界戦争關係の報道寫眞には、「戦争」の實感を痛切に感じさせるものも多いが、これ等の寫眞を今回の歐洲動亂報道寫眞と比較する機會が來れば、また別種な面白さがあらう。

四

事變現地と表裏の關係にある、「銃後」の有様を報道する寫眞事業は、現在のところ充分に發達してゐない。この方面に關するカメラの活動を、出來榮を別として現状のまま、大別するとすれば、内閣情報部の「寫眞週報」のごときものと、若干の時局風物寫眞展と、國産の文化映畫とである。このうち文化映畫のごときは、物資、生産、經營、生活、等々の目標に基き、様々の主題を扱つてゐるが、その中にはむしろ、普通寫眞を的確に利用して好結果を收め得るものが少くない。全體として、この方面のカメラ事業は、根本的な企畫審議を必要とするやうに思はれる。

然し、識者の全般的稱讚を受けながら登場した寫眞帖「會地村」のごときは、この貧困状態に惠まれた強力な暗示と云へるであらう。

五

海軍省軍事普及部は、海事思想普及の目的から、アサヒカメラと協同して、寫眞作品の懸賞募集を企劃し、寫

眞展覽會を催した。海軍記念日に因む一つの試みであるが、或程度まで、事變と聯關するカメラ事業と云へるであらう。

三二〇

尤も日本では軍艦の撮影が著しく制限されてゐるから、一般の國民にとつて最も魅力のある主題を扱ふことは困難であるが、官廳關係の仕事として、新しい境地を開拓した點は注目し得る。

然し、アマチュア寫真本來の性質から云ふと、例へば地方青年學校の諸相を効果的な作品にまとめ、國民精神總動員の機運に働きかける——と云ふやうな奨励事業が、當局によつて積極的に企畫されて良きさうに思はれる。

六

滿鐵の弘報課では各種の宣傳映畫と共にグラフ雜誌として、「滿洲グラフ」を刊行してゐたが、更に、「北支畫刊」を現地編輯で發行し、現在では第一書房發行の「北支」として普及に努めてゐる。かかる企畫は、東亞關係の普及事業が伸展する場合、當然實施さるべき性質のものであり、日本の寫真界全般に向つて、積極的に働きかけるべき課題ある。

既に十三年、大阪朝日計畫部は關西學生寫真聯盟のメンバーを暑中休暇の機會に滿洲に送り、寫真帖「新滿洲」のごとき意義ある收獲を得た。この種の企畫は、餘程注意深く扱はないと、反つて弊害を伴ふ恐れがあるが、指導の方法さへ的確であれば、現在の事情として、充分に良好な効果を期待することが出来るであらう。

七

事變下の日本が戦はなければならぬもの一つとして、外國で發行されてゐる寫真應用の排日宣傳雜誌がある。一般に寫真技術の著しく進歩してゐる現在では、何んな寫真でも、排日宣傳の手段に逆用することが出来るから、その應用法には端倪すべからざるものがある。一枚の都會風景の如きも、これを悪用しやうとすれば、何うにでもなるわけだから、まして、外國の寫真ジャーナリズムのため、現地の撮影に従事する報道寫真は注意を必要とする。

けれども、この場合に處する積極的な對策としては、大藏省の税關檢閲で無暗に沒收するやうなことをせず、對外事業關係者や寫真家に實狀を示して、むしろ反省を促すやうにすべきものである。それと同時に、新興日本の明朗な姿を、優秀な寫真によつて表現し、強力な宣傳としなければならぬ筈である。現在の世界各國が行つてゐる宣傳事業の中では、ドイツだけが、著しく巧妙に寫真を利用してゐる。ドイツでは展覽會の場合にも寫真を効果的に使つてゐるが、特に傑出してゐるのは寫真帖である。昔からドイツは所謂「文化映畫」に發達してゐる國で、この點では今も變りないが、寫真帖の利用法は映畫よりも更に巧妙である。

斷るまでもなく、各種の宣傳用寫真帖は、對內的に使はれる場合の方が多いが、現在の日本の如く、第三國の排日宣傳に對する必要のある國では、この方面にも「カメラの戦士」を強力に動員し、當局の的確な企劃を希望しなければならぬ。

三二一

なほ、アメリカ発行の寫眞雜誌としては、「ライア」など支那事變を色々な角度から扱つてゐる。これも興味深い一つの示例と云へる。

八

アメリカに開催されてゐる萬國博覽會には、寫眞を利用した壁面裝飾が著しく多く、前回のパリ博に比べて、非常な量に昇つてゐる。然し、壁面寫眞の形式や技術に關する諸問題を別として、「事變下の日本」と云ふものを豫想する限り、内容や材料の選定法には、遙かに深い考慮がはらわれて然るべきであつたらう。國際文化振興會の關係してゐる企畫の如き、主題の扱ひ方に積極性を求めやうとしながら、材料の選定と、表現の形式とに遺憾な點が少くなかつた。まして、國際觀光協會の關與してゐる富士山など、あれだけの巨大な面積を使ふなら、科學文化の發達した國進日本に主題を求め、新鮮明朗な大壁畫を完成すべきであつたらう。

かう云ふ萬博關係の壁面裝飾にも、事變下の排日宣傳と對抗する用意があつて然るべきである。

その他、振興會では、現地の宣撫班用に寫眞移動展も企劃してゐたが、此處にも新しい問題はあらう。

九

輸入制限、物資統制の強化されつゝある現在では、寫眞材料の全般にわたつて、アマチュアの受ける不便は忍ばなければなるまい。然し、この機會に國産品の利用率を考慮してみることも、決して無益ではなからう。殊に

實力を無視して、唯だ使用する機械の贅澤さを誇る——と云つたやうな缺陷は、事變下の制約によつて、或程度まで清算されるであらう。

尤も、かう云ふ問題は常に相關的な事情にあるから、寫眞材料の製作會社そのものもまた、この機會に、製品の質的向上に努むべきである。徒に利益計算のみを目標とするやうでは、むしろ國策に反するわけであらう。

一〇

事變下の寫眞國策として是非とも必要でありながら、未だ手がけてゐないことは澤山ある。然し、その中でも重要にして興味深い課題の一つは、國民の自覺を促す教化用の大掛りな寫眞展である。徒に抽象的な觀念論を亂費するのではなく、明朗快適な内容と形式とを持つ、壁面寫眞を使った移動展を構成し、日本國內の各地に公開することによつて、廣く國民の心に働きかける企畫こそは、「事變と寫眞」と云ふテーマの下に考へ得る限りの、最も光彩ある事業であらう。

文化映畫界の時事所感 (昭和十六年)

一

かつて私は、ドイツ大使館に来てゐたトビスの週報をまとめてみたことがある。西部攻略の部分を二十幾巻か二度に分けて映してもらつたのであるが、先頃公開された「勝利の歴史」をみると、材料が或る程度まで同じで形式が全く異つてゐるところに、云はば相対的な面白味を感じた。二十幾巻のニュースは、「週報」とは云ふものの主題はむしろアナウンスの宣傳文である。型の如く掛け合ひ万歳がはじめにあり、文化層の極く低い大衆を啓蒙する役をすませてひつこむと、そのあとに週報のタイトルが現はれニュースが映るのだが、畫面はむしろ挿繪のやうな役割をもち、アナウンスの言葉が盛んに觀衆を激勵してゐる。そこで折り／＼は、この激勵を裝飾するだけの目的で挿入された畫面を見受けるのである。尤も餘興としては、英兵の捕虜達に前大戦の流行歌を謡はせて觀衆に溜飲をさげさせるところなどもあるが、象徴的な長距離砲を一門づつ仰向けさせ、それに伴つて「祖國は今や……」云ふ叫びをきかせるやうな部分もある——と云つた具合であつた。

ところが「勝利の歴史」をみると、さういふ單純な宣傳形式は全くなり、詳細に考慮された啓發上の企劃が窺はれるのである。中に出て來る材料を分解してみると特に驚くやうなものは少ないし、演習を使つたやうに

推察される箇所もあるほどだが、全體としての編輯形式が極めて的確であるため、觀る者に與へる總體的な効果は非常に強い。それでゐて、何處にも特別に強調された部分はない。もつと力を入れるだらうと思はれるやうな要點すら、まことにアツサリと片付け、淡々とした態度で通り過ぎてゐるのである。

然し、かう云ふ種類の映畫は、多くの場合に觀衆の主觀を或程度まで豫想し、觀衆の主觀で補ひながら感銘を醸し出すものである。さう云ふ作品は、一度みると感心するが繰り返してみると少しも面白くなくなる。それ故私は「勝利の歴史」を念のため二度みたのであるが、この作品の迫力に變りはなかつた。そののみならず、編輯形式の手際を更めて感じたほどである。従つて、この作品は、一貫した主旨の下に戦争記録をまとめる者にとつて、一つの有益な參考資料だと云へる。そして特にこの點は日本の映畫作者にとつて甚だ教訓的なのである。

日本名で「勝利の歴史」と呼ばれたこの作品は、原名は「西部の勝利」である。ドイツはこれに先立つて「東部の勝利」を製作し日本では「ポーランド進撃」と名付けて公開した。今後のドイツは、バルカンからクレタ島にかけての戦果を、「南部の勝利」としてまとめるかも知れない。それだけの材料は充分あるに相違ないし、中にはアテネの無血入城なども含まれてゐるから、立派な迫力をもつ作品になるであらう。けれども、かう云ふ作品が假りに出來たとして、それを日本に公開する場合であるが、私としては、これに就いて一つの希望をもつてゐる。これ等の勝利を可能ならしめてゐる平常の準備が、短篇文化映畫として日本に入つてゐるから、これを同時に上映して觀衆の認識を深めさせる——と云ふことが大切なのである。例へば、ドイツ山岳部隊の訓練を扱つた映畫のごときこれである。かう云ふ文化映畫を同時に併用すれば、「準備」と「戦果」とを映畫的に照應して反省

することが出来るであらうから、日本國民にとつては、單なるニュース的な興味に止らず、一種の教訓を受けることになるであらうと思はれる。

二

近頃ドイツから十二本輸入された短篇文化映畫を、まとめて観たことがある。日本語版の監輯者に就いて相談をうけてゐたので、數人の専門關係者と共にオリヂナル・プリントを觀たのである。このうちの大部分は既に公開されたやうであるし、他の諸作も漸次に公開される豫定だときくが、私は未だ一本も日本語になつたのを觀てゐない。従つて此處では、原型をみたときの印象によるわけであるが、その限りでは非常に優れてゐるやうに思はれた。この一群の作品は、ドイツ文化映畫の傳統に歸つて、何れも堅實であり的確であつた。大體の性質で分類するとすれば、第一は通俗科學の實驗的興味を扱つたものであり、第二は生物の生態を撮したものであり、第三は科學的な施設に關するものである。つまり、全體として、健全な科學的知識の普及に役立つ文化映畫なのである。

第一類の通俗科學的實驗を扱つた作品は下の四篇である。即ち、低溫に關する通俗的な理論を解説し種々の實驗を試みたもの、溫度の上昇により生ずる空氣の粗密の現象を眼にみえるやうにしたもの、動物の生理現象や骨格の運動をレントヒエン撮影にしたもの、植物の感覺的反應を擴大してみせたもの、がこれである。このうち「低溫」と云ふ名で既に公開された作品は、各種の實驗を扱つた從來の文化映畫に對し、著しい進歩を示す試み

であつた。元來から云ふと、非常に低い溫度の實驗などと云ふものは「眼」や「耳」に面白く感じられる要素の少ない性質をもつのであるから、餘程巧妙に取扱はないと、徒らに觀衆を倦怠させる結果を招きやすいが、この映畫は、さう云ふ難點を手際よく避けて、誰がみても興味を誘はれるやうな優秀作にまとめられてゐる。鉛だの水銀だのゴムなどを取り出して、溫度によつて質が變る有様を、觀衆の眼と耳による具象的な興味に訴へながら、甚だ明快に説明してゐるのである。

第二類の生物を扱つた作品は「蜂の集團生活」や「とんぼ」の生育現象を示した純粹の生態描寫ばかりでなく「北海の渡り鳥」や「あざらしの國」のやうに、被寫體の扱ひかたに特殊な趣向を凝らしたもので、「生命の神秘」のやうに顯微鏡的觀察を撮したのものもある。このうち、例へば、「蜂」のごとき、何でもないやうなものながら、明快な印象を與へる撮影法を注意してゐるし、「渡り鳥」のごときも、カメラの移動によつて濱に餌をあさる海鳥の運動を實感的に良く表示してゐる。云はば、何でもないやうで而かも微妙なところに、カメラの感覺を活かし畫面効果を考慮してゐるのである。

第三類の科學的施設に關する作品は、ドイツ國內に複雑な使命を帯びて建設された新國道を主題にするもの、航空の安全を保證する無電の地上連絡を扱つたもの、製鋼事業の力強い發達を性格描寫にとつたもの、がこれである。このうち新國道の映畫は、同じ國道計畫を各種の側面から分けて扱つた他の數本の作品と共に、併せて觀るべき作品である。かう云ふ場合に日本の文化映畫企劃者は、僅か一本の短篇の中に何でも押し込み、結局のところ何等の感銘をも残さない稀薄なものにまとめ上げやすいのであるが、ドイツでは、一本ごとにテーマを的確に

限定し、決して無理なことをしてゐない。また、マンネスマン製鋼業を扱つた映畫は、なだらかに流れる音楽的な美しさと畫面效果の視覚的な美しさを巧みに組み合せた試みであるが、この作品の持つ獨特の新鮮さは、むしろ、立體圖解の優秀な利用法にある。中でも、建築内部の附帯施設として鋼管が使はれてゐる有様を示した部分は、明快な立體圖解と實寫のクローズ・アップとを見事に結び合はせ、非常に美しい効果を収めてゐるのである。

以上に略記したやうなわけで、この十二本の文化映畫は、今後の日本映畫が大いに學ぶべき長所を豊かにもつものと云へる。

三

日本の中央官廳として大昔から所謂「文化映畫」なるものを試作してゐたのは文部省であるが、元來から云ふと、皇室關係の映畫や式典の有様を撮した記録など教育用映畫の製作が本省の重なる業務だつたのである。然るに今年發表した「二條城」は、一個の「作品」として立派に鑑賞するに値するばかりでなく、主題を明確に描出し得た優秀作であり、官廳映畫としての格式を具へた劃期的作品であつた。これに先立つ「室生寺」が單なる試作以上に出なかつたのと大變な相異である。従來は困難と考へられてゐたこの種の映畫企劃も、始めて將來が約束されたのである。

鐵道省運輸局關係の文化映畫は、本省内部で直接に立案し各種の會社に委託製作させるものと、各映畫會社が鐵道省の後援によつて自發的に製作するものと、二種類を區別するのであるが、この區別はまた、文化映畫としての性質を區別する結果になつてゐる。

本省の立案による運輸業務の文化映畫は、年度別のシリーズ形式をとるもので、第一回の企劃では「乗車券」「鐵道信號」「荷物列車」「鐵道防雪陣」の四種があり、第二回の企劃も既に大體きまつてゐるのである。このうち、「鐵道信號」一本は色々の問題を提出してゐるのである。即ち、先づこの映畫は、元來から云ふと非常に映畫化しにくいテーマを敢て選んだもので、その上に三巻と云ふ長さをもつのである。鐵道省では、各作品の製作にあつて豫じめ充分な審議を行ひ、省外の専門家の意見を聴くと云ふ制度をとつてゐる。この堅實な制度を實施してゐるのは、中央官廳の中で鐵道省だけであるから、その企劃態度は大いに稱讚に價するのである。然し出來榮からみると、餘りに良心的であり映畫としての整理が足りず、不必要なディテールが残り、文化映畫作品として平面的な稀薄さを感じさせる結果に陥りやすいのである。加ふるに、直接製作を擔當する會社の技術家は、知的興味に溺れて全體的効果を忘れ、觀衆の心理を無視することになりやすいのである。さう云ふ點でこの「鐵道信號」は甚だ代表的であるが、それだけにまた圖解の扱ひかたなど、さすがに注意した跡が窺はれるのである。従つて、今後の問題としては、運輸業務の中から映畫に適した材料を選ぶことと、知識に溺れず文化映畫の特質を活かすことと、その二點を注意すべきである。さうすれば、企劃そのものは堅實なのであるから、優秀な成績を擧げるのは決して困難でない。

鐵道省後援の形式を以つて運輸業務を扱つた各會社の映畫は概して成績が良好である。即ち、藝術映畫社の

「機関車〇五七」十字屋の「鐵道保線區」松竹の「列車」等がこれである。このうち、舊作にぞくするGESの作品は別として、「鐵道保線區」のごとき、官廳業務映畫として、これまでの日本で製作された最も優秀な作例である。また「列車」も、面倒な列車ダイヤを主題に選びながら、如何にもデッサンのしつかりした作品にまよつてゐる。扱ひにくいテーマを映畫的に良くこなしてゐる點で、立派な成績を収めた佳作と云ふべきであらう。普通に考へると、鐵道省の運輸業務は「動いてゐる」から、容易に映畫化しやすいやうにみえるらしいが、實際は決してさうでない。業務の組織が非常に込み入つてゐるから、その組織の複雑さを解り易く知らせる技術が想像以上にむつかしいのである。

四

「ムツソリニア」と云ふイタリア映畫が日本語版になつた。元來イタリアは、文化映畫に餘り優れた才能を持ち合せてゐないらしく、私がこの數年間にみた十數本の作品にも、感心したものは甚だ少なかつた。然し長尺物として、エチオピア攻略の準備工策を扱つた映畫（日本語名「大進軍」）などは、畫面の汚ない點を除けば非常に好感をもつてみられる作品であつたのである。今回の「ムツソリニア」は、地方の開拓事業を扱つた作品であるから、少くとも主題の上で注目に價する作品と云へやう。

映畫「ムツソリニア」の扱つてゐる材料は、地中海の島サルディニアの、不健康な濕地と砂原との不毛の地域を、完全な耕地として開拓し、移住者の都會を建設する有様を示した映畫である。強力なポンプで熱病の多い濕

地を乾し、砂地に水路を開いて必要な水を供給する——と云ふ機械設備をはじめ、各種の開拓作業と快活な勞務生活とが描き出されてゐる。然し、この映畫をみる觀衆のうち心ある者は、恐らく一つの大きな疑問を感じることであらう。即ち、イタリア全土からみれば海中の僻地であるサルディニアの一部分に、これだけの資金を投入して何れだけ國力が増すであらうか？——と云ふ疑問である。かう云ふ疑問を起させるのは、この映畫の日本語版が徒らに過剰な美辭麗句を連ねて、「ムツソリニア」の本質的な意義を少しも説明してゐないからである。

私もまた、この映畫をみたとき上記の疑問を感じた。それで家に歸つてから、一九三八年に出版された新興イタリアの建設事業史を調べてみると、書物にして僅か一頁の中に、この「ムツソリニア」の本質の意味が良く記述されてゐるのを見出したのである。この書物の説明によると、「この狭少な僻地は、要するに建設事業の僅かな一頁にすぎないし、多數の中の一例に他ならない」と斷つてある。従つて、この開拓事業をこれだけの映畫にまとめたのは、この僻地が新興イタリアの建設事業に一種の象徴的意義をもつからであつて、決して投資と収益との計畫ではないのである。さう云ふ意味は、イタリアでこの映畫を上映する場合には、適當な啓發工策によつて充分に徹底してゐるのであらうが、單にこの作品一本を切り離して日本で上映する場合には、日本語版の作者が上記の點を良く注意し、日本の心ある觀衆に疑念を起させないやう留意すべきであらう。ソ聯の建設映畫が日本の青年達を感激させてゐた遠い過去の時代と現代とは、一切の事情が全く變つてゐるのである。

五

理研科學映畫の新作では「綱を割る娘たち」と「谷川岳」と「島」とが良く出来てゐた。「島」は四巻にまとめられた島民生活のクローズアップであるが、「アラン」に就いて考へられた長所と缺點とを此處に再び見出したのは興味深いことである。「綱を割る娘たち」は暗くなりさうな主題を巧みに明るく扱つてゐたし、「谷川岳」は各種の山岳關係の映畫中で新しい企劃を相當に手際よくこなしてゐた。何れも面白い問題を含む作品である。

最近の映畫でなほ良く出来てゐたのは、十字屋の「日本の椎茸」と都映畫の「子供の寄宿舎」と二本ぐらいであつたらう。兩方とも甚だ素直なまとめかたで、觀てゐて氣持良く好感を寄せるに足る佳作であつた。この程度に淡々として而かもこの程度にまとめた印象を與へる作品は、一年の製作本數中に僅かしかないやうである。大部分の作品は、感じが散漫で影のやうに稀薄で而かも非常に退屈な印象を残すか、さもなければ、安價な着想を無節制に弄びすぎて不快な灰汁を感じさせ、不必要な挿雜物を多く混入してゐるかするのである。其他では科學的であるべき主題を非科學的な態度で扱つた甘いものや、始めから映畫にならないテーマを無理にまとめた泥臭いものである。かう云ふ映畫を澤山に續けてみると、質の良いくない學生達のレポートをたてつけに讀むときのやうな、やるせない憂鬱を感じる。その間にまちつて、素直な描寫の淡々とまとめたものに出會ふと、文字通り「救はれた」氣がするのである。上記の「日本の椎茸」や「子供の寄宿舎」は、さう云ふ意味で歡迎に價する佳作なのである。

富士スタジオで製作した四巻物の「石川啄木」は、面白い試みでありながら惜しいところで失敗した作品である。正確に云へば、この作品は、「啄木の故郷」と題すべき映畫である。寂びれ切つた澁民村や啄木の父が住職をしてゐると云ふ荒廢した村寺が、畫面效果の美しい「寫眞藝術」のごとく現はれる。それから「故郷の山に向ひて云ふことなし、故郷の山は有難きかな」と云ふ啄木の優れた和歌をタイトルとして、岩手山の美しい姿が現はれる。かう云ふ部分は甚だ良いのであるが、例へば「病ひのごと思郷のこころ湧く日なり、眼に青空の煙かなしも」と云ふ優秀な和歌を、洋樂風に節付けて調子の高い女聲で謡ふやうな惡趣味さも混入してゐるのである。映畫の中では、どんな和歌でも決して朗詠してはならないが、まして、洋樂風に謡ふなど言語道斷である。原作の味を傷けず觀衆の氣持を傷けないためには、引用の和歌は素直な書態でタイトルに描くべきものである。さう云ふ點を注意すれば「石川啄木」は良い文化映畫になつたであらう。惜しいことである。

不必要な灰汁を多分に含む惡例は、大阪市企劃の「水の旅」松竹の「日本の水河」興亞文化の「そうめん」等である。水河の映畫に登山姿の娘達がうろつくのは全く邪魔である。「そうめん」の製法をみせる前後に佻しい炊事や花火の見物が現はれると、映畫全體が泥臭くなつて觀衆の食慾は著しく減退する。同じやうなことは、汚水の淨化施設を扱つた大阪市の映畫にも窺はれるが、一般問題として、かう云ふ形式による「通俗化」は文化映畫本來の精神に反することを熟知し置くべきであらう。

六

外國に向けて日本を紹介する輸出映畫は、現下の世界情勢に影響されて著しく減少してゐる。加ふるに、從來の所謂「輸出映畫」が亂作された時代に比して、現在が改善されてゐるか否かは疑問である。然しその中にも、

極く小数の注目すべき作品を拾ふことは可能である。

少し前に製作された松竹の「産業都市東京」は、宣傳映畫としては相當に手際の良いものであつた。これまで製作された同類の作品中では、恐らく最も良くまとまつたものであつたらう。然しこれは「文化映畫」の中に入るべき性質のものではない。

鐵道省の國際觀光局は、「日本の女性」と「富士山」とを最近完成させた。このうち「日本の女性」は、端倪すべからざる怪異な原案に比べると著しく穩當になり、云はば「日本娘づくし」のやうな形になつてゐる。かつて報道寫眞協會で刊行した寫眞帳「日本娘」を通俗な趣味で映畫化したやうなもので、此處に取りたてて云ふほどの作品ではない。然し、もう一本の「富士山」は、數年前に企劃して審議し、實行に移したものが今になつて完成したのである。この作品は、從來のフジマヤ趣味から離脱して、富士山をその周圍ごと大きいスケールで扱ふとした試みであり、さう云ふ點で注目に價する輸出映畫なのである。富士とその周圍とを四季の變化にそつて撮影したものであるから、當事者の苦心は相當なものであつたらうし、その勞を認めることは出来るのであるが成績からみると、若干の部分に美しい情調と畫面効果を散見すると云ふ程度で、全體のまともりは輸出向映畫として適當でなかつた。けれども、假りに若し、この映畫を日本内地用の文化映畫に改輯し、富士を中心とする全スケールを圖解によつて最初に説明し、伴奏を除いて適當なアナウンスに變へ、不必要な部分をカットするとすれば、相當に優れたものが出來上りさうに想像する。だが、これを輸出向に徹底させるなら、いつそのこと思ひ切つて整理し、美しい一巻の寫眞帳の如くまとめるのが適當であらうと考へる。秋の葉が梢をはなれて富士の

肌が増すあたりや、湖の氷を割つて老人が漁網を引くところなど、忘れ難い美しさを部分的にみせてゐるからである。

海軍記念日と啓發工作 (昭和十七年)

海軍省の企劃する啓發宣傳の方策には、折り折り注目すべき試みが窺はれたが、今回の海軍記念日を機として目論まれたものを総合的に考察すると、一貫した主旨が極めて的確に盛り込まれてゐるのを見るのである。この種の國策的な仕事として良好な成績を示してゐるだけに、興味ある問題を多く含むから、それ等の點につき此處に概略を記して置く。

今年の企劃には、積極的な意圖を明確に分擔してゐた試みが四つ含まれてゐた。其一は、潜水艦に就いて國民の認識を深めることを目的とする展覽會であり、其二は、これと同じ主旨を盛り込んだ劇映畫である。また其三は、米國の海軍力を説明した展示であり、其四は、海洋に對する一般の關心を養ふ寫眞展覽會である。

潜水艦——と云ふ一つの艦種を殊更に取り出して、一般社會の注意を喚起し認識を深めさせる當面の必要は次の三點にある。即ち、現代の海上攻防技術として潜水艦に課せられてゐる示命が著しく重いこと、潜水艦の發達は平常の勤務に於ける殉職者の貴い屍を越へて現在の狀態に到達して來たこと、海軍省の根本方針として地味で勞多く而かも重要な任務を理解させるところに啓發の目標を求めてゐること、——この三つの點がこれである。かゝる意圖としては、先づ潜水艦そのものに關する一般的認識を深める必要があるが、日本橋白木屋に開かれ

た東京日日新聞社主催海軍省後援の展覽會はこの目的に沿ふものである。十七世紀より二十世紀の初頭に到る潜水艦の發達を、説明と圖解と寫眞とによつて示しながら、如何に多くの犠牲が要求されたかを具體的に理解させてゐる。そして、その數多い犠牲の中で帝國軍人の本來の精神を象徴し、現在の日本海軍にみる潜水艦の發達を誘致した力として、六號艇神社と佐久間艇長の遺書とが加はる。そのほか、この展覽會には、列國の潜水艦の現狀が寫眞と圖表とで展示され、日本の潜水艦任務のクローズアップが組合せ寫眞となり、映畫「潜水艦1號」のスタイルが並べてある。

あの展覽會の主旨を興行用の劇映畫にまとめたのが日活製作海軍省後援の「潜水艦1號」であるが、最後に出て來る實寫の部分には、海軍省として劃期的な力の入れかたを示してゐる。全體としてこの劇映畫は、海軍省の企劃そのものに關する限り、極めて堅實であり的確であつた。若しこの映畫が、演出と演技との點で著しい難點をもたなかつたら、非常に優れたものとなつたことであらう。

米國海軍の現狀を認識させる展覽會は銀座松屋で開催され、同盟通信社主催海軍省後援である。全體として、會場の壁面割付けや圖解が簡明で手際よく、一目瞭然、良く主旨をつくし得てゐた。第一次世界大戰後のワシントン軍縮會議から將來の建艦計畫までを含み、太平洋、大西洋の攻防方策から日本との關係までを展示してあつた。

なほ、私が特に注目したのは、白木屋と松屋とも二つながら會場は百貨店であるに拘らず、これらの展覽會は決して百貨店大衆を目標とせず、むしろ、高級な知識階級を標準とした形式を採つたことである。かう云ふ企劃

は展覽會として是非とも必要であつたに拘らず、これまでは殆ど實現されなかつたもので、遙か以前から私の主張して來たことだけに、この點を私としては、特に悦しく感じた。

五月二十七日から銀座松屋で開かれた海洋寫眞展は、アサヒカメラと海軍協會との主催で海軍省後援になり、海洋美術展と對應する企劃である。この企劃がはじめて實施された頃は主旨が徹底せず、餘り良好な成績を示さなかつたのであるが、今年の會場をみると、全體としてのまとまりが良くなつてゐる。即ち、東亞共榮圏の各地域を簡單な風物繪葉書風にまとめた寫眞のシリーズを樞として、その中に、海國日本のクローズアップを組寫眞と個別寫眞とに分類し陳列してある。私としては今回の審査の結果に異論をもつが、それは別問題として、全體の成績からみると従來に比べて著しく向上して來たことは確かである。船の甲板を洗ふ波を寫したものなどに相當優れたものが出来ただけでも良い。この分でゆけば、導き方次第では今後の進歩も希望し得る。第一回展の「甘さ」と「弱さ」がスツカリなくなつて、活々とした「力強さ」を今回の展覽會にみることは、この企劃の前途のため大いに慶賀すべきところである。

以上のごとく、今回の海軍記念日を機として企劃された三種の展覽會は、総合的にみるときその的確さを理解するのであるが、今後とも、かう云ふ性質の啓發工作は大いに試みらるべきであらう。ただ残されてゐる問題は短篇文化映畫の扱ひかたである。従つて今後の問題としては、この方面にも総合的な企劃に立脚する堅實な進歩が望ましい。然し、前記の三種の展覽會には、かう云ふ普及事業に一新時代を劃した成績をみるのである。かつて長篇文化映畫「海の生命線」や「北進日本」が持つたと同様な意義を、此處にも認め得るのである。

大東亞戰爭初頭の啓發展覽會 (昭和十八年)

大東亞戰爭の全面的展開を機として、廣く國民に現代日本の歴史的使命を理解させ、この大戦の嚴肅な重大性を反省させ、東亞諸地方の事情を認得させるため、各種の啓發工作が當局によつて企劃されてゐる。その中で、普通寫眞を利用して展示する試みは、東京市内の百貨店を會場として開催された大東亞展覽會である。主催は情報局と陸海軍とでこれを各種の新聞社と通信機關とが後援してゐる。従來かつてみざる大掛りなものであるが、各百貨店の分擔は次の如くなつてゐる。

三	越 (日本橋)	ハワイ、グアム、ウエーキ。
	白木屋 (日本橋)	マライ、ビルマ。
	高島屋 (日本橋)	蘭印、濠洲、ボルネオ。
	松屋 (銀座)	フィリッピン。
	松坂屋 (上野)	香港。
	伊勢丹 (新宿)	佛印、泰。
東	横 (澁谷)	總説。

このうち東横は別問題であるが、他の百貨店は何れも東亞共榮圏の各地域を分擔してゐるので、地域の異なるに従つて展示の形式も異なる筈である。然しそれ以上に、各百貨店の事情や企劃による出來榮の相異があり、展示形式の優劣を比較してゐる場合には、見方によつて一種のコンクールとも考へられ、仲々に興味深いのである。

三越は一階ホールと四階の一部とを使つてゐる。ホールはハワイ爆撃の記念的な報道寫眞を中心に各地の戰果を展示し、四階には概論的に各種の大東亞戰爭に因む問題を扱ひ、圖解と寫眞とを適宜に組合せてある。兩會場ともパイプ・オルガンの演奏が聞える關係上、他の百貨店にない一つの特徴があるし、圖解の扱ひかたも相當であるが、全體としての採點は先づ「乙」の程度である。

自木屋は、展示に適した空間をもたず、二階の衣服部の一隅に狹苦しくまとめ、會場は混雜してゐる上に、陳列の手際も餘り良くない。採點は「丙」と云ふところである。

高島屋は、八階のホールを使つてゐるのであるが、展示の形式が餘り通俗趣味に偏り、且つ灰汁があつていけない。同じく「丙」である。

松屋は、七階ホールを相當に良くこなし寫眞の扱ひかたも或程度まで調つてゐる。フィリッピン群島の模型を大きく作つて周りからみるやうになつてゐるが、周囲の柵が粗く仕上げであるので、混雜する群衆は衣類を曲裂きする恐れがある。さう云ふことの注意が足りない。採點は「乙」である。

松坂屋は、六階ホールを簡明に區劃し、手際よくまとめである。會場の平面设计としては各百貨店を通じて最も良く、主題の扱ひかたも明快である。殊に、香港攻略日記の展示は優れてゐる。採點は當に「甲」である。

伊勢丹は、七階ホールを複雑に區劃してゐるので、觀覽者の整理には多少の難點があるが、陳列内容が豊富であり、觀衆に良く解るやうにまとめつてゐる。採點は同じく「甲」である。

以上の採點は「比較的」と云ふ相對的なものだが、これによると、一番成績の良いのが伊勢丹と松坂屋で、中位にあるのが三越と松屋となり、出來の悪いのが自木屋と高島屋である。

百貨店を會場とする啓發用の展示は、觀衆の教養程度が雜多であるから、相當に高級な形式をとる部分と、思ひ切つて通俗的な趣向を使ふ部分とが一つの會場内に混用される結果となるが、これは止むを得ないであらう。

これまで百貨店を利用した軍事關係の啓發展覽會の中で、特に良くまとめつてゐたのは、支那事變初期に陸軍の報道機關が民間の報道機關と協力して開いた寫眞だけの展覽會二種と、最近の海軍記念日に因み海軍省が綜合企劃の中に加へて潜水艦と米國海軍現勢とを扱つた二種の解説的展示とであつた。然し、今回の大東亞戰爭展は總括的で大掛りな點で當に劃期的であるばかりでなく、廣く一般國民の注意を喚起し、堅實な啓發効果を得たことに於て特筆に價する試みであつた。従つて、各百貨店の分擔を個別的にみれば、其處に自づから出來榮の優劣が區別されるが、この企劃を全體として見れば、各百貨店は何れも個有的役割を満たして、總體として國民を啓發する効果を擧げてゐることになる。

なほ、今回の展覽會は、圖解、模型、説明書等の間に豊かに寫眞を組み込み、寫眞の持つ展覽効果を相當な適

確さに於て、利用してゐるのである。

大東亞戦争初頭の展覽會がこの程度の効果を擧げてゐるのは喜ぶべき事であるが、今後もまた、長期戦の伸展に伴ひ、各時機に適した内容と形式とによつて、國民の心を正しく導き現代日本國民に課せられた世界歴史的使命の嚴肅さを深く理解させるために、折り／＼この種の啓發展覽會が開催されることを希望する。

十二月八日、病床にあり高熱になやんでゐた私はラヂオのある室まで起きて行つて宣戦の大詔を拜承した。一月四日には街頭に立つて、陸海軍の軍樂隊に導かれる音樂隊の行進を見送り、六日には宅の庭に立つて、晴れた空を掩ふ空軍の壯觀を仰いだ。假りに若し、寫眞と圖解と文字とを適確に組合はせた大東亞戦争の記念展覽會が上野の美術館に開催されて、その優れた展示形式により國民の心に銘する嚴肅な効果をもつことが出来るとしたら、如何に喜ばしいことであらう。こゝに私の空想するやうな「高級」な記念展覽會も、當局の意向次第では立派に成立する可能性をもつのである。

オペラ座の群像

異教徒の神祠をそのままにかたどつたら・マドレーヌの寺が自動車の渦巻く廣場に向つて端正な柱を列べてるところから斜横に右手へ通ずるブールヴァールは、パリの市中でも賑かな主要街路の一つである。そのブールヴァールが幾つかの道路と複雑に錯交してゐるところに、オペラ座がたつてゐるのである。

交通のめまぐるしい廣場からオペラ座を仰ぐものの眼には、この名高い建物の正面の階段の上に、近世美術史上最大の傑作の一つが存在してゐることを、恐らく氣づかないであらうと思ふ。此處には、十九世紀きつての優秀な彫刻家カルボゝの手に刻まれた群像「舞踏」が飾られてゐるのであるが、この作品はまた、普佛戦争時代のハリにとつて、別の意味から思ひ出の深い作品なのである。

今から振り返つてみると三十年ほどの昔になるが、ロダンの彫刻が非常に讚美されてゐた頃には、この才人がミケランジェロ以來の大彫刻家であるやうに説かれたものである。けれども、實を云ふと、ロダンよりも少し前の時代にフランスの美術界で活動してゐたカルボゝは、作家としての大ききからみても、作品の品質から考へても、ロダンよりは遙かに優れた彫刻家だつたのである。

カルボゝの作品では、堅實な技巧と的確な構想とが常に融合して窺はれるが、殊に、豊麗な肉體を持つ女人像

の表現に於いては、十七世紀のベルニニ以来、彼に比肩し得るほどの作家がなかつたやうに思はれる。かゝる意味から云つても、この「舞踏」は非常に傑出した作品であるが、群像彫刻の立體的な構圖を巧みにまとめてゐる手際に至つては、恐らく、彼の前後に同程度の作例を見出すことが出来なからう。

ところが、この優れた作品が、オペラ座の建築と快よく調和しながら此處に置かれることになつたとき、この群像に表示されてゐる裸形の女達の姿態が風教上よくないと云ふ抗議が出て、今から考へると想像に苦しむほどの論争が繰り返されたのである。何でも傳へ聞くところによれば、この群像に反感を抱くもの一人が、夜のうちにインクの壺を投げつけたことさへあつたと云はれてゐる。

この作品の完成したのは一八六九年であつたと云ふから、その翌年の一八七〇年には普佛戦争がはじまつてゐるわけで、パリの市民達は、この群像をめぐる長閑な論争に耽つてゐる餘裕が、間もなく奪はれてしまつたことと思はれる。従つて、考へ方によつては、普佛戦争のお影で「舞踏」が現在の位置に止まつてゐられたとも、云へるかも知れないのである。

エトワールの廣場の巨大な凱旋門の下に祭られた「無名戦士」の墓標にまで、既に時代の色の染み込んでゐる現在では、普佛戦争の屈辱的な追憶も、遠い昔の出来事になつてしまつてゐることであらう。まして、夜ごとにオペラ座の階段を昇つたり降つたりする人達は、カルポアの群像を注意することすら忘れてゐるに相違なく、更に、この像の製作當時にパリ人を熱中させた論争のことなど、そんな出来事存在さへ知る人は少いであらうと思はれるのである。

撮影所の性格描寫

1

ハリウッドを漫畫化した試みの多い中で、Will Connell の寫眞を集めた *In Pictures, a Hollywood Satire* は異色ある性格描寫に成功してゐる。様々な寫眞技巧を使つて諷刺的な面白味を的確にみせた四十八枚の作品集なのであるが、寫眞と一枚おきに活字だけの頁が交代し、常规的なアメリカ映畫を思はせる一つのストーリーを寫眞とは全く無關係に織り込んである。

そのストーリーは「ハリウッド會議」と云ふ題に因んで、金の威力を無暗に發揮したがるギャングの親分と、落書のあるテーブル・クロスに惱まされてゐる貧乏な洗濯女とを組み合はせてある。また寫眞の方は、概して手際の良いクローズ・アップであるが、中にはアメリカ映畫に特有な思ひきつた辛辣さを聯想させるものも少ない。

Yes-men と云ふのがある。ロイド眼鏡をかけた一人の男が煙草を口にあててゐる團りに、火のついたマッチを持つ澤山の手が取りまいてゐる。*Still-man* と云ふのがある。縞ズボン、ニッカー、ハイヒル、などの聳え立つ床の上に、小さい男が組立寫眞機や道具箱を兩腕にかかへ、前こごみになつて苦しさに歩いてゐる。*Plot*

と云ふのがある。人間の體らしいものを圖案化し、その中心の部分から外側に向つて幾重かの二等邊三角形を波斑状に描いてあるやうにみえるが、これを倒してみると女の腰部のクローズアップがはつきりみえる。Centership と云ふのがある。いづれも眼鏡をかけた社會事業團體の婦人達が、權威ありげな顔をして暗い室の椅子にをさまつてゐる。Find と云ふのがある。胸と腰とに手をあてながら怯えてゐる半裸體の女の小さい姿に向つて、無数のカメラが脅迫するやうに取りかこんでゐる。Columnist と云ふのがある。大きな埃取りの中にゴミを一ぱい入れて雑役夫が立つてゐる前に、鍵の穴の輪廓線が白くオーヴァラップしてゐる。

經濟上の數字の示すところによると、アメリカの映畫工業は鐵や石油や自動車の仲間入りをしてゐるやうである。藝術理論家の中には、「現代の最も強力な藝術」として映畫を禮讃する人もゐる。日本の社會事業團體の間では一種の「映畫狂時代」をさへ現出してゐるほどに、スクリーンの影像が信用されてゐる。けれども實のところ、現在の映畫の大部分は、煙草の如き日常の消費物であり、華かでありながら佻びしい興行物である。其處にウイル・コンネルの寫眞帖の面白味があるわけであるが、考へかたによつては、かう云ふ寫眞帖が一番的確に映畫の本質を捉へてゐるともみられなくはない。映畫に關心を抱く多くの人達の中には、整然とした理論で映畫の本質を決めようと試みてゐる者もあるが、議論が少し總括的になると無数の例外が現はれたり、折角まとめた著書が出る頃には當の映畫が非常に變つてしまつてゐたりする。

同様に、「アメリカらしい映畫」などと云ふ言葉も、一つ一つの作品に就いては容易に通用するが、逆にこれを總括しようとするとき恐ろしくむづかしい仕事になる。勿論さう云ふ試みも適當な材料を整理してゆけば決して不

可能ではなく、「一つの側面觀」としてなら面白い結果も得られるに相違ない。例へばユナイテッド・アーチストの彩色漫畫と、ワーナー・ナショナルのミュージカル物と、パラマウント映畫のタイトルル意匠と、さう云つたやうな轉換の面白味をみせた特殊な要素だけを拾ひ集めて、其處から「アメリカ映畫の論理」を導き出すことは出來さうに思はれる。唯だ然し、それも要するに龐大な「アメリカ映畫論」の一節に他ならないであらうから、全般をつくすのは容易なことでない。

さう云ふ點から考へれば、ウイル・コンネルの寫眞帖を遙かに擴大して、アメリカ映畫のスタイルやスナップを巧妙に組み合はせた大掛りな寫眞帖でもこしらへる方が、反つて本質を捉へる早道であるかも知れない。

二

正確なことは解らないが、日本に輸入された映畫の大部分をみた感じから判斷すると、作品の出來榮えを別としてアメリカ映畫の凡そ八割位は、「幸福な結婚」を歸結點とする極くたわいないスヂから組み立てられてゐるやうである。唯だ其處へ辿りつくまでの曲折に重心が置かれてゐるから、歸結點は要するに一つの約束のやうなものであるが、然し何うかすると、このプロセスを逆にしたやうな映畫に出會ふこともある。

さう云ふ映畫の興味ある示例を私は二つ思ひ出す。何れも、仲の良い夫婦がいつしよに死ぬスヂを持つに拘らず、作品の性質は極端に反對であり、而かも其處には、アメリカ映畫にみられる二つの相反する特徴が、甚だ簡明に浮き出てゐるのである。

その一つは徹底したナンセンス物である。銀行の大株主と云ふだけで他に何も取りえない若者と其妻君とが仲良く陽気に暮してゐる。鮫のやうな形をした大型快速の自動車を乗りまはしながら、飲んだり遊んだりしたあげく銀行の前で朝まで眠り、車役會議を馬鹿にしてからまた夫婦で遊びまはり、木に衝突して二人とも投げ出され、即死して靈魂だけになる。妻君が夫に「天國のラッパ鳴らないわね」と私語く。「今でもおそくないから何か一つ良いことをして天國に入れてもらはうと相談がきまり、銀行の専務の荒寥たる夫婦仲を改善させてやることにする。二人の靈魂が屋根から倒さに専務の家の中をのぞいて安心するのが終りであるか、全體で十巻の長さを思ひ切りユーモラスなものにまとめてゐる。

かう云ふ性質の映畫は、餘程巧妙に扱はないと泥臭くなつたり無意味で馬鹿々々しいものになつたりするのであるが、この作品は、彩色漫畫を發明する國民の子供らしい感覚が、スクリーンに向つてゐる瞬間の貧しい勤勞生活者達を、消費的な大株主夫婦と和睦させてゐるのである。

この映畫に對してもう一つの作品は、恐ろしく憂鬱な心中物である。ドイツからアメリカに來た穩やかな青年が良家の娘と靜かな戀を味ひ結婚して、自然科学を學校で教へながら、可愛らしい男の兒を二人の間にもち生活を樂しんでゐる。アメリカ國民としての義務を誓ひ、友人達から親交の記念カップを受け、つゝましい祝宴を催したりしてゐるうちに、間もなく世界戦争がはじまる。そして、ルシタニア號撃沈の大きい見出しが新聞に現はれた日から、この夫婦は冷酷な敵意の中に圍まれてしまふ。來訪する者もなく、教職からは追はれ、飼犬を殺され、愛兒までも生命を奪はれる。貧困と苦惱に傷ましく憔悴した妻の姿をみながら、アメリカに忠誠を誓つた記

念のカップを取り出して夫は苦がい微笑をうかべる。夫婦の愛情は益々深くなるばかりであるが、妻の生命を案じて夫は止むなくドイツに歸り、妻も野戰病院に勤務してフランスに渡る。あるとき妻は、スパイになつてアメリカ兵の中に入り込んでゐる夫を發見し、自分の居室にかくまひながら夫婦の生活を一夜だけ取りもどす。その翌朝、二人は戦線に向ふアメリカ兵の靴音をきいてゐる。夫を逃がせばこの大勢のアメリカ同胞は戦死するに相違なく、それかと云つて夫を告發することも出来ない。そこで妻は、毒藥のまぜてある葡萄酒の杯を夫と合はせて遠い過去の和やかな祝宴を思ひ出し、氣附かぬ夫を寢臺に伴つて相擁しながら死んでしまふ。

前半が明るく後半が暗く、前半の明るさが餘計に後半の暗さを深めてゐると云ふめづらしい映畫である。まるでアメリカの國民を問責してゐるやうな重苦しい作品だから、興行成績は著しく悪かつたらしいが、それだけにまた、アメリカ映畫でなければみられない特徴を濃厚にみせてゐた。

この二つの作品を限界として、夫婦者を扱つた無数のアメリカ映畫をその間に配列することが出来るわけであるが、この限界は同時に、アメリカ映畫の特徴を最も純粹に表示する二つの型でもある。始めから終りまで嘘で固まつてゐながら景氣の良いジャズ音楽のやうに演技と編輯とをたたみかけてゆく映畫を、普通には「アメリカらしい」と云ふやうである。けれども、全く別な側面からみれば、アメリカほど無方針に生々しく現實の世界を抉り出して、興行映畫につくる國は何處にもなさうに思はれる。

社會の安寧秩序を保つ警務當局をスクリーンの上で最も働かせる國はアメリカであるが、その働かせかたが、またアメリカ風に二様の極端な亂暴さを見せてゐる。

ドイツの映畫界で丁度 *Kulturfilm* にあたるものをアメリカ映畫界に求めようとする場合に、犯罪防止關係の宣傳映畫を拾ひ上げて左程に不當ではあるまい。これ等の短篇物の中で最も興味深いのは知能犯の科學的搜索方法を説明したもので、例へば一つの保險贖事件につき探索から檢舉までの過程を辿りながら、この種の犯罪計畫が結局成功し得ないことを大衆に覺らせる目的をもつものである。これはMG Mなどでシリーズとして製作してゐるが、普通の犯罪映畫や探偵小説より遙かに刺戟的なものが多い。

それから、警務當局の活動するもつと強度なものになると、*Crimen* の威力を示し獻身的な行爲を説明した映畫がある。*Crimen* の活動が決定的であること、武器の扱ひかたに烈しい訓練が行はれてゐること、等を示しながら、警務機關の完備した科學的施設をみせるばかりでなく、射殺されたギャングの親分の屍體までもスクリーンに現はしてある。従つてこの種の映畫をみると、まるでアメリカ全國が兇悪犯人の巢窟であり、市民は常に國內の敵に脅され、當局はこの強敵を相手に不斷の苦戦をつづけてゐるやうに思はれる。

然し、更に激しいものはニュース映畫の中に挟まつてゐる。工場の暴動を鎮壓する當局の活動は、あらゆるニュース映畫のうちで最も切實に市街戰の雰圍氣をみせるものである。催涙ガスの手榴彈が工場内の群衆に向つて無數に投げつけられ、猛烈な檢舉がそれにつづくのである。

これ等の實寫映畫と呼應して、*Crimen* の活動を特に強調した興行映畫が各社で製作されたことがある。何れ

も云はば「決死隊」のやうなものであるが、出て来る武器が機關銃と短銃と爆彈と、時としては戦車でさへあるから、スクリーンの効果は餘り強すぎる。アメリカでも、この種の映畫が反つて惡結果を及ぼすのを知つてその獎勵を中止したと云ふ話をきいた。どの程度の事實か知らないがさうなことがある。

これ等の映畫を綜合して考へると、當時のアメリカでは、スクリーンは警務當局の示威運動に使ふ廣場のやうなものである。そして、これ等の *Crimen* 物は、單に一種の「強烈な刺戟」として興行映畫の製作會社が考へ出したのではなく、當局の宣傳的意圖も參與してゐることは云ふまでもない。而かもさう云ふ「必要」はアメリカの社會にあるらしく想像されるのである。

ところが反對に一般のアメリカ興行映畫では、警務當局が愛すべき道化役を演じてゐる場合が多い。そして、さう云ふ場合の當局は、州知事、市長の類から普通の警官まで、たわいなアメリカ國民の「親しい友」としてスクリーンに登場するのである。

舊弊な教授に拘束されてゐるカレッジの學生音樂團がニューヨークの劇場に押入り總稽古をはじめ。劇場主は警察署長に訴へ、警官隊を出してもらつて學生達を檢束させようとするが、劇場内に入った警官隊は客席にをさまり樂しさに總稽古を見物する。そこで劇場主は警務課長を訪れて *Crimen* を繰り出してもらふが、物々しく武装した彼等は反つて警官達から靜かに音樂をきけと云はれ、いつしよに客席にかけさせられる。最後に劇場主は市長と州知事に抗議を申し込んで軍隊を出してもらふが、軍隊が劇場内に入ると學生達はマーチを演奏し、軍隊も良い氣持になつて着席する。劇場の廣い客席は警官と *Crimen* と軍隊とで一ぱいになり、劇場主は一人で

怒りながら「大統領にかけ合はせようと云ふのか」とつぶやいてゐる。

林檎賣りの貧しい婆さんがゐる。大きいホテルの門衛から客用のレター・ペーパーをもらつては外國にゐる娘に手紙を書き、不自由のない生活を樂しんでゐるやうにみせてゐる。然し、その娘が外國の貴族と結婚して母親を二人で訪ねて來ると云ふので婆さんは困り、いつも林檎を買つてくれるギャングの親分にたのむ。そこで親分が一肌ぬいで知事や市長や警察署長に協力をたのみながら、婆さんを一晚だけ名門の老淑女に仕立てて新婚の娘夫婦を無事に外國へ歸してやる。

かう云ふ例は數へ切れないほどであるが、この二つが中で一番特徴を發揮したものであつた。現實とは全く縁のない映畫だけの世界であるが、その映畫の世界の中でさへ、かう云ふ現象のみられる國はアメリカの他になさうである。

映畫によつてアメリカの國民を最も畏伏させてゐるのも警務當局であるが、愛すべき道化者として國民を常に映笑させてゐるのもまた警務當局である。兩方の餘り極端な場合は日本の檢閲でカットしたが、若し假りにこの二つの側面を最も著しく代表してゐるやうな映畫で一つのプログラムを組むことが出來たら、それこそ最も簡単にアメリカ映畫の特徴を實感させる方法に相違ない。

四

何物をも恐れないアメリカの映畫工業は、時として随分思ひ切つたことをする。アメリカ映畫のおかげで私も

これまでに随分色々なものをみて來た。頭を割られて血だらけになつたラスプーチンが、切られても突かれても死にきらずに、ネヴ河の氷の間から浮き上るところがあつた。みるからに胸の悪くなるやうな片輪ばかりのサーカス仲間が、姦夫と姦婦をかこんで怪異な復讐を遂げる場面もあつた。氷の家に住むユスキモ어의不思議な性慾道徳を極めて克明に描寫したのもあつた。さうかと思ふとまた、ポーランド獨立當時の立役者パデレフスキーが、厳格なピアノ演奏家のままで主演俳優の役目をつとめるのもみた。

既に常識を超越してしまつてゐる筈のその「映畫の常識」さへも平氣で踏み越えるアメリカの映畫工業は、大統領などにも随分變つた人物を作り上げることがある。

N.R.A.の運動がアメリカの映畫界を風靡してゐた頃である。「英雄待望」の群衆心理を十分に満足させた不思議な人物の登場をみたことがある。その人物は大統領に當選してからも、初めは穩健主義の凡庸な政黨政治家にすぎず、面倒な問題には常に解決を避けてゐた。ところが自動車事故で腦震盪を起してから突然に性格の變化を來し、鐵の如き意志の力で國家内外の難問題を果斷に處置するやうになつた。失業者の群が首都に進んで來るのを兵力で阻止しようとする閣員達を解職し、その對策を講ずる議會をも閉鎖する。その代り、ギャングの逮捕には戰車隊を動員し、軟弱な法權を棄て軍法會議にかけてギャングの銃殺を決定する。國營によるピールの製造を開始するかと思ふと、諸國の外交官を軍艦の甲板上に招いて外債の支拂ひを要求する。その對策として軍縮會議の條約破棄を豫告したり、廢艦の空爆演習を實現させたりする。最後に、各國を平和條約の調印に誘ひ、かつてリンカーンが奴隸解放令に署名したと云ふ羽ペンを取つて、自ら平和條約に署名し、突然絶命してしまふのである。

腦震盪でも起さない限り、政黨政治の殻を脱した大統領はアメリカに現はれ得ない——と云ふ皮肉に受け取れる映畫ではあるが、兎も角もアメリカの映畫観衆は、スクリーンの上だけで彼等のヒットラーやムッソリーニを迎へることが出来て満足したのである。

現代住宅の型

假りに若し「理想的な現代住宅」と云ふものを考へてみるとする。どんなに少なく見積つても、二十種類ぐらの見本を列べなければなるまい。斷るまでもなく住宅建築の形式は、住む人の生活様式や趣味の傾向で違つて來るばかりでなく、住む場所の地勢とか氣候とか環境とか云ふやうなものを考慮することも是非必要だからである。

現代風の建築様式を徹底させた高級住宅の例を外國に拾つても、その種類は限りなく多い。廣大なイギリス風の庭園の中に切りかけの圓いチースを小さく置いたやうな氣のきいた住宅もあれば、使ふに便利で形式の美しいアパートもある。

まして日本のやうに、傳統的な座禮式と外來風の立禮式とが並用されてゐる國では、事務所から歸つた勤人も先づ洋服を着物に替へて、はじめで「家に歸つた」氣持になるであらう。アメリカ風の重役室から解放されると狭い茶室の中に落付きたくなる——と云ふやうな實業家もある。

それからまた、かつて國際建築會議の中心議題になつた勤勞生活者の「最少限住居」も、或る意味では「理想の住宅」の一つの場合であらうし、自動車時代の流行となつてゐるウィークエンド用の「移動住居」にも、或る

程度の贅澤さと住み心地の良さが工夫されてゐる有様である。

一冊の著書を僅かな枚数の原稿に切りつめたやうなこの稿では、性質の非常に違ふ四つの「地所」を選び、それ等の地所に私が建てたいと考へる住宅に就いて「形式」の側面から漠然と僅かの要點を拾つてみることにする。

一

東京山ノ手の高級住宅地、例へば、靈南坂を上つた麻布の高臺や、麴町の番町あたりに、敷地も相當に廣く構へも豊かな邸宅を建てるとする。私の選ぶ様式は大體下のやうなところであらう。

鐵筋コンクリート構造、二階建のフラット・ルーフ、外装は白色陶製正方形のタイル、窓と扉は大型ガラスを使ったステイル・サッシに程よい灰色の塗料、全體として明快な外觀が好ましい。

然し、内部の意匠には少し特殊な注文がある。現代建築の多くの作品にみられるやうな室内意匠は、何うも私の氣持にピッタリ來ない。晝間は往々にして餘りに明るく、氣持が落付かず疲れやすい。それから夜は、變にガラランとして冷めたく、靜かに身のまはりを包んでくれる雰圍氣に乏しい。

こね等の缺點を除いて、柔らかく快よい雰圍氣を醸し出すためには、注意すべき點が多いであらう。先づ壁の表面であるが、晝間には庭の綠樹を反映し太陽の光を受け容れるに相應しく、夜間には照明効果を柔らかく浮き出させるに適する——と云ふ様々の光線の性質に調和することが第一條件である。その上に、各々の室の用途と廣さとに従つて、住む者の氣分に程良く順應するデリケートな注意が必要である。考へかたによつては、室内意

匠のうち最も大切で困難なのは壁の表面である——と云へるかも知れない。

其他では、コンクリート構造の室内意匠に何う云ふ具合に木材を取り入れ、木材個有の持味を配合するか？——と云つたやうな問題も、大切でありながら現代の建築家には閑却されがちである。けれども、日本人のやうに昔から木材の魅力を良く理解し、洗練された趣味を養ひつづけて來た民族には、殊に重要な問題である。但し木材の利用は何處までも節度を重んずべきで、過剰な亂費は絶対に避けたいところである。

なほ、照明の形式に就いても、未だ研究されてゐない大切な範圍がありさうに思はれる。物理的な側面は相當に進歩してゐるかも知れないが、心理的な側面は案外にネグレクトされてゐるやうである。

二

京都の東山寄りのシツトリ落付いた靜寂な地域に住宅を建てると考へてみる。今でも南禪寺の周圍には、かう云ふ住宅地が靜まりかへつてゐるが、假りに若し此處に私が自分の家を建てるとすれば何んな形式を選ぶであらうか？ 京都の家に見受ける軽い曲線を描く切り妻の屋根に、吟味した日本瓦を薄く使ひ、外装には落付いた淡い灰色のモルタルを用ひる。然し、日本風のエレベーションに相應しく適宜に木材を配合することは是非とも必要である。外觀のまとめかたは困難でも、やはり二階建てにして、洋風の室を多く使ひたい。

けれども、傳統の紋びに恵まれたその美しい住宅地域は、現代住宅の科學的な考慮を多分に必要とするであらう。近くに東山をもち、樹木多く流水の豊かな地域であるから、庭園を楽しむ生活には適してゐるであらうがそ

の代り、採光を豊かにし、濕氣を防ぎ通風を充分にする——と云ふ保健上の觀點からみると、住宅設計上特に注意すべき點が多さうに思はれる。人を訪ねた場合に氣持は良いが自分で住むには適當でない、と云ふやうな缺陷が生じないためには、風流な外觀の影にかくれた現代科學の充分な利用が必要であらう。

三

東京市の中心地域から相當に離れた住宅地の一種に「分譲地」と云ふものがある。私が選出したのは、小高い丘の一部を整理して、百坪ぐらゐに區劃し、附帯工事も信頼するに足るだけ備はつてゐる土地の一つである。

木骨構造の二階屋に白色セメント瓦の屋根を葺く。僅か百坪ほどの敷地とすれば防火建築法の適用を避け難いから、外装は白色に近いモルタル仕上げとする。丸の内のビルディング街に新しく出來た假建築の事務所を小型住宅にまとめたやうな簡素な家である。

内部はテックスの壁にベニヤ板の天井、音響や溫度を遮斷する必要のない室の間じきりは、簡單にベニヤ板だけでも良い。どうせ郊外電車やバスを利用する程度のもつまい生活を送る家であるから、材料は安價に仕事は手輕いことを希望する。燃料不足の場合を考慮して、間取りもなるべく狭くするが、せせこましい感じがないうやうに、且つ、場合によつては融通のきくやうに設計して置く。小じんまりした生活に相應しく、和やかな氛圍をもつ親しみのある家にまとめる。

四

輕井澤の驛と町とに近く、落葉松の林の間を規則正しい道路が通じてゐる土地に、一定の季節の高原生活を樂しむ家を建てるとする。簡素で明快な自然の中に建つ家は、やはり、この自然と調和した形態をもつて簡素でなければならぬ。鐵材が自由に使へた頃なら瓦葺のトタン屋根に南京下見、ガラス戸を大きく開いて、庭から靴のまま入れるやうにする。室の中も、必要なところだけテックスを張るぐらゐで、ところによつては赤味の杉板を並べて打ち、木材の生地をそのよま壁面の意匠にみせるのも面白い。

輕井澤では生活する人達の心持もまた簡素である。そして、大都會の生活から解放されながら、大都市生活の習慣を其儘に持ち続け、變化した環境と氣分とを味ひながら、都會人の心持とエチケットを一層こまやかに使ひたいと思ふのである。個人の生活を大都會よりも尊重しながら、大都會の社交的氛圍氣を一層自由に味ふのである。

輕井澤の土地の性質から云ふと、主として利用される夏の季節は、濕氣が相當に多く、雨が降り出すと一週間位つゞく代りに晴天の日は太陽の光が非常に強い。それに朝晩と日中とは溫度の差も著しい。

社會的にも自然的にも上記のやうな事情にあるので、此處に建てる家には本來から云ふと一定の規格が出來るべき筈である。例へば、床下はなるべく高く空け通風を完全にするとか、ガラス戸を豊かに使つた廣々とした室を解放して置くと共に、何時でも引こもることの出來る小さい私室を必要とするとか、さう云ふ條件のほかに、

薪の炎える音をききながら團圓するに必要な壁面ストーブも是非なくてはならない。

然し、生活は世情と共に移り境遇と共に變る。そこで、「理想の住居」に何よりも必要なのは、様々の變遷を靜かに受け容れ、そこに満足する「心」である。

子供の寫眞

其一

家庭生活を營み家庭生活を楽しむ多勢の人達にとつて、寫眞は一つの「和やかな贈物」である。とりわけ日本人の家庭にとつては、快よい「惠み」であり得るかも知れぬ。日本人は家庭の悦びとして音楽をもたない。唱ふべき謡もなく、唱ふ悦びの雰圍氣も知らない。然し、外國人からみると、「日本人の國民藝術は寫眞だ」と云ふ氣がするらしい。唯だ「日本人はそれを自覺してゐない」らしく見えるさうである。

ところで日本人の家庭では、この「和やかな贈物」を正しく受け巧みに使つてゐるであらうか？ 全部がさうではなさうに思はれる。勿論、人によつては「家庭寫眞」の楽しみを満足に味ひ、家庭生活に融け込んでゐるその妙味を解してゐるらしいが、往々にして灰汁のある「寫眞道樂」に陥つたり、手際の良い使ひかたを會得してゐなかつたり、さう云ふ場合が相當多さうに推察される。

それ等の點を考慮するとき、一般の家庭寫眞を楽しむ人達にとつて良き模範として役立つ優れた作家が必要になるが、誰でも知るヘッダ・ワルテルのごとき、かゝる意味では最も適當な寫眞家と云へよう。

家庭寫眞の立場から特に興味深い彼女の作品集は「子供の散歩」と云ふ二十二個のシリーズ寫眞をまとめた小

型寫眞帖であらう。日本で取り寄せても僅か一圓以下で、ドイツの優秀作家叢書のうちの一冊である。この可愛らしい寫眞帖に登場する人物は、一人の幼ない少女である。子供はカメラを意識しない。小さい箱をさげた一人のおばさん」が方々連れで遊ばせてくれていると思つてゐるだけである。少くとも、さう云ふ姿に撮つてゐるものばかりで、カメラを意識した表情は何處にもないのである。クッションの上に背を向けて坐り繪本をみるところにはじまり、デッキチェアに顔をあて、眠る姿に終つてゐるこの無邪氣な女主人公は、花の咲く野で小さい體をうづくまらせてゐたり、陽のあたるテーブルでスープをすゝつてゐたりする。鳩に取りかこまれて餌をやつてゐるところや、水きわでいたづらしてゐるところもある。

子供の寫眞家として優れてゐるヘッダ・ワルテルは、また良き「動物の友」である。作品集「わが愛犬帖」や「猫との交友」の中には、家庭寫眞を樂しむ一般の人達にとつて参考となるものが少くない。家畜は、考へかたによつては、複雑な感情をもつ人間よりも、遙かに和やかな「生活の旅伴」である。猫や犬のおかげで人間の家庭生活が豊かになつてゐる場合は多いに相違ないから、かう云ふ家畜類の愛すべき姿を手際良く寫し、極く自然なその表情や生體をみせてくれる彼女は色々なコツを家庭寫眞の友人達に教へてくれるのである。

其二

私のところに子供を寫した二枚の寫眞がある。二枚とも、廣い庭の地面の上に一人の子供を配した寫眞である。夏のはじめにあつたある寫眞家の會合のときにみて大變に氣に入つたので、その作家の〇さんにたのんで、夏の間

間にこしらへてもらつた作品である。

その寫眞のうちの一枚は、畫に向つて右半分の上部の全體からみると凡そ四分の一ぐらいの畫面の中に、駈けてゐる子供を横から寫した姿があり、子供も地面も、カメラの動きにすれて、輪廓が少しぼやけてゐるのである。それからもう一枚の方は、同じく畫に向つて右半分の上部の全體からみると凡そ六分の一ぐらいの畫面の中に石かコンクリートで出来てゐるらしい歐風建築の下の端と、向ふ側にかがんでゐる洋服を着た女と、やつと一人で歩ける位の子供の全身とが寫つてゐて、残りの六分の五ほどの畫面全體は、唯だ平な一面の芝地になつてゐるのである。

この二枚の寫眞は、藝術的意圖の下に製作された作品として私がこれまでみたものの中で、最も素直な悦びを味ふことの出来たところよい作品であつた。

この二枚の寫眞ほどに、子供の世界をすなをに表現した簡素で的確な作品と云ふものは、それほど澤山あるものではない。子供の世界を寫した大抵の作品をみると、何處かしら大人の感覺が浸み込んでゐて、變にこましくくれてゐたり、氣取つたところがあつたり、作意が多すぎたりして、平らかな氣持で味ふことの出来ないのが普通なのである。

ところが〇さんの作品を二枚並べてみると、ほんとうに私自身が子供の氣持になり切つてしまつて、子供の感覺と子供の眼とを透して、空間の大きさをばかり庭の地面に親しむ心持になつて來るのである。恐らく四十何年かの昔に毎日經驗してゐて、その後にはスツカリ忘れてしまつてゐた明らかな悦びの氣持が、この二枚の作

品をみてゐると泌みぐし思ひ出されて來るのである。

私は今でも、非常に古風な装幀を持ったグリムのお伽噺を一冊もつてゐる。そして、子守歌でも聞きたいほどにすねた氣持になつてゐる夜には、枕元の小さい電球の光で、遠い過去の時代から親しみ馴れてゐるお伽噺のどれか一つを讀み、穩かになごんだ心持になつてから眠る習慣を棄てないでゐる。

けれども、グリムの筆になるあのバラードのやうな文章を除くと、その他の作家の書いたお伽噺は、何れも變にこましくやれてゐて、何となしにカスのやうなものが残るのである。たとへば非常に通俗的になつてゐるアンデルセンのお伽噺にしても、ホルゲル・ダンスケと云ふ可愛らしい小品以外のものは、何うも面白く讀めないものである。

尤も、最近になつて讀んでみたエリヒ・ケストネルの「エミールと深偵」などになると、技巧の枯れ切つた名作であつたし、それから、色彩漫畫などの中でも、人魚や小鳥や妖姿や玩具の美しいシリ・シンフォニーは、何物にも代へ難い面白味なのであるが、かう云つた世界のこころよさを感じる機會は、そんなに澤山ないやうに思はれるのである。

それだけに、Oさんからもらった二枚の寫眞が、私の心になごやかな微笑を誘つてくれ、現在の日常のめまぐるしい世界から遠い過去の世界に連れて行つてくれたことを、非常にうれしく思ふのである。

あの作品をOさんに依頼した私の意圖は、そのコンポジションが純粹に寫眞的であつて、繪畫では絶対に表現し得ないところから、美術學校の學生や映畫研究の學生のための教材として、参考にみせるためであつたのである。

るが、書齋の中に二枚並べて置いてみると、觀賞用の作品としても、充分の價值を持つてゐることが解つたのである。

それだけに、かう云ふすななな作品を造る寫眞家をもつとほしいと考へてゐる。同じ子供を題材にとるとしても、大人の感覺からでなく、子供自身の氣持になつてみるのが、この種の作品では絶対に必要なのである。

爐邊の映畫話

三六八

「シエクスピア傑作——残月」と筆太に書いた立看板が木枯しに音をたててゐる。冴え返つた月の下で切符賣場の小窓が開くのを待ちながら、二階の露臺で囃したてる人寄せの樂隊をきいてゐた私達は、良く風邪をひかなかつたものである。

日露戦争の始まる何年かまへ、「活動寫眞」と云ふものをみせてやらうと思ひつゝいた私の母は、女中を供に出遊する私を錦輝館に行かせたのであるが、その時から活動は缺かさず、樂隊のフンまで覺えてしまうほど病みつきになつた。

學校へゆくと出來たての電氣館を自慢する友達もゐたが、館の名が何うも幼稚なやうに思はれ、少し輕蔑する氣持でゐた。女辯士の出現が氣に入らず、丁度「ジゴマ」が評判になる頃から活動を全く觀なくなり、特別な場合のほかは數十年間の鎖國を續け、「太平の夢」をむさぼりつづけたのである。

八疊の座敷いづばいに竹と紙を散らかし、土曜と日曜を戶外にも出す飛行機の模型ばかり作つてゐた。その頃世界始つて以來第一回の飛行大會がフランスで開催され、その記録寫眞が日本にも來た。この映畫ほど實寫で私

の感激を誘つたものは、三十餘年後の現在まで一つもない。随分ボンヤリした實寫には違ひないが、ノートの餘白や黑板に樂書してゐる色々の飛行機がライト、ブレリオ、ボアゼン、ファルマン、アントワネットと出て來るのだから、たまらなかつたのも無理がない。過日パラマウントの試寫室で「翼の人々」を觀ながら、私は自分の少年時代を思ひ出し甚だ懐しい氣持を味つたのである。

「先生、試寫を觀においでになりませんか？ 映寫機の音がガラ／＼云つて騒々しいですが」と、青年畫家S君が私を誘つてくれた。「倫落の女の日記」と云ふ映畫はネットリして面白かつたから良く覺えてゐるが、試寫室が何處にあつたか全く思ひ出せない。

一體に此の時分の試寫室はロケーションが全然私の記憶にない。マン・レイの「ひとで」などが入荷したときの試寫も、小さい地下室で箱のやうに狭く、松竹のY君が自分のオーヴァをコンクリートの上に敷いてくれ、それに腰をおろして膝を抱きながら觀たのを覺えてゐるだけで、何處のビルディングか全くわからない。

寒い晩に新潮の座談會があつた。大衆作家、藝術派作家、劇作家、映畫監督、文藝批評家、と大人数だつたが五所平之助が川端康成氏と私とを誘ひ、蒲田の撮影所に「伊豆の踊子」を觀に來いと云ふ。今から考へてみると良く蒲田までゆく氣になつたものだと思ふが、コタツを入れた自動車の中で冷え切つた體をもてあましてゐた。

昔は良く午前十時の試寫と云ふものが邦樂座であつた。寒い朝でも馳けつけたが、その頃は恐ろしく暇もあつたやうだし體力もあつたらしい。

ひと頃は、仕事の必要から試寫を缺かさないうやうに工夫してゐたが、時間割が仲々面倒である。朝六時に起き九時まで原稿を書き、十時から十二時まで講義をして午後の試寫にゆく。然し、一週十數時間の講義を持つてゐると、何うしても午後にかゝる。そこで時折行けない試寫が出て來るが、其後にはそれも餘り苦にならなくなつた。

震災の名残をいつまでも止めたバラック官廳では、映寫室は甚だ虐待されがちであつた。文部省の委員會など當時は午後九時ごろまでかかつたが、雪の晩など可成り閉口だつた。午後三時の西陽が中央氣象臺の風速計にあつてゐるのを窓越しに觀ながら、際しない議論を繰り返してゐるうちに、狭い室内に早くも夕暮が忍び込み、ボーイのはこんで來る三皿の洋食を薄暗い電燈の下で食べ終ると、それからあとは半ば雑談になる。故人になつた内務省理事官の田島太郎氏とダルマ・ストーブをかこみ、たわいない談笑に晚くなつたこともあつた。映畫法の實施まで、足かけ九年續いた舊制度の委員會であるが、世間には出ないやうな怪異な映畫や愚劣な映畫を、澤山みる唯一の機會だつたから、私個人にとつては大變ためになつた。長く續けてゐる仕事ではないが「過渡期の經驗」としては甚だ有益であつた。

二月二十六日は雪が深かつた。上野の科學博物館講堂で開いてゐる映畫講習會に約束があるので、眞白に美しい公園を通つて博物館に行つた。講師室に入ると事務をとつてゐる役所のM君が「その情勢は如何です」と云つた。雪のことかと思つて問ひ返すと「未だ御存じないのですか」と驚き、その朝の出來事を教へてくれた。私が直ぐ「聽講者はそれを知つてゐますか」と尋ねると「未だ話してありません」と云ふ答へだつたので、何事もないうやうに講演を終り、借りてあつた「乙女心三人姉妹」を寫してみせた。夕方近く、深い雪の中を進む自動車の窓から「その情勢」を觀察しようとしたが、何處も靜かで何事もなく、雪のため一層ヒッソリしてゐるやうであつた。

シナリオ十人會の編輯者を通じて伊丹萬作氏から贈られた「影畫雜記」と云ふ書物は、映畫に因んで書かれたあらゆる本の中で、私を最も樂しませてくれたものである。自分で装幀したのだと云ふことだが、この本を手にとつてみた感じからが既に垢ぬけしてゐる。何となく愛玩したいやうな氣持のする本だが、中の活字の使ひかたも紙質の選定も、また装幀に良く調和してゐる。少しの破綻もないのである。それから本文も口あたりが柔かく味にコクがあり、神經もゆきとどいてゐて非常に快よい。何等かの藝術にたづさはりながら物を書いてゐる人で、かう云ふ味の出せる者は幾人もない。畫家の中では齋藤清方氏が特別に優れてゐるだけであるし、音楽家、建築家、寫眞家、などを見渡しても、かう云ふ才能を持ち合はせてゐる人はちよつとゐない。のみならず、本職の文壇にも、かう云ふものの書ける人は極く少しかなさうに思はれる。詩や和歌や俳句などの道に徹して文章と感覺とを長年の間練へて來た人は別だが、職業的な、ジャーナリズムの所謂「隨筆家」の雜文など、仕上げが粗悪で到底比べものにならないほどである。

ところで、伊丹萬作の名に結び付いて直ぐ思ひ出される一群の映畫を、この「影畫雜記」と比較してみると、

少くとも私にとつては甚だ不思議な現象に出會ふのである。と云ふわけは、極く古い「國士無双」から可成り新しい「赤西蠣太」までの代表作を一ト通り思ひ出し、更に「故郷」などと云ふ類のものを加へて考へてみると、映畫よりは文章の方が優れてゐるやうにみえるのである。

これは甚だ天禮な云ひかたかも知れないし、伊丹萬作の名を持つ映畫には常に敬意を表してゐる私であるが、觀てしまつたあとの印象から考へると、どの作品にも多少の粗が氣になり、非常に感心しながらも若干の不満を味ふのである。尤も中には、さう云ふ缺點が目立たず、極くスラリと上つてゐるものもあるが、さう云ふ作品は反つて印象が淡く、特に感心する程度に達してゐないやうである。

日本映畫に不満を抱く人の中で、監督の教養が足りないことを指摘してゐる者の意見は私も大體賛成である。或時も内務省檢閱理事官の田島太郎氏と酒に親しみながら、監督に就いて感じる第一の缺陷は何だと思ふかきいてみたが、やはり「先づ教養のないことだ」と答へてゐた。一般の問題としては私も常にさう思つてゐるのであるが、伊丹萬作のやうに、立派な著書をまとめる人々には、少くともこの意見は通用しない。それに教養どころか、感覺も十分に透徹してゐるし趣味も落付いてゐるのだから、この監督の作品から感じられる多少の不満の原因を、さう云ふところに求めることは何うも出來さうにない。

私は未だ一度もこの監督に會つたことがないから何んな人か知らない。長い間親しくしてゐたら映畫に出て來る缺點の原因も解るかも知れない。然し恐らく、文章と異つて映畫作品は伊丹萬作一人のものでないところに、一番主な理由があるのであらう。

一般的な話として、私は監督に會ふことを餘り好まない。多くの人は、まるで辯解の鎧で身を固めたやうな具合である。曰く「首腦部の意見」曰く「時間の不足」曰く「費用の缺乏」曰く何々、曰く何々、と聞かない前か
ら解つてゐるやうなきまり文句が無限に並ぶが、監督自身の缺點を反省した言葉は少しも出ないばかりか、子供
を欺ますやうな理由まで平然と口にする者が少なくない。伊丹萬作と云ふ人がかう云ふ人種にぞくするか何うか私
は知らないが、映畫監督の多くに辯解の鎧のユニフォームを常用させるに至つた原因は兎も角も存在してゐる。
そして、同じやうな辯解を使ふ他の藝術家は、建築家とレビュー演出家とであることを考へ合はせてみると、文
章と映畫とを比べることのナンセンスさを感じる。教養の點にしても、小説家や評論家の方が粗をみせないで
むと云ふ程度の違ひかも知れず、映畫監督だけを責めるわけにはゆかないやうに思はれる。

二

映畫監督の中で普通寫眞の趣味を多分にもつてゐるのは、私の知る限り五所平之助氏である。寫眞雜誌などに
發表されるその作畫をみると、五所平之助監督の映畫に現はれる畫面構成を思はせるものが澤山ある。餘程前の
ことだが、パウ・ウォルフのライカ宣傳巡回寫眞展が小西六のホールで開かれたとき、會場で五所監督に會ひ
「ひとつ五所平之助普通寫眞展でもやつてみたらどうです」と云つたことがある。近頃のやうに歌舞伎俳優の寫
眞展が流行するなら、映畫監督の普通寫眞展など遙か以前に實現してゐるべきであつたらう。普通寫眞家と
しての五所平之助はこの監督特有の持味を割合にみせてゐるから、歌舞伎俳優諸君の隠し藝などよりは、展覽效

果もあるし一般のアマチュアにも實質的に有益なのである。

けれども、五所平之助監督の映畫をみると、時としてその普通寫眞趣味がスクリーン効果を減殺したり、
煩瑣な感じを與へたりしてゐるのを見受けるのである。映畫監督が是非とも持ち合はせてゐなければならぬ藝
術的教養は、文學、演劇、音樂、舞踊、建築、寫眞、等である。映畫も寫眞と同じくカメラを通して表現され、
而かも畫面の切り方は程良い長方形なのだから、普通寫眞と映畫との關係は常識で想像するより遙かに密接な筈
である。従つて、映畫監督が同時に普通寫眞を立派にこなすと云ふことは非常に望ましいことなのである。

ところが、この二つのカメラ藝術の間には大變な相異點がある。斷るまでもなく、映畫は動くが寫眞は動かな
いのであるから、畫面効果の上でも、寫眞と映畫とではむしろ正反對の場合がある。多くの寫眞アマチュアの中
にはこの點を無視して徒らに映畫のカットを眞似する流行があり甚だ困るのであるが、五所平之助監督の映畫は
何うかすると、普通寫眞の構圖趣味が過ぎる。普通寫眞の場合なら程良く落付く筈の構圖が、スクリーンの上
では甚だ煩はしい印象を與へる。小道具の配合が餘り念入りで、人物が動くさせこましくなるのだが、その上
に五所の監督する映畫では、俳優の動きが特に多い。應接間であつたと話しをしてゐるシーンでも、お嬢さんは
立つたり座つたり、椅子からソファに移つたりする。そこで、五所監督の映畫では凝り性が二重になり、煩瑣
なものになり易いのである。

この二重の凝り性が適當に調和して使ひ分けられたら、何んなに好都合かわからないであらう。

「母と子」の試寫をみた翌日である。この映畫の原作「秋扇」の收めてある作品集をもつて矢田津世子氏が來訪された機會に、私は原作者の氣持をきいてみた。この映畫は松竹大船の作品としてはむしろ例外的にサラ／＼あがつてゐたし、灰汁のないところに好感のもてるものであつた。「奥様に知らすべからず」と云ふ處女作が出來たとき、「新人の作だから」と大船の企劃部に誘はれ、ちよつと面白いと思つたことがあつたが、大船調を或意味から徹底させたあの映畫からみると、今度の「母と子」は反つて大船らしからざるところが氣に入つたのである。「この程度なら貴女は幸な部類ですよ」と原作者には非禮かも知れぬ返事をしたのも、そんな氣持からであつたが、矢田氏の歸つたあとで「秋扇」をよんでみると、原作者の不滿の肯かれる部分も色々思ひあたつた。その中でもファースト・シーンは、原作を度外視しても感心出來ないところであつたが、原作を比べてみると尙更にさう云ふ氣がした。

雑誌「日本映畫」に載つてゐるシナリオ（柳井隆雄氏脚色）をみると、ファースト・シーンは映畫と同じである。仕舞の先生の家で、田中絹代が舞つてゐるところに母からの電話がかゝる。確か「羽衣」だつたと記憶するが、日本舞踊なら兎も角、この女優に面白くもない仕舞などをさせ、それを眞先にもつて來る製作者の考へは、ストーリーに向つた瞬間から私には理解し得なかつた。ところが、原作の書き出しをみると下のやうになつてゐる――

「夜來の秋雨に冷えた空が朝の光をうけて澄みきつた青色をたぶたぶした水面に遠々しく映してゐる。知榮子は池の端にしゃがんで饅頭敷を糸から抜いては小さく割つて投つてゐる。黙を目がけて二匹の沈んだ緋の色が近づいて來る。緋鯉を眺めてゐると、知榮子はいつも一種の佗しさに襲はれる。ひと坪たらずの池の廣さを七寸の身長でこなしてゐる二匹の緋鯉の身の上が、自分ら母娘に似通つてゐると思はれるからである。」

このままで良いファースト・シーンが出來上るではないか。變な仕舞より遙かに落付いてゐる象徴的な味も豊であり、畫面にも使ひ易く寫眞的效果も十分に認められるこの原作のファースト・シーンを何うして映畫の製作者は棄權したのであらうか？

澁谷實と云ふ人には未だ會つたことがないから、何んな辯解をするか私には解らない。定期的な「首腦部の注文」で……を此處でもまた繰り返されるかも知れないが、原作者の談によると、仕舞では扇を落さないのを映畫製作者は失望してゐるやうだつたと云ふから、恐らく、凝り過ぎてこんなことになつたのであらうと、私はアッサリ善意に解釋して置くが、稍もすれば映畫監督の着想に宿りがちなこの種の凝り方は、凡そ「映畫的」でないし平常から考へてゐるのである。

それでゐるこの映畫は、建築セットなどになると甚だ吟味が足りず、かう云ふ性質の母と娘が暮してゐる住居としては著しく不似合な室の感じが氣になる。試寫のあつたあと私は石井柏亭氏と銀座に出てお茶を飲みながら話したが、外國映畫を見馴れた目で日本映畫をみた石井氏には、セットと小道具の誤謬や不調和が特に氣になつたらしく、繰り返すその缺點を話してゐた。

然し、そんなところもこの作品が特に悪いのではなく、時代物でも現代物でも、日本映畫をみてゐる限り、セ
ットと小道具とは先づ目をふさいでゐなければならぬ。だから、私などは、極く稀に、雰圍氣にピッタリ合
つた室内意匠や道具類を使つた日本映畫に出會ふと、いつまでもそれを忘れないほどである。

放送と映畫

夏のはじめであつた。「輕井澤に歸る汽車の中で讀んでくれ」と笑ひながら渡された謄寫版の臺本を、或る期待
を感じながらもらつた私は、翌日、汽車に乗ると直ぐ讀んでみた。「二人の世界」の放送臺本で、鳥津保次郎が撮
影中であつた。私のいつもの癖で、この臺本をもらつたとき、鳥津がかう云ふ作品にとりかかつてゐることを、
はじめ「實感」として知つたのである。毎週の役所の委員會では會議の終つたあとで先々の豫定に就いて、雜
談的に大體の報告をうける習慣なので、内務省の檢閲當事者から「二人の世界」の話も一と通りきいてゐた筈で
あるが、原作なりシオリオなり、さう云ふ具體的な材料を手にしないと、うかつな私には、何うも記憶に残り難
いのである。

「二人の世界」の放送臺本は、久し振りでかう云ふものを讀んだせいか、非常に私の注意を惹いた。一體に私は
現在の放送局の方針には餘り希望を抱いてゐないので、特に聴きたいと思つてゐる音楽の放送などを除くと、ラ
ヂオを利用する場合は極めて少なく、まして、ラヂオ・ドラマの如きものに至つては、全く聴取する興味を持た
ないのである。そのため、何時どう云ふものが放送されたかも知らない。何かの必要からラヂオ・ドラマを参照
する場合には、放送臺本を借りて讀むくらゐのものである。日活で作つた「爆音」などは、ラヂオ・ドラマの間

題を調べたとき、幾種類もまとめて臺本を借りた中であつたので、田坂の作品が出来る遙か前から、何處かで映畫化したら面白いだらうと考へてゐたものである。その代り「雲雀」の方は、東京放送局に面倒をかけ、手数を煩はして大阪から取り寄せてもらつたほどで、放送會館内に臺本の整理室でも出来ない限り、臺本の借り出しは斷念してゐるほどである。

「二人の世界」の意味する二人なるものが登場人物の誰を指すのか私は知らない。然し、私が放送臺本から受けた感じで云ふと、二人の技師を意味してゐるやうに思はれた。營利的な經營方針をとつてゐる會社の主脳部に直屬する技師長と、製作技術を科學的基礎の上に改善しようとしてゐる研究部員と、この二人の技術家を透して、背後に秘む時代の動きを感じさせ、此處にこの劇の重點を置くとき、はじめて「二人の世界」と云ふ題名が活きて來るやうに思はれた。

而かもこの場合、會社の技師長と研究部員とは、決して類型化された標本のやうな人物でなく、「活きた」現實の人間が描かれてゐるのである。年若い研究部員は、自分達の仕事を、個人の利益から離れ新しい日本の建設にたづさわる者の純眞な氣持から、熱心に守らうとしてゐる。年若い技師長は、若い研究部員達の要求を良く理解しながら、會社の主脳部の方針に従はなければならない立場にある。若い研究部員は家族を養ふ負擔もなく明朗に暮してゐるが、年とつた技師長の方は、女子大學に通つてゐる長女をはじめ二人の男の子をもち、女中も置かず夫婦親子の五人で、會社の俸給が許す範圍のつましく和やかな生計をたててゐるのである。

此處に、現代の日本らしい社會を背景にした二人の世界がある。純眞な研究部員は自分達の技師長を尊敬し信

頼してゐるだけに、會社内部に對する技師長の態度を著しく不満に思つてゐる。また、技師長は、若い研究部員の熱心な氣持を良く理解もし、その將來を頼もしくも思つてゐるのであるが、主脳部の重壓の下に何とも仕方なく、不本意ながら若い研究員の氣持を無視した形であるのである。

この二人の間を、無意識のうちになぐやうな形で、此處に配合されてゐるもう一人の中心人物が技師長の娘であり、この三人を中心に置いて其他の色々な人物が登場して來るのである。従つて、この劇の場面としては技師長の家庭が主になり、家庭の雰圍氣がこの作品全體の基調となるのである。

放送臺本で「二人の世界」をよむと、家庭の雰圍氣が相當に良く浮き出てゐるやうに思はれた。ラヂオ・ドラマとして演出する場合、印象のまとまつたものになるか何うかは疑問に思はれたが、島津保次郎のやうに、長年

の間、家庭の雰圍氣描寫を扱ひつけてゐる監督が扱ふとしたら、良い映畫が出来さうに想像されたのである。夏の終りに近いころ、私の期待してゐた映畫「二人の世界」が出来上つた。役所の委員會でこの作品が審議に出たので、上京すると直ぐ私は役所の映寫室でこの映畫をみた。録音や演技に可成りの難點があり、今頃になつて未だこの程度にある日本の映畫界を、いつものことながら残念に思つたが、それでも、現状で相對的に觀れば優れた作品に相異なく、家庭物としての内容の扱ひ方も新鮮であり健全であつた。これだけ積極性のある内容をもつた家庭物は、これまで殆どなかつたと云つて良いとさへ考へた。

さう云ふ意味で、私はこの作品に相當な價値を見出し、或程度の満足を感じたのであるが、その代り、放送臺本で讀んだとき味つたやうな雰圍氣描寫の快い基調が大部分消えてしまつてゐるのに氣がつき、少しばかりの幻

滅をも併せ感じたのである。

然し、この幻滅に似た氣持は、映畫作品の出來榮から感じられたのでなく、むしろ、放送臺本を読みながら私の勝手に想像してゐたものが、全く消えてしまつたところから來てゐるのである。放送臺本を通して唯だ聲だけの世界を想像し、耳から感じる家庭の雰圍氣を腦裡に描いてゐた後に、映畫の本質とも云ふべき寫實的な描寫に出會つたため、私の心の焦點を急に合せ直して、日本映畫の約束を即座に思出すことが出來なかつたのである。

それだけに、臺本から想像してゐなかつた色々の矛盾が氣になつたが、中でも特に技師長の家庭の雰圍氣を構成する最も直接的な要素の一つとして、この住居のセットが氣になつた。技師長の家庭は、女中も使はず家族だけでつましく暮してゐる家であり、子供達の教育費と父親の俸給生活との間に切實な關係をもつ家である。映畫に出て來る技師長の住居は、別に贅澤な家ではない。室數も少なく、子供達三人は、一室の中で勉強してゐるのである。ところが、それにも拘らず、家族達の氣持の裏に豫想されてゐる生活程度と住居の具合とが、何處となく喰ひ違つてみえたのである。

その結果、両親の話をきいて子供達が學校を止めると云ひ出すあたりの心理の動きが、何となしに取つてつげたやうになり、單純な感情にかられてゐると云ふ以外に、解釋し難く思はれがちである。いつも映畫を觀馴れてゐる私の友人なども同じやうな印象を受けたらしい。けれども、さう云ふ缺點は、聲だけで構成されてゐる放送臺本からは、少しも感じなかつたことである。映畫に限つてこれを感じるのは、セットの造り出してゐる家庭の雰圍氣が、臺詞から受ける雰圍氣の基調に調和しないからであらう。一體に家庭の氣分を出すため使はれるセッ

トは、大宮殿だの工場だのと違つて非常に地味な注意を必要とするのである。映畫そのものが粗つぽく出來てゐる場合なら、セットなど何うでも良い。また、類型的な人間ばかり無雜作に集まる家族の場合にも、住居に神經を勞費することはなからう。それに對して、家庭内の雰圍氣描寫が細かくゆきゆわつてゐる作品では、所謂「生活の容器」である住居が非常に大きな役割を受持つのである。

然し、さう云ふ部分的な問題は別として「二人の世界」を島津保次郎の數多い家庭物の中に組み入れてみると、また特殊な面白味が出て來るのである。遠い昔に製作された「隣の八重ちゃん」を改めて回顧するまでもない。一番手近には「嫁ぐ日まで」があり、その少し前には「兄とその妹」と「お加代の覺悟」がある。少しは私の見おとしたものもあるかも知れないが、島津の作る家庭物を興味深く思つてゐる私は、このシリーズを出來るだけ觀ることにしてゐる。

「お加代の覺悟」と「兄とその妹」が同じ年のうちに發表され、今年はまだ「嫁ぐ日まで」と「二人の世界」が完成した。私はこの四つの作品を何れも好むのであるが、面白いことにこの四つは、内容の性質からみても、二つづつが對になつてゐる。「お加代の覺悟」と「嫁ぐ日まで」との二つが何れも結婚問題をテーマにしてゐるのに「兄とその妹」と「二人の世界」とは會社の生活を主題に選んでゐる。さう云ふ意味では、この二つづつの家庭物二組が、何れも同じやうな組み合わせになつてゐるのである。

日本の映畫界には、日本人の日常生活を扱つた優秀で健康な作品が、一つの種類として望ましい。その點では「二人の世界」をも含めた島津の家庭物など好ましい作例である。

八

南イタリアの旅日記

私がイタリアを訪れたのは、十九年の昔である。書齋のガラス越しに良く晴れた空を仰いでみると、丁度十八年前のいま、私のつづけたる旅の断片が、自づから心に浮んで来る。貧しい生涯を通して、温たためて来た追憶の断片である。

一月十一日

ナポリの旅宿から驛に車を馳つたときは未だ暗かつた。驛の構内にあるピュッフエで、カフェーを飲みサンドウィッチを食べる。發車は七時である。

ポンペイ附近の海岸に沿ふてサポテンの野を過ぎる車窓の外に、なだらかな裾をひくベスピオが、昔ながらの煙をゆるやかに吐いてゐる。サレルノの町を俯瞰してから山を下ると、枯草に掩はれた單調な平原である。

やがて、岩肌の堅い丘が低く連り荒野の遠く展ける彼方に、藍色の細い線を描いて海が現はれる。ペストゥムである。荒野の枯草の黄色い面の中に、枯草に似た色をした神殿の廢址が三つ並んでみえる。

寂びしい小驛に汽車を降りた私達は、白く埃つばく眞直な道を歩み、神殿の廢址の前にあたつた。中央がボセイ
ドンの神殿である。古典ギリシヤの神殿の現存する遺構の中で、保存状態の特に良いものの一つである。左に近